# 仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

【Ｎコード】
Ｎ７９８２Ｗ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ライダー達の前に現われる異なる世界からの者達。彼等は何故ライダー達の世界に来たのか。
ライダー達とそれぞれの世界の戦士達のクロスオーバー作品です。

## 参戦作品

仮面ライダー　エターナル

＝インフィニティ
参戦作品
仮面ライダークウガ
仮面ライダーアギト
仮面ライダー龍騎
仮面ライダーファイズ
仮面ライダー剣
仮面ライダー響鬼
仮面ライダーカブト
仮面ライダー電王
仮面ライダーキバ
仮面ライダーディケイド
仮面ライダーダブル
仮面ライダーオーズ
仮面ライダーフォーゼ

百花繚乱サムライガール
戦国乙女
祝福のカンパネラ
魔法少女まどか☆マギカ
フリージング
ＩＳ－インフィニティ＝ストラトスー
これはゾンビですか？
バカとテストと召喚獣
バカとテストと召喚獣にっ！
ドラゴンクライシス！

にゃんぱいあ
探偵オペラミルキィホームズ
ＤＯＧＤＡＹＳ
緋弾のアリア

# 第一話　集うライダー達その一

第一話　集うライダー達

紅渡はこの時町の中にいた。名護啓介も一緒だ。
名護はその紅にだ。鋭い目で言った。
「確かにいたな」
「はい、ここにいました」
紅も鋭い目になり名護の言葉に答える。
「何かがここに」
「いた。しかしだ」
「あれは何だったんでしょうか」
「何だと思う」
名護は己の隣にいる紅の顔を見ながら彼に問うた。
「あれは」
「少なくとも今出ているグリードじゃないですね」
「そうだな。そしてドーパメントでもない」
「どちらでもないですね」
「あれは。むしろ」
「悪霊だよな」
キバットがだ。二人の周りに出て来て言う。
「そうした感じの奴だったよな」
「そうだ。あれは悪霊だ」
名護は確かな声でキバットの言葉に頷いた。
「虚ろな白い姿、そして底知れない悪意」
「それってまんま悪霊の特徴だしな」
「悪霊、それを操る存在か」
「それが僕達の今度の相手でしょうか」
紅は怪訝な顔になり名護に問い返した。
「グリード以外の」

「そうなのだろうか」
紅の言葉にだ。名護は顔を顰めさせてだ。
そのうえでだ。こう言ったのだった。
「違うかも知れない」
「違いますか？」
「この悪霊の様なものは今まで我々が戦ってきた相手とは全く違う」
「それは確かですね」
「そうだ。何もかもが違う」
「物理的な攻撃は効きますけれど」
しかしだ。それでもだというのだ。
「何かが決定的に違いますね」
「この世界に元からいるのか」
名護はこうも考えた。
「そして我々の前に来ているのか」
「といいますと」
「あの悪霊は我々の世界のものとは全く違う」
名護は目を鋭くさせて紅に話す。
「他の世界から来たのではないのか」
「違うとなると一体」
紅は名護の言葉に首を捻りだ。そうしてだった。
怪訝な顔になりだ。名護に問い返した。
「他の世界、他の世界から出て来た」
「そうした存在か」
「ディケイドがそれぞれの世界を回りましたけれど」
紅はこのことからだ。推理していき名護に話していく。
「その世界の何処からか来たんでしょうか」
「その可能性はあるな。だが」
「だが？」
「ライダーのいない世界もある筈だ」
名護もまた推理を働かせながら話す。

「その世界の何処からか来たのだろうか」
「あの悪霊達は」
「まだ確信はできない」
決め付けはできない、そうだというのだ。
「しかしだ」
「怪しいですか」
「そう思う。あの悪霊はこちらの世界の存在には思えない」
それはだ。どうしてもだというのだ。
「ではどの世界から来たのか」
「そうした話になりますね」
「少なくとも今回のこともスサノオは関わっている」
「そうですね。それは間違いありませんね」
このことは名護だけでなく紅も確信できた。何故ならライダー達が戦う理由はスサノオと戦うことだからだ。それでこのことは確信できたのだ。

## 第一話　集うライダー達その二

そしてスサノオはあらゆる世界で仕掛けてきている。そのことも知っているからだ。
名護も紅もだ。スサノオの陰は確信できた。
それでだ。紅はこんなことも話した。
「じゃあ今度あの悪霊が出て来たら」
「その時はか」
「少し調べますか？」
名護に顔を向けて提案する。
「あの悪霊の何かしらの手掛かりを手に入れて」
「そうだな」
名護もだ。紅の言葉に頷く。
「そのうえで決めよう」
「そうしましょう」
「ああ、それでだけれどな」
キバットがだ。また言ってきた。
「ひょっとすると悪霊だけじゃないかも知れないぜ」
「悪霊だけじゃないって？」
「何か他の妙な気配も感じるんだよ」
そうだというのだ。
「何かな。こっちに来てるな」
「こっちに？」
「とりあえず花鳥に行こうぜ」
その喫茶店に行こうというのだ。
「あそこにな」
「花鳥に？」
「ああ、そこに他のライダー達の誰かが来てる筈だからな」
それでだ。そこだというのだ。

「そこで話を聞こうぜ」
「確か今あそこには」
今度はだ。タツロットも出て来た。そのうえで紅と名護に話すのだった。
「城戸さんと秋山さんがいますよ」
「あの人達がいるんだね」
「そうか。彼等が」
「はい。ですからそこに行きましょう」
また話すタツロットだった。
「それで情報収集といきましょう」
「それがいいな」
「そうですね」
名護が最初に言い紅が頷く。
「じゃあ兄さんにも連絡します」
「彼も悪霊達と戦っているのか？」
「ちょっと待って下さい」
紅は自分の携帯を取り出してそのうえで兄である登太牙に連絡を入れる。そのうえで耳元に当てる。そしてわかったことは。
彼はだ。電話の向こうの兄に問い返した。
「えっ、そっちには？」
「そうだ。悪霊ではなかった」
「それで出て来たのは」
「妖しい女だった」
それだったというのだ。女だとだ。
「奇妙な術を使う女だった」
「女！？グリードでも悪霊でもなく」
「女だ。何かに変身することもなかった」
電話の向こうの登は弟にさらに話す。
「だが力はかなりのものだった」
「そうだったんだ」

「あれは間違いなく只者ではない」
登はこうも言う。
「言うなら魔人が。実際に俺一人では危うかった」
「兄さん一人では」
「五代さんが来てくれた」
そのだ。五代の力も借りてだというのだ。
「それで何とか退けたが」
「けれどその女の正体は」
「わからない」
登の返答は紅が予想したものだった。
「全く。何者かも」
「じゃあ兄さん、とりあえずは」
どうしたいか。紅は兄に話した。
「花鳥に来てくれるかな」
「あの店か」
「うん、あの店でね」
集まりだ。そうしてだというのだ。

## 第一話　集うライダー達その三

「話をしよう」
「そうだな。それがいいな」
「じゃあ。僕達も今から行くから」
こう話をしてだ。そのうえでだった。
紅は登との電話のやり取りを終えた。そうしてだ。
携帯を切ってポケットの中に入れてからだ。名護に顔を向けて言った。
「じゃあ今から」
「花鳥に行こう」
「けれど。女ですか」
「それだよな」
ここでまた言ってきたキバットだった。
「俺さっき妙な感じがするって言ったよな」
「それがそうなのかな」
「そうかもな。とりあえず今はな」
「グリード以外にも」
「ああ、ひょっとしたら今回かなり大掛かりに話になるかもな」
キバットはふとこんなことを言った。言いながら紅の傍をホバリングしている。
「派手な戦いにな」
「その可能性はあるな」
名護も言う。
「これまで以上にだ」
「折角グリードとの戦いが一段落してきそうなのにですか」
タツロットはこのことを残念に思いながら話す。
「今度はもっと派手にですか」
「それが僕達の戦いだけれどね」

紅は自身のライダーとしての運命を受け入れながら話す。
「だから。仕方ないよ」
「そうだよな。スサノオが諦めるか完全に滅ばない限りな」
どうかとだ。キバットも言う。
「永遠に続くよな」
「それは受け入れるしかない」
名護もそのことは受け入れていた。既にだ。
そうしてだった。そのうえでだった。
彼等は花鳥に向かうのだった。そうしてだった。
花鳥に着く。その内装よりは広い喫茶店の中を見回すとだ。
そこにもう登がいた。彼以外にも。
城戸真司に秋山蓮もいる。二人は紅達が店に入るとすぐに彼等が立っているカウンターの中からだ。こう言ってきたのだった。
「おい、話は聞いてるよな」
「また出て来た」
「はい、今度は女らしいですね」
「それもかなり妖しい」
「俺達も悪霊と戦ってきたところだよ」
「しかしだ。ここでだ」
城戸と秋山は二人に応えながら話していく。
「そんな訳のわからない女まで出て来てな」
「話はさらにややこしくなってきた」
「そうだ」
その通りだとだ。ここでカウンターの席に座る登も話す。
「とにかくおかしな女だった」
「それでどうした女だったのだ」
名護はカウンターに向かいながら登に尋ねる。
そうして彼の隣の席に座りだ。それからだった。
まずは城戸と秋山にコーヒーを尋ねてだ。再びだった。
「妖しいことはわかるが」

「ちょっと聞かせてくれるかな」
紅も登の隣に来た。彼が右で名護が左でだ。登を挟んだ形になる。
そのうえで彼は紅茶を頼んでだ。兄に尋ねたのだった。
「どんな女だったの？」
「右目に眼帯をしていた」
登はまずはそこから話した。
「そして白髪を後ろに長く伸ばし」
「白い髪を」
「そうして伸ばしていたのか」
「丈の短い高校生の制服に唐草模様を思わせるストッキングに手袋をしていた」
ここまで聞いてだ。コーヒーと紅茶を淹れていた城戸と秋山が言った。
「何かそれってよ」
「一度見たら忘れられない姿だな」
「俺もそう思った」
その女と戦っただ。登自身もそうだというのだ。

## 第一話　集うライダー達その四

「そしてその力はだ」
「力も」
「かなりの強さなのか」
「そうだった。刀を使っていてかなりの腕だった」
それこそだ。ライダーとなった登を以てしてもだったのだ。
「ダークキバになっても俺の方が押されていた」
「ダークキバになった兄さんでも」
「そこまで強かったのか」
「五代さんがいなければ」
そのだ。共に戦った彼がいてくれたからだとも話すのだった。
「退かせることすらままならなかった」
「おい、それって洒落にならないだろ」
「そこまでの強さなのか」
城戸と秋山もだ。そこまで聞いてだ。
唸る様に言ってだ。そうしてだった。
「何か悪霊が増えただけでも厄介なのにな」
「また出て来たか」
「それで何者なんだよ、その妖しい女は」
城戸は腕を組みながら首を捻る。
「まあスサノオが関係してるのは察しがつくけれどな」
「それは間違いないな」
秋山もそのことについては同意だった。
「俺達の前に出て来たのならな」
「だろうな。ドーパメントの次はグリードでな」
「悪霊も出て来たと思ったが」
「今度は女かよ」
「敵が増える一方だ」

「何かよ。このまま増えるとな」
どうなるか。城戸はまた話す。
「そのうちどうにもならないことになるんじゃねえのか？」
「少なくともそうはさせない為にだ」
どうかとだ。秋山はコーヒーを淹れながら話す。
「俺達がいるからな」
「だよな。じゃあとりあえずはな」
どうかとだ。城戸は紅茶を淹れ終わってだ。紅に出してからだ。
そしてだ。また言うのだった。
「その女とも戦うか」
「それでだが」
名護はだ。ここまで聞いてだ。
そのうえでだ。こう登に尋ねた。
「その女は何処に去ったのだ」
「去った場所か」
「そこに案内しなさい」
いささか命令口調でだ。登に言う。
「そうして実際にまた戦えば色々とわかる筈だ」
「だよな。これまでスサノオが関わって外見が人間の奴ってな」
「いなかったからな」
城戸と秋山もだ。このことについて指摘する。そうしてだった。
ここまで話してだ。彼等もだった。
「とりあえず登、いいか？」
「女が去った方に案内してくれ」
「わかった。そこはだ」
何処なのか。彼が言おうとするとだ。
不意にだ。城戸の携帯が鳴った。それで出るとだ。
「おい、今どうしている」
「何だ、乾かよ」
「そうだ、俺だ」

こうだ。乾が彼に携帯で言ってきたのだ。
それでだ。彼が言うことは。
「今草加や三原と一緒に埼玉アリーナの方にいる」
「そこで悪霊が出たのかよ。それともグリードか？」
「いや、女だ」
その言葉を聞いてだ。そこにいた全員がだった。
眉を顰めさせだ。乾の話に注目した。
「女！？」
「まさか」
「片目の白い髪の女だ」
また言う乾だった。
「その女が出て来て今から戦うところだ」
「御前等三人だよな」
「ああ、とりあえずいけると思うがな」
「今からそっち行っていいか？」
女の外見まで聞いてだ。城戸は乾にすぐに言った。

## 第一話　集うライダー達その五

「埼玉アリーナの方にな」
「何かあるのか？」
「ああ、あるんだよ」
あるから行くというのだ。
「だからな。今からな」
「そうだな。女だけじゃない」
ここでだ。さらにだった。
「悪霊まで出て来た」
「悪霊までかよ」
「俺達三人だけじゃ辛いかもな」
乾は冷静に分析して述べた。
「悪霊達も出るとな」
「数はどれだけいるんだ？」
その悪霊の数をだ。城戸は尋ねた。
「一体」
「百、いや二百はいる」
乾はその数についても答えた。
「かなりの数だな」
「わかった。じゃあ今すぐ行く」
城戸は乾に対して即答した。
「ちょっと待っていてくれ」
「女は俺達が相手をする」
乾達でというのだ。
「悪いが悪霊達はな」
「任せろ。それじゃあな」
こう話してだった。城戸は携帯を切り自分のズボンのポケットに収めた。それからだ。

紅達に顔を戻してだ。こう言ったのだった。
「おい、それじゃあな」
「そうだな、すぐに埼玉アリーナに行くぞ」
「そこですね」
秋山と紅が応える。そうしてだった。
彼等はすぐに店を出てだ。それぞれのバイクで埼玉アリーナに向かった。バイクを飛ばしその前に来るとだ。既にだった。
登が言ったそのままの姿の女がだ。三人のライダーと戦っていた。彼等は埼玉アリーナの入り口のところでだ。女と戦っていた。
仮面ライダーファイズと仮面ライダーカイザがだ。仮面ライダーデルタのフォローを受けながら片目の女と戦っていた。しかしだ。
ファイズとカイザが正面から攻撃するが。それでもだった。
「甘いわね」
「くそっ、これでも駄目か！」
「今の攻撃も効かないのか」
ブレイドの攻撃を弾き返されてだ。ファイズとカイザはそれぞれ悔しさに満ちた声を出した。
そしてだ。デルタもだ。
その両手に持つ銃で撃とうとする。しかしだった。
ビームをあえなくかわれた。それを見てだ。
「くっ、またか！」
「無駄だ三原」
カイザがデルタに対して言う。
「こいつに銃は通じない」
「見切ってるっていうのか！？」
「そうだ。間違いない」
カイザは女と間合いを取りながら話す。
「こいつは既に見切っているんだ」
「じゃあどうすればいいんだ」
「このまま攻めるか？」

ファイズが二人のライダーに問うた。
「そうするしかないか？」
「いや、それは駄目だ」
カイザがすぐにそれは駄目だとした。
「さっきやっても何の効果もなかったな」
「ああ」
「俺達のブレイドではこの女の剣には勝てない」
「そうだな。忌々しいがな」
「こいつは剣の達人だ」
カイザはそのことをもう把握していた。戦いの中で。

## 第一話　集うライダー達その六

「かといっても下手な距離じゃ銃も見切る」
「じゃあどうすればいいんだよ」
デルタが二人のすぐ傍まで来て問う。
「このままじゃラチが明かないぞ」
「こっちは三人だ」
しかしだ。ここでだった。カイザはこう言ったのだった。
「三人いる。相手は一人だ」
「オルフェノクの王と戦った時と同じだな」
その状況を聞いてだ。ファイズは言った。
「そうだな」
「そうなる」
「じゃあどうするんだ。今は」
「いいか、乾君はだ」
ファイズを見てだ。カイザは告げた。
「正面からブラスターモードで向かえ」
「あれでか」
「俺は奴の右に回る」
カイザはそうするというのだ。そしてさらにだった。
「三原、君は奴の左だ」
「三人で囲んでそれでか」
「一斉に攻撃を浴びせる」
そうするというのだ。
「それでどうだ」
「少なくとも今までよりはいいな」
ファイズは女を見据えて言葉を返した。
「目くら滅法に仕掛けるよりはな」
「そうだ。この女が何者かは知らない」

それはカイザにもわからないことだった。
「だがそれでもだ」
「こいつもやっぱり」
「スサノオの縁者だ。間違いなく」
「あら、知っているのね」
スサノオという名前を聞いてだった。女は。
悠然とした笑みになってだ。こう三人に言ってきたのだった。
「あの方のことを」
「あの方だと！？」
「ではやっぱり貴様は」
「スサノオの」
「あの方に導かれてここに来たから」
それでだ。知っているというのだ。
「素晴らしい方ね。あの方は」
「糞野郎だ」
ファイズは女がスサノオを褒め称える言葉を言うのを聞いてだ。
吐き捨てる様にしてだ。そのうえで言い返したのだった。
「あいつだけはな」
「話は聞いているわ」
女は三人にこうも言ってきた。彼等の周りには無数の悪霊達が蠢いている。彼等の間合いは間も無くファイズ達を掴めるところにまで達していた。
その中でだ。女は悠然として言うのだった。
「あの方からこちらの世界のことをい」
「こちらの世界！？」
「今確かに言ったな」
まずはファイズとカイザがだ。その言葉の意味に気付いた。
「ということは」
「こいつはやはり」
「そうよ。元々はこの世界の人間ではないわ」

その通りだとだ。女は言い切った。
「私達の世界では侍がまだいるのよ」
「侍！？」
デルタがそれを聞いて言う。
「侍がまだいる世界」
「そうよ。その世界から来たのよ」
「言っている意味がわからないな」
ファイズは女の言葉を聞いてまずはこう言った。
「侍がいる世界。シンケンジャーとかいう連中じゃないな」
「シンケンジャー？」
その戦士達については女は。
怪訝な声になってだ。こう言うのだった。
「彼等のことは知らないわね」
「そうか」
「私達の言う侍は生身で刀やそういったものを手にして戦う存在」
「昔ながらの侍だな」
カイザは女の話を聞いてこう察した。

## 第一話　集うライダー達その七

「そういう存在がか」
「私達の世界の侍よ」
「相変わらず話はわからないが」
ファイズは女の話を最後まで聞いてまずはこう返した。
「少なくとも御前がこの世界の奴じゃないことはわかった」
「そしてスサノオと関わりがある」
カイザが指摘したのはこのことだった。
「その二つは確かだな」
「その通りよ」
「じゃあ御前は何者なんだ？」
「私が何者か、というのね」
「そうだ。何者だ？」
「柳生」
女は名乗った。
「柳生というのよ」
「柳生！？というと」
柳生と聞いてだ。カイザは。
いぶかしむ声になってだ。こう女に問い返した。
「あれか。かつて江戸幕府に仕えた柳生家の」
「あの家か」
「確か剣豪も生み出した」
ファイズもデルタもだ。柳生家のことは知っていた。
「あの家の人間か？」
「まさか」
「しかしこの世界の人間ではない」
カイザはこのこともだ。話したのだった。
「違う世界の柳生家の女だな」

「そうなるわ。それにね」
「それに？」
「今度は何だ？」
ファイズとデルタが今の女の言葉に問うた。
「一体」
「何だっていうんだ」
「貴女達が戦っているこの者達は」
今彼等の前にいるだ。その悪霊そのものの連中のことだ。
「何と呼んでるのかしら」
「悪霊じゃないのか？」
「そうじゃないのかな」
ファイズとカイザが答える。
「そうとしか思えないんだが」
「違うというのかな」
「悪霊ね。言い得て妙ね」
その呼び方はだ。女も悪くはないとした。
しかしだ。女はだ。こう言ったのだった。
「けれど違うわ」
「この連中は悪霊じゃなかったのか」
「近いわ」
近いことは近いとだ。女はデルタに答えた。
「けれど。彼等は悪霊じゃないのよ」
「じゃあ何だ」
ファイズは女を見据えて問う。その周りには今もだ。その者達が迫ろうとしている。
「この連中は」
「魔獣」
女はこう言った。
「彼等は魔獣というのよ」
「魔獣！？」

「この連中は魔獣」
「そう呼ぶのか」
「彼等の世界ではそう呼ばれているわ」
そうだとだ。女は三人のライダー達に答えた。
「彼等はね」
「彼等の世界、か」
カイザはこのことに反応を見せた。
そのうえでだ。また女に問うたのだった。
「では御前とこの連中はそれぞれ違う世界にいるんだな」
「その通りよ」
「複数の世界からこの世界に介入してきている」
カイザはこうも言った。

## 第一話　集うライダー達その八

「そういうことだな」
「頭の回転が速いわね。全てはそのままよ」
「ということはだ」
「スサノオは複数の世界から送り込んできている」
ファイズとデルタにもだ。このことがわかった。
「そういうことか」
「つまりは」
「そうよ。貴女達も結構頭がいいわね」
「頭が悪ければな」
「とっくの昔に死んでいるからな」
「そうね。それに」
しかもだとだ。女はまた言った。
その言葉と共にだ。今だった。
紅達がだ。この声をあげてだ。
「変身！」
「変身！」
それぞれその言葉と共にだ。ライダーに変身してだ。
魔獣達に突き進みだ。薙ぎ倒していくのだった。
その中でだ。仮面ライダー龍騎になっている城戸がファイズに問うた。
「おい、乾無事か！」
「城戸さんか」
「ああ、無事か？」
「何とかな」
無事だとだ。乾も彼に応える。
「生きているさ」
「そうか、それは何よりだ」

「詳しい話は後になるな」
ここでだ。乾は。
右手をスナップさせてだ。それからだった。
再び剣を手にしてだ。女と対峙して告げた。
「御前が何者かはわからないがな」
「それでもだというのね」
「御前は敵だな」
「結果としてそうなるわね」
「それにスサノオがいるのなら」
女の後ろにだ。それならばだというのだ。
「倒す。詳しい話も聞いてやる」
「あの方と戦う為に」
「御前がそれを望むのならそうしてやる！」
こう叫んでだ。ファイズは。
順手に持ったその剣、赤い光を出すその剣を振るいだ。
女に突き進もうとする。その前にだ。
入力してだ。そのうえでだ。
その姿を赤く変えた。その姿になりだ。
女に進む。そのうえで言うのだった。
「これならだ」
「私に勝てるというのかしら」
「少なくとも負けるつもりはない」
それはないとだ。ファイズは女に返す。
「だから今この姿になったからな」
「ブラスターモードね」
女はファイズの今の姿を見てだ。こう言ったのだった。
「今の姿は」
「何っ、知っている！？」
「ファイズのブラスターモードを！？」
他のライダー達もだ。女の今の言葉にだ。

このことを察してだ。そうして言ったのだ。
「やっぱりスサノオからか」
「聞いていたんだな」
「そうよ。貴方達のことは全てね」
女は魔獣達と戦う龍騎とナイトにも話してきた。
「わかっているわ」
「仮面ライダーのこともか」
「全て」
「知っているわ。そしてね」
女はファイズと戦いながらだ。そのライダー達に話してきた。
「私とこれ以上戦いたければ」
「どうしろというんですか？」
仮面ライダーキバが女に尋ねた。

## 第一話　集うライダー達その九

「そうしたければ」
「私達の世界に来ることね」
悠然と笑ってだ。女はライダー達にこう告げてみせた。
「そちらにね」
「御前達の世界にか」
仮面ライダーイクサが女の言葉に対して返した。彼はライジングモードになりそのうえで魔獣達と戦っている。
「来いというのか」
「そうよ。来ることね」
悠然と笑ったままだ。女はライダー達にまた言う。
「そうすることね」
「それは誘いだな」
仮面ライダーサガ、登が言った。
「そう思っていいな」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。女も悪びれずに返す。
そのうえでだ。ファイズ達を見て言うのだった。
「さて、今から来るわね」
「その通りだ」
「ここで決めさせてもらう」
彼女の左右にそれぞれついたカイザとデルタが答える。
「この状況ならだ」
「倒せない筈がない」
「確かにね。このままだとね」
女も彼等を目だけで見回しながら返す。
「危ういわね」
「だから言ってるだろ」

ファイズがさらに攻撃を仕掛けながら女に言う。
「御前はここで倒す」
「敵は少しでも少ない方がいい」
「どうせ御前以外にもいるんだからな」
「話を聞きたいとは思わないのね」
女はファイズのその攻撃を己の剣で受け止めながら三人に返した。
既にjカイザとデルタも攻撃に入っている。今まさに三人の同時攻撃がはじまろうとしていた。
その中でだ。女は言うのだった。
「私達の世界のことを」
「生憎な。そんなつもりはないからな」
ファイズが女に対して返す。
「どうせこれ以上話すつもりはないんだろう」
「確かに。それはその通りよ」
「それに御前がこっちの世界に来られるんならな」
そこからだ。ファイズも察したのだ。
「俺達も御前の世界に来られるな」
「この魔獣達だったな」
「この連中のいる世界にも」
「その通りよ。貴方達仮面ライダーは」
女は平然としてだ。彼等に話してみせる。
「私達の世界にも来られるから」
「そういうことだな。それならな」
「ここでだ」
「倒させてもらう」
三人同時に言ってだ。そのうえでだ。
カイザがだ。二人に言った。
「あれで決めるぞ」
「あれでか」
「一気になんだな」

「この女にはあれしかないだろうからな」
それでだ。ファイズとデルタに話してだ。そうしてだった。
三人のライダー達は同時にだった。
それぞれのポインターでだ。ロックオンした。
赤、黄、そして青の三つの光の円錐が女に突き刺さる。それでだった。
三人同時に跳びだ。蹴りを浴びせにかかってきた。
「面白い攻撃ね」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおーーーーーーーーっ！！」
叫び声を挙げながらだ。攻撃を浴びせる。しかしだ。
女はそれを受けはしなかった。微笑んでからだ。
姿を消してしまった。後に残ったのは。
声だけだった。女の声が攻撃を空振りさせ空しく着地した三人に届いた。
「流石ね。それを受けたら私も危うかったわ」
「くっ、逃げたか」
「ええ、そうさせてもらったわ」
女の声が何とか体勢を立て直しながら歯噛みするカイザに応えてきた。

## 第一話　集うライダー達その十

「仮面ライダー、噂通りね」
「出て来い！」
デルタが顔をあげて女に叫ぶ。
「俺だってやられっぱなしじゃいられるか！」
「だから。今倒される訳にはいかないのよ」
女は姿を出さない。しかしだ。
それでも声だけがしてだ。ライダー達に対して言うのだった。
「どうしても私を倒したければ」
「そっちの世界に来い」
「そういう解釈でいいのかな」
「その通りよ。待っているわ」
楽しむ声でだ。女は告げてだ。
やがて気配も全て消えた。後に残っていたのは。
ライダー達だけだった。既にだ。
魔獣達も倒されるか消えていた。それを見てだ。
ファイズが最初に変身を解いた。そうして乾巧本来の姿になりだ。
そのうえでだ。同じく変身から戻っていた草加雅人、三原修二にだ。こう声をかけたのだった。
「あいつの世界に行くか？」
「そうだな。そうするか」
「向こうから言ってるんだしな」
草加と三原もだ。乾のその言葉に応える。
「今は行き方がわからないにしても」
「そうしてあいつを倒さないとな」
こうだ。二人が話しているとだ。
彼等の目の前にだ。白い小さな生き物が出て来た。
猫と兎を合わせた様な姿をしている。目が赤く耳は尻尾の様にな

っている。その謎の生きものが出て来てだ。彼等に言ってきたのだった。
「君達はあっちの世界よりこっちの世界に来て欲しいんだけれどね」
「何だ御前は」
「僕はキュウべえっていうんだ」
こうだ。この生きものは名乗ってきた。
「あの魔獣達がいる世界の者なんだよ」
「魔獣達の？」
既にライダーから戻っている紅がその言葉に問い返してきた。
「あの連中のことを知ってるんだ」
「うん、知ってるよ」
この生きものキュウべえは己の身体を猫の様に舐めながら紅の問いに答える。
「けれどあの女のことはあまり知らないよ」
「それでも魔獣達のことは知ってるんだよね」
「僕達の世界のことだからね」
だからだとだ。キュウべえはまた答えた。
「ずっと戦ってきてるしね」
「色々と聞きたいことがあるんだけれどな」
城戸もキュウべえに尋ねる。
「いいか？話を聞かせてもらってな」
「うん、その為にここに来たんだしね」
キュウべえは城戸の問いにまた答える。
「何でも聞いてよ。魔獣のことなら」
「それではだ」
ここまで話を聞いてだ。秋山も言った。
そのうえでだ。ライダー達は。
それぞれの仲間達に連絡をする。そうしてだった。
レストランアギトに集るのだった。それからだった。
白い店の中でだ。キュウべえの話を聞くのだった。

キュウベえはそれぞれの席に座る戦士達にだ。こう話すのだった。
「まずは僕達のことを話そうか」
「僕達？」
「僕達というのか？」
「うん、そうだよ」
まずはこうライダー達に話すのだった。
「僕達だよ」
「おかしい表現だな」
葦原涼がアギトの面々が座るテーブルにいるキュウべえに言い返した。
「あんたは見たところ一匹だが」
「それでも僕達なんだよ」
「あんた達は何匹もいるのか？」
「そうなんだ。僕達は固体はそれぞれだけれど一つの目的の為に動いてるから」
だからだというのだ。
「僕達なんだ」
「何かそうした話を聞くと」
葦原と同じ席にいる氷川誠も言う。

## 第一話　集うライダー達その十一

「君達って群生生物みたいなんだけれど」
「そう考えてもらっていいよ」
無表情そのものにだ。キュウべえは氷川の言葉にも応える。
「その通りだしね」
「何だよ、それ」
その話を聞いてだ。こう言ったのは。
剣崎一真だった。彼は仲間達と共に別の席にいる。
だがその席でこう言ってだ。首を傾げるのだった。
「頭の中身は同じなのか？」
「身体は違うけれどね」
その剣崎にも話すキュウべえだった。
「そうなってるんだよ」
「そうなのか」
「話わかってくれたんだね」
「大体だけれどな」
わかったと。剣崎も返す。
それを見てからだ。キュウべえはライダー達に話を再開した。
「それでだけれど」
「ああ、それでだよ」
「まずはあんたがどうやってここに来てるか」
「それを聞きたいんだけれどな」
「僕は門を通って来てるんだ」
そうして行き来しているとだ。キュウべえは話す。
「それぞれの世界の門をね」
「あれか」
今度言ったのは門矢士だった。
「それぞれのライダーに行き来していたあの様なものか」

「あれっ、僕達の世界だけじゃないんだ」
「あの女の世界も含めてだ」
門矢はキュウベえにこう話す。
「俺達はそれぞれの世界を行き来して戦ってきた」
「それなら話は早いよ。この門のことを知っているのはあちらの世界じゃ僕とあの魔獣達だけなんだ」
「それとスサノオだね」
野上良太郎がこう言う。
「スサノオが世界を通しているかどうかはわからないけれど」
「それは僕も知らないけれど」
キュウベえも知らないことがあるというのだ。
「とにかく門はね」
「それ何処にあるんだよ」
城戸が門の場所を尋ねる。
「それがわからないとどうしようもないだろ」
「門の場所はね」
それは何処にあるかというと。
「いつも急に出て来るから」
「門が出て来てか」
「その都度移動する？」
「それぞれの世界に」
「そうした理屈か」
「つまりあれだな」
ここまで話を聞いてだ。左翔太郎は自分の席で腕と脚を組んだ状態で話した。
「スサノオがその都度俺達をその世界に行かせるんだな」
「ふうん、スサノオってそういうことをするんだね」
キュウベえはこのことははじめて知ったという感じだった。
「それは知らなかったよ」
「あいつはそうした奴だ」

今言ったのは天道総司だった。
「俺達と戦い。色々と仕掛けてだ」
「そうして？」
「俺達がそれをどう防ぐのかを見て楽しみにしている」
「楽しみねえ」
キュウベえはそのことについてはだ。
首を傾げさせだ。無表情のまま話す。
「僕にはわからないね」
「楽しみがわからないのか」
「僕達には感情がないんだ」
そうだとだ。キュウベえは天道だけでなく他のライダー達にも話す。

## 第一話　集うライダー達その十二

「だから。そうしたことはわからないんだ」
「そうなのか」
「そうなんだ。それはわかっておいてね」
あらためて話すキュウベえだった。
「けれど少なくとも君達の敵じゃないし」
「隠していることはあるのかな」
今言ったのは草加だった。
「君はどうも何かを隠すタイプの様だが」
「隠せたら隠すけれど」
その場合はそうすると。このことは否定しないキュウベえだった。
だがそれでもだ。今はだというのだ。
「君達には隠せないみたいだね」
「隠してもすぐに見破ってみせるさ」
北岡秀一はこのことを堂々と告げた。
「伊達に敏腕弁護士をやってる訳じゃないからな」
「だよね。隠しても何にもならないし」
キュウベえは既にライダー達を見抜いていた。彼等は戦闘力だけでなく頭脳においてもかなりのものだということをだ。
「隠さないよ。僕の知ってる限りのことを話すよ」
「それでどうなっているんだ？」
響鬼もまたキュウベえに尋ねた。
「スサノオは色々な世界に介入しているみたいだけれどな」
「少なくとも僕の世界の魔獣はスサノオが後ろにいるんだ」
キュウベえはまずはこのことから響鬼に話す。
「それとあの女にもそうみたいだね」
「魔獣を操ってその世界のか」
「仮面ライダーに挑んでいる」

「そうなのか？」
「僕達の世界には仮面ライダーはいないよ」
それは否定するキュウべえだった。
「魔法少女はいるけれどね」
「魔法少女？」
「何だ、そりゃ」
「女の子が戦ってるのか？」
「僕達の世界ではそうだよ」
彼等の世界ではだ。そうだというのだ。
「仮面ライダーはいないけれど魔法少女が戦ってるんだ」
「あの魔獣達とか」
「そうしてるのか」
「そうだよ。それで君達が僕達の世界に来る時になったら」
その時こそはと。キュウべえは話す。
「門が開くから。それまでは待っていることだね」
「待つまでもないだろうな」
今言ったのは橘朔也だった。
「スサノオはいつもあちらから仕掛けて来る」
「そうですよね。あちらから来るからこそ」
「門もすぐにやって来る」
橘は剣崎にも話す。
「すぐにだ」
「じゃあその時にその世界に入って」
「あちらの世界のスサノオの企みを潰す」
橘は己の考えを淡々と話していく。
「そうするべきだ」
「ええ、それじゃあ」
「ううん、やっぱり仮面ライダーは頭がいいみたいだね」
キュウべえにもこのことはよくわかった。
「僕があれこれ言う必要はないみたいだね」

「あいつと戦いはじめてかなりになるからな」
秋山がそれが何故かを話す。
「そのやり方は知っている」
「だからなんだ」
「それに俺達が全員城戸みたいならだ」
何気に向かい側の席に座る城戸のことも話す。
「とっくに死んでいた」
「おい、俺が馬鹿だっていうのかよ」
「違うのか？」
「くそっ、こんな時でもそう言うのかよ」
「まあ。そっちの赤いライダーの人はね」
キュウベえは秋山に言われて少し怒った城戸を見て言った。

## 第一話　集うライダー達その十三

「直情的な性格みたいだけれど頭はそこまで悪くないと思うよ」
「あれっ、わかるのか？」
「うん。だって頭が悪いとそれこそすぐに死ぬからね」
だからわかるというのだ。
「ある程度の頭はあるよ」
「だよな。俺これでも大学だって出てるしな」
「とりあえず。僕の説明は不要な位皆頭はいいね」
「そうだよ。頭が悪いと今頃死んでたよ」
「じゃあ。まあ僕は暫くここの世界にいるから」
キュウベえは断る様にして話す。
「僕のわかる限りのことなら話すからね」
「わかった。ではまずはだ」
天道が言う。
「その開いた門に入るとしよう」
「それにしても何か大変なことになってきたな」
城戸は腕を組んでこう言った。
「スサノオが他の世界にもちょっかいかけてることはわかってたけれどな」
「それが仮面ライダーのいる世界にもだからな」
今言ったのは相川始だ。
「他の戦士達にもそうしていたとはな」
「全く。暇な奴だ」
秋山は表情を変えずにこう言った。
「何かとな」
「全くですよ」
良太郎は少しぼやいてる感じになっている。
「あちこちの世界に関わってるんですね。本当に」

「問題はどれだけの世界に関わっているかだね」
フィリップが考えるのはこのことだった。
「果たして幾つの世界に関わっているのか」
「多分関わっているのはあの二つの世界だけじゃない」
天道はこう見立てた。
「おそらく。俺達の今度の戦いはだ」
「それだけに長く激しいものになる」
「そういうことか」
「戦いははじまったばかりだな」
響鬼は少し気さくな感じで話した。
「じゃあ。気長にいくか」
「何か余裕だな」
「あれこれ深刻に考えても仕方ないさ」
その気さくな笑みでだ。響鬼は乾にも返した。
「戦うことは変わらないんだからな」
「それはその通りだな」
「だからな。油断は禁物だが気楽にいこう」
また言う響鬼だった。
「鍛えていってな」
「何か違うね」
キュウベえは響鬼の言葉を聞いてだ。
右の後ろ足で頭の後ろをかきながら言った。
「魔法少女達と」
「何が違うんだ？」
今問い返したのは小野寺ユウスケだった。
「俺達とその魔法少女の何処が」
「強いっていうかね。割り切ってるよね」
そこが違うというのだ。
「魔法少女達は諦めって言うかね。そういうのがあるんだけれどね」
「魔法少女がどういった存在かはまだよく知らない」

門矢はまずはこう言った。
「しかしだ。俺達はだ」
「仮面ライダーは？」
「ライダーになった理由は様々だ」
それこそ人それぞれだ。血の問題だったり運命的なものだったり自分で選んだりだ。だが共通しているものはあるのだった。
それは何か。門矢は話すのだった。
「だがライダーは何があろうと。例え死のうと」
「ああ、それは聞いてるよ」
キュウべえは門矢の今の言葉にすぐに言葉を入れた。
「君達は例え死んでも何度でも蘇るんだったね」
「そしてスサノオと戦う」
「それが君達の運命だったよね」
「俺達はその運命を受け入れている」
そうだというのだ。
「人間としてスサノオと戦う運命をだ」
「人間としてなんだね」
「そして人間だからだ」
「人間だから？」
「だからこそ仮面ライダーだ」
そうした意味もあるというのだ。
「だからだ。どの世界でも俺達はライダーとして人間としてだ」
「戦うんだね」
「そうさせてもらう」
こうした話をしてだ。彼等はだ。
戦いに向かうことをだ。キュウべえに告げたのだった。
仮面ライダー達の戦いがまたはじまった。それは彼等にとってこれまでの長い戦いに匹敵する激しい戦いになる。彼等もこのことを予感していた。

第一話　完

2011・8・13

## 第二話　にゃんぱいあその一

第二話　　にゃんぱいあ

ライダー達はあらゆる世界に赴きスサノオと戦う決意を固めた。
しかしだ。
そのそれぞれの世界への門はまだ開かれていなかった。そしてだ。
あの女も魔獣達も出て来なかった。この事態には。
彼等はだ。少し拍子抜けしたものを感じていた。
それは五代雄介も同じでだ。パートナーであり親友でもある一条薫にだ。こんなことを話していた。
「今のところは何よりですね」
「その魔獣達が出て来なくてか」
「ええ。平和が一番ですから」
屈託のない顔でだ。一条に話すのだった。
「何よりですよ」
「しかしだ」
それでもだとだ。一条はその屈託のない笑顔の五代に話す。
「安心はしていられない」
「はい、スサノオは絶対に仕掛けて来るからですね」
「話は聞いた」
その五代からだ。キュウベえの話を聞いたというのだ。
「そのキュウベえだな」
「本当の名前はインキュベイダーというらしいですね」
「仮面ライダーのいない世界でもスサノオは仕掛けてきている」
「そうです。人間に戦いを挑んでいるんです」
「あいつが他の世界にも仕掛けていることは知っていた」
ディケイドの頃にだ。それは判明していた。
しかしだ。この現実についてだ。一条は話すのだった。
「だが。仮面ライダーのいない世界にもか」

「スサノオは介入してきていたんですね」
「そうしていたとはな」
一条が言うのはこのことだった。真剣な面持ちで話す。
「それは考えていなかったな」
「そうですよね。仮面ライダー以外にもですか」
「人間ならばか」
一条はここでこう言った。
「仮面ライダーでなくとも挑んでいるのか」
「若しかしてスサノオは」
五代は笑顔から考える顔になってだ。一条にこう述べた。
「あれですかね」
「いえ、門矢君が人間ならって言ってまして」
そこからだ。考えての言葉だった。
「そこから思ったんですけれど」
「どうだというのだ？」
「人間であれば仕掛けてくるんじゃないでしょうか」
そうしているのではないかとだ。五代は言うのだった。
「それでなんじゃ」
「人間だからか」
「はい。仮面ライダーは人間ですよね」
「そうだ。人間だ」
このことはだ。一条も五代と長い間共に戦い生きてきて五代という人間を見てきてだ。このことがよくわかっていた。
「御前は姿が変わるがそれでも人間だ」
「そうですよね。ですから」
「仮面ライダーは人間だ」
このことはだ。一条は断言した。
「紛れもなく人間だ」
「その人間ならどんな戦士も仕掛けてくるんじゃないでしょうか」
「退屈を紛らわせる為」

これが大きかった。スサノオにとっては。
「そして人間という存在を見る為にだな」
「だから仕掛けているんじゃないでしょうか」
「そうだろうな」
五代の言葉にだ。一条も頷いた。
「言われてみればだ」
「そいう考えるのが妥当ですよね」
「スサノオはそうした存在だ」
一条もだ。スサノオについては熟知していた。長い戦いの中で。
「人を見たいのだ」
「あえて仕掛けてですか」
「最初は違っていたのだろう」
そしてこうも言うのだった。
「まだ。ショッカーの初期はな」
「あの頃はですか」
「おそらく真剣に世界征服を考えていた」
「その頃はですね」
「そうだ。しかしだ」
「それがどうして変わったんでしょうか」
「仮面ライダーと戦い」
そのショッカーはだ。ライダーと戦い続けていた。

## 第二話　にゃんぱいあその二

そしてだ。そこでだった。
「おそらく。時期的には仮面ライダーニ号が出て来てから」
「確かかなり最初ですよね」
「そうだったな。仮面ライダー一号が欧州に経ち」
ショッカーとの激戦の中で、である。
「仮面ライダー二号が日本に残ってから」
「あの頃にですか」
「スサノオの考えが変わった様だ」
その辺りからだというのだ。
「二人の仮面ライダーと戦い」
「そうして」
「仮面ライダー、ひいては人間を見ていてだ」
「世界征服の考えを変えたんですか」
「表向きは違っていた」
ショッカー、ひいてはバダンまでだ。その考えは同じだった。
「世界征服のままだった」
「けれどそれは」
「あくまで表向きだ」
それだけのことだったというのだ。
「それだけだった」
「では実は」
「仮面ライダーとの戦いを楽しむようになっていた」
そうなっていたとうのだ。スサノオは。
「その証拠に作戦もだ」
「戦いのそれがですか」
「世界征服の為の作戦ではなくなってきていた」
「ですね。言われてみれば」

五代もだ。一条のその話を聞いてだ。
考える顔になりだ。こう述べた。
「最初は世界征服の作戦ばかり立てていたのに」
「変わってきたな」
「ライダー打倒の。つまりは」
ライダー打倒は題目に過ぎない。では真の目的は。
「ライダーに罠や強敵をぶつけてですね」
「それをライダーがどう潜り抜けるか」
「それを見て楽しむ様になっていったんですね」
「それは御前もわかるな」
「はい」
一条の今の問いにだ。五代はそのライダーとしてだ。こくりと答えた。
そすいてだ。こうも言ったのだった。
「俺も。もうすぐで究極の闇になりましたし」
「一歩間違えれはな」
「グロンギ達との戦い自体が罠でしたから」
既にだ。五代も一条もこのことを把握していた。
それでだ。五代も今言うのである。
「クウガとして彼等と戦い」
「人間として戦い」
一条はクウガ、ひいては仮面ライダーを定義付けて話す。
「そしてだ」
「その戦いの中でグロンギになるのか」
「人間であり続けるのか」
「それを見ていたんですね」
「ン＝ダグバ＝ゼバはスサノオの分身の一つだった」
一条はまた指摘した。
「そのこともだ」
「はい、アークオルフェノクやワイルドジョーカー、キュリオスや

カイも」
彼等は全てだ。スサノオの分身だというのだ。
「全てスサノオだからだ」
「あいつはその都度俺達に仕掛けていたんですね」
「人間が自分の仕掛けた罠にどうするのか」
一条はまた話す。
「どう切り抜けるのかをだ」
「見る為に」
「仕掛けてきている」
「そしてそれは仮面ライダーに対してだけじゃなかったんですね」
「他の世界の戦士達」
まだ姿も名前も知らない。彼等もまた。
「彼等に対してもだ」
「あのキュウベえの話だと」
五代はここでキュウベえの話を思い出してだ。一条に話した。

## 第二話　にゃんぱいあその三

「あれですよね。魔法少女達が戦っているって」
「女の子もその対象の様だな」
「確かに女の子も戦いますけれど」
女の仮面ライダーもいる。ならば否定できないことだった。
「それでなんですね」
「そうだな。スサノオにとって性別は意味のないものか」
彼はあくまで人間を見ている。だからだというのだ。
「結局は」
「あくまで人間を見てですか」
「仕掛けてきているのだ」
「それで他の世界にも」
「仕掛け。そして見ている」
一条の言葉はシビアなものになってきていた。
「俺達をだ」
「人間そのものを」
「世界征服もおそらくは退屈を紛らわせる為だった」
「あの牢獄に囚われたままだから」
「あの牢獄はだ」
一条はスサノオが囚われている牢獄の話もした。
「そう出られるものではない」
「ツキヨミがその全てを賭けて築いたあれは」
「そうだ。出られはしない」
神であるスサノオを以てしうても。それは非常に困難であるのだ。
「だからこそ今もあの場所にいる」
「その中で何もすることができなくて」
「ああして仕掛けているのだ」
人間に対して。そうしているというのだ。

「それがスサノオだ。奴は飽きるまでそうするだろう」
「厄介な話ですね」
「厄介だ。だが」
「だが？」
「人間自体がそうなのだろう」
一条はさらに考える顔になり右手に手を当ててだ。
そうしてだ。こう五代に話したのだった。
「人間は常に試練が前にありだ」
「それを乗り越えるものなんですね」
「そうだ」
まさにだ。その通りだというのだ。
「だからだ。我々はだ」
「スサノオを憎んだら目が曇りますよね」
「スサノオの出して来る罠を乗り越えていく」
そうするというのだ。憎しみを抱かずだ。
「永遠にだ」
「仮面ライダーは死ぬことができませんし」
もっと具体的に言えば死のうが何度でも蘇る。黒衣の青年なりスマートレディがそうするのだ。そしてスサノオもライダー達が永遠に死ぬことは望んでいないのだ。
それがわかっているからだ。五代もだった。
前を向いてだ。一条に話した。
「俺、戦うことは嫌いです」
「それでもだな」
「はい、罠には打ち勝ちます」
そうするというのである。
「絶対に」
「そうだな。それではな」
「一条さんもですね」
「そうする」

これが一条の言葉だった。
「あの時と同じ様にな」
「すいません」
「何、いい」
戦うことはだ。いいと答える一条だった。
「あの時に全ては決まっていたからな」
「グロンギとの戦いの時にですか」
「そうだ。決まっていた」
彼にしてもだ。そうだというのだ。
「共に戦うのはな」
「けれど一条さんは」
「俺は人間だ」
仮面ライダーでなくともだ。それだというのだ。
「俺は人間だからな」
「それで、ですね」
「そうだ。戦う」
また答える一条だった。

## 第二話　にゃんぱいあその四

「仮面ライダーと共にな」
「そうしてくれるんですか」
「死ぬな」
今度はこう五代に告げた。
「いいな。絶対にな」
「わかってます。例え何度も生き返らなければならないにしても」
「死ぬな。俺も死なない」
「はい、俺は死にません」
「そうしてこの戦いも最後まで生きよう」
「そうしましょう」
こう二人で話してだ。戦いのことを誓い合うのだった。その二人のところにだ。
二本足で歩く黒猫が来た。それだけでも異様だが。
背中には蝙蝠の翼がある。その猫を見てだ。
五代がだ。最初にこう言った。
「ファンガイアですかね」
「そうかもな。若しくはあの一族か」
「そうした感じですよね」
最初彼等はこう考えたのだった。
「彼等との戦いは終わりましたけれど」
「では安心していいか」
「ですよね。特にね」
「警戒する必要はないか」
こう考えたのだった。しかしだ。
ここでだ。その一風変わった猫は。
五代の足下に来てだ。こう言ってきたのだ。
「血ィくれにゃ」

「血！？」
「そうだにゃ。血ィくれにゃ」
こう五代に言うのである。
「喉が渇いたにゃ。血が欲しいにゃ」
「血が欲しいってまさか」
「この猫は」
猫の言葉にだ。五代だけでなく一条もだ。
目を瞠ってだ。そして言うのだった。
「吸血鬼！？」
「バンパイアの猫か！？」
「んっ？僕を知ってるのかにゃ？」
その猫も猫でだ。こう彼等に返す。
そしてだ。こう名乗るのだった。
「僕はにゃんぱいあにゃ」
「にゃんぱいあ」
「それが君の名前か」
「そうだにゃ。とにかくにゃ」
ここでだ。その猫にゃんぱいあはさらに言うのだった。
「早く血を寄越すにゃ」
「血を」
「それを」
「どうします、それで」
「そうだな。血と言われても」
二人も咄嗟にはどうしていいかわからない。しかしだった。
たまたまだ。二人の目の前にだ。
漢方薬の店があった。その店を見てだ。
一条がだ。五代に対して言った。
「あの店がいい」
「あの店に入ってですね」
「血を貰おう」

店でだ。買うというのだ。
「漢方薬なら血もある筈だからな」
「それでなんですね」
「そうだ。血は」
「血なら何でもいいにゃ」
にゃんぱいあがまた五代の足下から言う。
「とりあえず喉が渇いたから欲しいんだにゃ」
「そうか、わかった」
一条もだ。にゃんぱいあの言葉を聞いてだ。
そのうえでだ。店に入りだ。
そうしてすっぽんの、ドリンク扱いになっている生き血を買ってにゃんぱいあに渡す。それを飲んでだ。
にゃんぱいあは満足した顔でだ。二人に言った。
「有り難うだにゃ。お陰で落ち着いたにゃ」
「それはよかったね」
「そうだな」
二人もまずそれはよしとした。

## 第二話　にゃんぱいあその五

だがだ。ここでだ。
二人はあらためてだ。にゃんぱいあに尋ねたのだった。
「君は一体何なのかな」
「何故猫なのに吸血鬼なのだ？」
「それで飼い主は」
「そうした人はいるのか」
「飼い主はいるにゃ」
それはいるとだ。にゃんぱいあは素直に答える。
「とても可愛い女の子にゃ。そこに弟と一緒にいるにゃ」
「成程。飼い猫か」
「それは間違いないか」
「あと血が好きなのは」
それはどうしてかとだ。にゃんぱいあはさらに話す。
「僕は最初普通の猫だったにゃ」
「普通のか」
「猫だったのか」
「子猫の頃は捨て猫で」
このことから話すのだった。
「それで死にそうな時に親切な人に助けてもらったにゃ」
「まさかその親切な人が」
「まさか」
「血を飲ませて助けてくれたにゃ」
話を聞くうちにいぶかしむ顔になる二人にだった。
にゃんぱいあはだ。さらに話してきた。
「それで今の僕がいるにゃ」
「吸血鬼の血を飲めば吸血鬼になる」
「それは猫もだったのか」

「とりあえず僕はそれで助かったにゃ」
にゃんぱいあはにこりと笑って話す。
「あの親切な人のお陰だにゃ」
「その吸血鬼が誰かはわからないけれど」
「それは」
「んっ、何かあるにゃ？」
「あるよ」
「おそらくはだが」
一条と五代はすぐににゃんぱいあに話した。そうしてだ。
二人は顔を見合わせだ。こう話し合うのだった。
「それじゃあまずは」
「皆に話を聞いてもらうか」
「はい、そうしてですね」
「このことについての話を聞こう」
こうしてなのだった。彼等は。
すぐに連絡がつく仲間達に連絡を取ってだ。集ってもらった。その場所は。
城南大学だった。その研究室にだ。
皆が集ってだ。そうしてだった。
「この猫が？」
「吸血鬼ですか」
「まさかと思いますけれど」
「確かに翼もありますし」
「普通の猫じゃないのは」
「すぐにわかりますね」
こう話していくのだった。そうしてだ。
椿秀一がだ。こんなことを一条に話した。
「この猫はな」
「何かわかったか？」
「確かに吸血鬼だ」

こう話すのである。
「それは間違いない」
「それはわかったのか」
「ただし生物学的にはだ」
その観点からはどうかというのだ。
「翼がある以外は他の猫と変わりがない」
「それは同じか」
「ああ、同じだ」
そうだというのだ。
「何処もおかしなところはない」
「じゃあ食べものは」
「何でも食べるにゃ」
机の上に二本足で立つにゃんぱいあが自ら言う。
「特に苺とか赤いものが大好きだにゃ」
「苺！？」
その言葉に目を顰めさせたのは沢渡桜子だった。

## 第二話　にゃんぱいあその六

それでだ。こうにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「苺が好きなの」
「あとトマトも好きにゃ」
にゃんぱいあは実に楽しそうに桜子に話す。
「トマトをたっぷりと使ったナポリタンなんか最高だにゃ」
「ナポリタンって」
榎田ひかりもこれにはだった。
いぶかしむ顔になりだ。こんなことを言った。
「猫が食べるものかしら」
「そこがかなり変わっていますよね」
「本当に猫なのかどうか」
椿はこのことを指摘した。しかしだった。
それでもだ。こう言ったのだった。
「しかし調べた結果は」
「生物学的にはですか」
「そうだ。猫だ」
そうだとだ。彼は五代にも話した。
「間違いなく猫だ」
「血を吸わなくても生きていくことはできるにゃ」
またにゃんぱいあが自分のことを説明する。
「ただ。血を吸うと喉が渇かなくなるにゃ」
「お水は飲むの」
「勿論飲むにゃ」
またひかりの言葉にそうだと話す。
「けれど血は大好きにゃ。身体が自然と求めるにゃ」
「この辺りは確かに吸血鬼ですね」
「そうよね」

桜子とひかりもこのことは間違いないと言う。しかしだった。
それでもだ。彼女達から見てもなのだ。
「それでも生物学的には」
「猫だから」
「それなら猫だな」
一条はここでは生物学的な見解から判断して述べた。
「間違いなくな」
「そうですね。確かに食べものの好みは独特ですけれど」
五代もこのことには引っ掛かるものがあった。しかしだった。
それでもだ。生物学的にはだと聞いてだった。彼もこう判断するのだった。
「猫ですね」
「そうだな。猫だな」
「翼はありますけれど」
「しかし。この翼を使って」
一条は今度はにゃんぱいあの翼を見た。黒い蝙蝠の翼をだ。
その大きさを見てだ。彼は言うのだった。
「あまり飛ぶことはできそうにもないが」
「飛ぶことは好きでないにゃ」
にゃんぱいあ自身もそうだという。
「歩く方が好きだにゃ」
「やっぱり猫だな」
「確かにそうですね」
椿と五代がそんなにゃんぱいあの話を聞いてこのことを再確認した。
「間違いなくな」
「よく見たら仕草や行動も猫そのものですし」
「だとすると問題は」
「この子を吸血鬼にしたその吸血鬼が何者か」
「それが問題だな」

「そうなりますね」
こう話してだ。話の重点が移っていった。
そのだ。彼に血を与えた吸血鬼が誰か。五代が彼に尋ねた。
「あの、ちょっと教えてもらえるかな」
「何だにゃ？」
「君を吸血鬼にしたのは誰かな」
「あの時僕を助けてくれた人にゃ？」
「そう。それは誰かな」
「通りすがりの人だったにゃ」
これだけを聞くと門矢の様だ。しかしだった。

## 第二話　にゃんぱいあその七

そこからさらにだ。五代はにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「外見は？」
「黒いタキシードにマントだったにゃ」
「それだけを聞くと」
「そうですね」
「標準的な吸血鬼に聞こえるわね」
椿に桜子、ひかりはだ。こう思った。
そしてだ。にゃんぱいあはさらに話すのだった。
「金髪に青白い肌に赤い目だったにゃ」
「完璧だな」
「ドラキュラ伯爵そのままですし」
「それならよね」
三人はここで確信したにゃんぱいあに血を与えたのは間違いなく吸血鬼だとだ。わかってはいたがこのことを再認識したのである。
しかしだ。それ以上にだった。彼等はだ。
その外見を全て聞いてだ。こうも話した。
「だが。そうした外見の吸血鬼は」
「そうですね。この世界には今はもう」
「いないか。休息に入っているか」
ファンガイアはいるがだ。そうした吸血鬼はというのだ。
いない。それならばだった。
「では別の世界の住人か」
「この子も含めて」
「あの謎の女や魔獣達と同じ様に」
それではないかというのだ。そう話してだった。
あらためてだ。彼等は。一つの結論を出したのだった。
「間違いなくだな」

「はい、この子もまたです」
「別の世界から来たわね」
「そうだな」
一条もだ。三人のその言葉に頷いた。
そのうえでだ。あらためてだった。彼は五代に話した。
「おそらく。このにゃんぱいあもだ」
「門を潜り抜けてこちらの世界に来ていて」
「あちらの世界にもスサノオがいる」
二つの事実がだ。確信されたのだ。
「間違いなくだ」
「そうなっていますね」
「ではだ」
「はい」
二人は頷き合い。そうしてだった。
そのうえでだ。あらためてにゃんぱいあに話した。
「一つ聞きたいのだが」
「ここにはどうして来たのかな」
「穴を通って来たにゃ」
そうしてこの世界に来たとだ。にゃんぱいあは二人の問いにこう答えた。
「そうしてここに来たにゃ」
「そうか。やはりな」
「そういうことでしたね」
「何か光っている不思議な穴だったにゃ」
にゃんぱいあはその穴についても話す。
「そこを通ったら何かここにいたにゃ」
「では間違いなくですね」
「そうだな」
また五代と一条が話す。
「にゃんぱいあも」

「スサノオが関係している」
「スサノオって何だにゃ」
だがにゃんぱいあはスサノオのことは知らないようだった。それが言葉に出ている。
「僕が知っているのは吸血鬼のお兄さんだけにゃ」
「ねえ、よかったら」
「君が通ってきたその光る穴に案内してくれるか」
五代と一条はにゃんぱいあに同時に頼み込んだ。
「そうしてくれるかな」
「よければ」
「わかったにゃ」
にゃんぱいあは快く笑って快諾した。
「じゃあ案内するにゃ」
「わかったよ。それじゃあ」
「同行させてもらおう」
こうしてだった。二人がだ。にゃんぱいあに同行してだ。
彼の後についていく。そうして来た場所は。

## 第二話　にゃんぱいあその八

ごく普通の公園だった。そこに来てだ。
一条が公園の中を見回しながら言う。
「ここは」
「普通の公園ですよね」
「そうだな。どう見てもな」
こう五代にも返す。ジャングルジムにすべり台にブランコがある子供用の公園だ。本当に何のおかしなところもない普通の公園だ。
その公園の中を見回してだ。一条は言うのだった。
「ここに何があるとは」
「思えませんね」
「グリードが出るなら不思議ではないが」
「そんな気配はないですし」
「グリード？何だにゃそれは」
にゃんぱいあは二人の前にいる。その彼がだ。
二人の方を振り向いてだ。こう尋ねてきた。
「お菓子だにゃ？それなら苺があると最高だにゃ」
「まあお菓子じゃないから」
「そういうものではない」
「じゃあどうでもいいにゃ」
お菓子でなければだ。どうでもいいと言ってだ。
にゃんぱいあは土管を寝かせて土を持ったそこに向かう。それを見てだ。
一条がだ。また五代に話した。
「あそこだな」
「あそこに入ってですね」
「彼等の世界に入るか」
「そこに」

「では行こう」
一条は決意と共に言った。
「そしてあちらの世界でもだ」
「スサノオと」
「ついて来るにゃ」
土管の入り口でだ。にゃんぱいあは二人にまた声をかけた。
「あの穴を潜ったら僕の世界だにゃ」
「うん、じゃあ」
「行くか」
こうしてだった。二人は身体を屈め膝を折ってだ。
そのうえで土管の中に入る。すると光に包まれ。
土管を潜り終えると。そこは。
何もおかしなところのない世界だった。ただ出て来たのは川辺だ。
川辺に転がっている土管を潜り抜けてだ。出て来たのである。
右手に青い静かな川が。左手には緑の土手がある。草の中に赤や白の小さな花が見える。
「さあ、ここにゃ」
「ここか」
「そうだにゃ。ここだにゃ」
にゃんぱいあの言葉に応えてからだ。一条はその周りの川や土手を見回したのだった。無論ささやかに咲いている花達もである。
そうしたものを見てだ。一条がまず言った。
「何の代わりもないな」
「ですよね。平和そうです」
「んっ？ここは平和だにゃ」
また二人に顔を向けて話すにゃんぱいあだった。
「そっちでは違うにゃ？」
「そうだね。色々といるからね」
「御世辞にも平和とは言い難いな」
仮面ライダー、その協力者としてだ。二人は答えた。

「さっき言った様なグリードもいるし」
「騒がしい世界だ」
「とりあえず平和ではないんだにゃ」
二人の話を聞いてだ。にゃんぱいあは。
困った顔になってだ。それで言うのだった。
「そうした世界には困ったものだにゃ」
「つまりこの世界は平和で」
「グリードやそうした存在はいないか」
「だからグリードはお菓子でないなら何にゃ？」
にゃんぱいあの関心はそちらにあった。
「よくわからないが美味しそうな名前だにゃ」
「ううん、美味しそうかな」
「特にそうは思わないが」
「とにかくだにゃ。僕は今から家に帰るにゃ」
そうするというのだ。
「一緒に来るにゃ？」
「どうする？」
にゃんぱいあの言葉を受けてだ。一条は。
五代に顔を向けて。それで尋ねたのだった。
「行ってみるか」
「ええと。猫の家ですよね」
「飼い主がいるらしい」
一条はこう考えて話す。

## 第二話　にゃんぱいあその九

「どうやらな」
「飼い主がいるんですか」
「そんな感じがする」
これは一条の勘から言うことだ。彼の戦いで培い、そして刑事という職業、その二つから身に着けた勘からの言葉である。
それを言ってだ。彼はあらためて五代に話した。
「だからだ。言ってみよう」
「その飼い主の人から手掛かりをですね」
「この世界の手掛かりも手に入るだろう」
「ですね。それじゃあ」
「まずは言ってみることだ」
「わかりました」
五代も一条の言葉に頷き。そうしてだった。
二人でにゃんぱいあに案内され彼の家に向かった。そこは。
白い家だった。人間のごく有り触れた家だ。その家の前に来てだ。
今度は五代がだ。一条に問い返した。
「あの、何ていいますか」
「同じだな」
「ですよね。この家は」
「普通の家だ」
一条もだ。その家を見ながら言う。
「どう見てもな」
「けれどまさか」
「中は違うか」
「その可能性もやはり」
あるのではと。五代は本来は一条が言うことを話した。
「あるのでは」

「では気をつけてか」
「行きましょう」
「帰ったにゃ」
にゃんぱいあは家の玄関の前でにこりと笑って言った。
「誰かいるにゃ？いたら出て欲しいにゃ」
「あっ、にゃんぱいあ？」
その言葉に応えてだった。家の扉が開いてだ。
そこからごく普通の女の子が出て来た。そうしてだ。
そのうえでだ。にゃんぱいあと五代達を見て言うのだった。
「お客さんなの？」
「そうだにゃ。僕の友達にゃ」
何時の間にかそうなっていた。
「だからお家の中に一緒に入れて欲しいにゃ」
「大人の人ね」
「仕事は刑事だ」
まずは一条がだ。警察手帳を出して話した。
「これでわかってくれたか」
「刑事さんがですか」
「僕の友達だにゃ」
にゃんぱいあがまた言うとだった。女の子は。
首を捻ってだ。にゃんぱいあに問い返した。
「何か悪いことしたの？」
「えっ、何でそう言うにゃ！？」
「だって。刑事さんよ」
女の子はこのことを根拠にして言うのだった。
「悪いことしないとお家に来ないじゃない」
「僕何もしてないにゃ」
「けれど実際に来てるし」
「だからしてないにゃ」
「そうなの？」

「大体猫が人間のお巡さんに捕まる筈がないにゃ」
にゃんぱいあはここで根本的な真理を言ってみせた。
「僕は猫にゃ」
「そういえばそうね」
女の子もだ。ここでようやくだった。
にゃんぱいあの言葉に納得してだ。それからだ。
五代と一条にだ。こう尋ねるのだった。
「じゃあにゃんぱいあのお友達なんですね」
「はい、そうです」
「確かに刑事だが事件に来た訳ではない」
一条はその事情を説明した。

## 第二話　にゃんぱいあその十

「それは保障する」
「そうですか。ではどうぞ」
あらためてだ。二人に家に入るように話したのだった。
そしてだ。そのうえでだった。二人に自分の名を名乗った。
「美咲です」
「美咲ちゃんですか」
「それが君の名前か」
「はい。宜しく御願いします」
「僕の飼い主だにゃ」
にゃんぱいあはここでこのことも二人にまた話した。
「とても奇麗な娘だにゃ」
「奇麗なのはいいけれど」
それでもだとだ。美咲はにゃんぱいあを抱き抱えてから。
そのうえでだ。二人を家の中に案内したのだった。
二人は家の応接間に案内された。そうしてだ。
「はい、どうぞ」
「あっ、どうも」
「済まない」
二人にだ。苺が出される。にゃんぱいあにもだ。
その苺をだ。出した後でだ。美咲はにゃんぱいあに話した。
「じゃあ後はどうするの？」
「僕がお話するにゃ」
「にゃんぱいあが？」
「そうだにゃ。だからもう美咲ちゃんはゆっくりとしていいにゃ」
「わかったわ。それじゃあね」
美咲はにゃんぱいあの言葉に頷いてだ。そのうえでだ。
二人とにゃんぱいあを残して部屋を出た。こうしてだ。

二人はにゃんぱいあと対した。まずはだ。
五代がだ。苺を食べながら自分の向かいの席で自分と同じく苺にかぶりつき幸せな顔をしているにゃんぱいあに尋ねたのだった。
「いいかな」
「何だにゃ？」
「その吸血鬼の居場所はわかるかな」
尋ねたのはこのことだった。
「それはどうかな」
「ううん、実はにゃ」
「実は？」
「どう何処に行ったのか」
困った顔になって前足を組んで。にゃんぱいあは五代の今の問いに答えた。
「僕も知らないにゃ」
「えっ、知らないの」
「そうなのか」
「神出鬼没の人だにゃ」
だからだというのだ。
「そう簡単に見つかりはしないにゃ」
「ではだ」
にゃんぱいあが吸血鬼の居場所を知らないと言われてだ。今度は。
一条が出て来てだ。そうして彼に尋ねたのだった。
「手懸かりだが」
「手懸かり？」
「それはあるだろうか。または証拠は」
「そう言われてもにゃ」
にゃんぱいあは困った顔になり一条の言葉に応える。
「思い出せないにゃ」
「そうなのか」
「悪いけれどそうだにゃ」

こう二人に話すのである。
「さっき言った通りにゃ」
「手懸かりもなしか」
一条は腕を組みだ。困惑した顔を見せた。
そしてだ。五代にこう言うのだった。
「こうなれだ」
「俺達だけで、ですね」
「そうだ。手懸かりを探そう」
「そうしましょう」
こうした話をしてだった。二人は。
この世界の町を見回り手懸かりを探そうと決意した。その二人にだ。

## 第二話　にゃんぱいあその十一

にゃんぱいあがだ。こう言ってきたのだった。
「それならにゃ」
「君も？」
「ついて来てくれるのか」
「この町のことはよく知ってるにゃ」
だからだというのだ。
「それでにゃ。ついて来るにゃ」
「うん、それじゃあ」
「共に行こう」
こうしてだ。二人はにゃんぱいあも連れてだった。
そのうえで家を出てだ。それからだった。
町に出て手懸かりを探しはじめた。その彼等の前にだ。
頭に茶色い部分のない、頭が真っ白のシャム猫の子猫が来た。背中にはリボンがある。
その子猫がだ。にゃんぱいあを見てだ。自分の方から声をかけてきた。
「あっ、兄上」
「んっ、茶々丸だにゃ」
「何処に行かれるのですか？」
こうにゃんぱいあに対して尋ねてきた。
「今から一体
「少しだにゃ」
「少しですか」
「スサノオという奴、もしくは吸血鬼の手懸かりを探すにゃ」
「スサノオはわからないですが」
茶々丸と呼ばれたにゃんぱいあを兄と呼ぶ猫はここで言うのだった。

「吸血鬼さんですね」
「そうだにゃ。あの人だにゃ」
「兄上から外見は前に御聞きしていますが」
こう前置きしれから話す茶々丸だった。
「何日か前に見ましたが」
「えっ、見たって」
「その吸血鬼をか」
「はい」
その通りだとだ。茶々丸は二人に返した。
「何か猫を一杯連れていましたよ」
「その人だにゃ」
ここでまた言うにゃんぱいあだった。
「その人が吸血鬼だにゃ」
「猫を一杯連れている」
「わかりやすいな」
五代と一条も言う。
「それなら今から」
「探すか」
「そうしましょう」
こうした話をしてだった。二人はにゃんぱいあと茶々丸の協力を得てだ。
この世界を調べて回ることにした。しかしだ。
ふとだ。一条がにゃんぱいあと茶々丸に尋ねたのだった。
「今思ったのだが」
「何にゃ？」
「どうかしたのですか？」
「あの娘だが」
こうだ。美咲のことに言及したのである。
「君達、特ににゃんぱいあのことだが」
「僕がどうかしたかにゃ」

「君を見ても何とも思っていなかったか」
このことにだ。今気付いたのである。
「吸血鬼である君を見てもだ」
「それがどうかしたにゃ？」
「だからだ。吸血鬼というものはだ」
彼が話すのはこのことだった。
「そう簡単に受け入れられる存在ではないのだ」
「そうなのにゃ？」
「血を吸うのだぞ」
一条が話すのは吸血鬼のその性質のことだ。
「それでどうして簡単に受け入れられるのだ」
「僕そんなにまずかにゃ？」
「僕にもわからないです」
茶々丸は首を捻るにゃんぱいあにこう返した。
「けれどそうみたいですね」
「どういうことかわからないにゃ」
「若しかしてあの美咲という娘は」
「かなりの娘かも知れませんね」
五代もだ。腕を組んで言った。
「この子を普通に受け入れているんですから」
「例え吸血鬼であってもその本質を見る」
「そうした娘かも知れませんね」
「だとすれば」
どうなのかとだ。一条はさらに言った。
「この世界にはあの娘以外にもこの子達を受け入れている人間がいるのか」
「問題はそこにあるかも知れませんね」
何となくだ。二人もこのことがわかってきたのだった。そうしてだった。
彼等はあらためてこの世界を回りだ。手懸りを探していくのだっ

た。

第二話　完

2011・8・20

# 第三話　受け入れる器その一

第三話　　受け入れる器

五代と一条はにゃんぱいあ、茶々丸の案内を受けてだ。彼等の世界を回った。そうしてだ。

まただ。変わった猫に会ったのだった。

右目に眼帯をし三日月の兜を被った白猫に会ったのだ。その猫を見てだ。

五代と一条はだ。それぞれ言うのだった。

「まさかこれは」

「そうだな。どう見てもな」

「戦国大名のあの」

「伊達政宗か」

「んっ、俺のことを知ってるのか？」

実際にだ。この猫、この猫もまた二本足で立っている。この猫が二人を見上げてだ。自分からこんなことを彼等に対して言って来たのだった。

「俺は独眼竜まさむにゃだ」

「やっぱりそうか」

「あの大名にちなんでいるのか」

「あの人は人間だが尊敬しているぜ」

自分でこう言うまさむにゃだった。

「凄い人だったよな」

「うん、確かに」

「そして君はか」

「あの人にちなんでこの格好をしているんだよ」

「まさむにゃはいい奴にゃ」

にゃんぱいあがにこりと笑って二人に話してきた。

「僕の友達にゃ」

「あ、ああ」
にゃんぱいあにそう言われてだ。まさむにゃは。
何処か恥ずかしそうな顔になってだ。こう言うのだった。
「そうだな。俺達は友達だにゃ」
「そうだにゃ。いつも仲良しだにゃ」
「成程。君達は友達なんだ」
「ではこの猫も」
「ああ、俺は吸血鬼じゃないからな」
二人が何を言うのか察してだ。まさむにゃから言ってきた。
「普通の猫だぜ」
「ううん、あまりそうは見えないけれど」
「そうなのか」
「そうだよ。何処がおかしいんだよ」
自分では自覚がないといった口調である。
「俺は別に血を吸わないしちゃんと飼い主もいるしな」
「君もそこはにゃんぱいあと同じなんだね」
「飼い猫だったのか」
「そうだよ」
こう答えるまさむにゃだった。
「立派な飼い主だぜ」
「そうですね。あの子もいい子ですね」
茶々丸もここで言う。
「僕達の飼い主の美咲ちゃんと同じで」
「美咲ちゃんは時々血を吸わせてくれるにゃ」
にゃんぱいあはここでもにこにことして話す。
「とても優しくていい御主人様だにゃ」
「やっぱりあの娘は」
「かなりの娘だな」
五代と一条は今の話からもだ。美咲の器をあらためて認識した。
そのうえでだ。彼等は。

まさむにゃにだ。さらに尋ねるのだった。
「君の他にもそうした猫はいるのかな」
「この辺りにいるか」
「いるっていったらいるな」
まさむにゃは急にだ。顔を曇らせてだ。
そのうえでだ。二人にこう話したのだった。
「けれど俺は好きにはなれないな」
「好きになれない」
「どういった猫なのだ」
「性格がな。悪いんだよ」
それでだ。好きになれないとだ。まさむにゃは二人にまた話した。
「だからな。ちょっとな」
「そうなんだ。だからなんだ」
「その猫には会いたくないか」
「けれどまあいいぜ」
まさむにゃは二人にだ。今度はこう告げた。
「案内してやるよ、そいつの場所に」
「うん、御願いするにゃ」
にゃんぱいあがまたまさむにゃに話す。

## 第三話　受け入れる器その二

「にゃてんしのところに行くにゃ」
「さて、あの人は何をしているのでしょう」
茶々丸もここで言う。
「また悪戯をしているのでしょうか」
「だよな。この前なんてな」
「そうそう、毛虫をです」
茶々丸はまさむにゃと話をしていく。
「女の子に見せて怖がるのを見て喜んでましたから」
「性格悪いよな」
「はっきり言って悪いですね」
茶々丸の言葉には何の容赦も見られない。
「意地悪です」
「だから好きになれないんだよ」
「何か今度の猫は」
「悪戯者か」
一条と五代も彼等の話からこう考えた。
「だとすると少し」
「厄介なことになるか」
だが、だ。それでもだった。五代はこの心配はしていなかった。
「しかしそれでもですね」
「そうだな。クウガに変身する必要はなさそうだな」
その懸念はなかった。この世界は平和な中にあるからだ。
それでだ。今はだった。
「このまま戦いとは別の」
「調査が続くな」
「そうですね。それにしても」
五代はだ。ここでだった。

まさむにゃをあらためて見てだ。こんなことを言った。
「それにしても君は」
「何だ？まだ何かあるのか？」
「甲冑というか鎧まで着てるんだね」
五代が今言うのはこのことだった。
「また本格的だね」
「ああ、鎧か」
「兜だけでも凄いのに」
「俺は徹底的に凝る主義なんだよ」
それでだ。この格好だというまさむにゃだった。
彼は胸を張ってだ。五代にさらに話す。
「だから鎧だってな」
「そういうことだな」
「格好いいだろ」
「確かに。けれど猫がここまで人間的な世界なんて」
「あるとは思わなかったな」
「そしてそのことをこの世界の人達は受け入れて」
そのことにだ。五代だけでなく一条もだ。
考えるものがありだ。実際に言葉に出していくのだ。
「彼等と共存しているんですね」
「スサノオはこの世界で何を仕掛けている？」
一条はこのことについても考えを及ばせた。
「一体だ」
「スサノオはいつも人間を見ていますけれど」
「この世界では何を見ている？」
「そこに何かがありますね」
「間違いなくな」
そうした話をしていってだ。彼等は。
にゃんぱいあだけでなくまさむにゃ、そして茶々丸も加えてだ。
そのうえでだ。

そのにゃてんしのところに来た。見れば。
黒い翼、鳥のそれを背中に生やしている白猫がいた。その猫がだ。
耳が灰色の白猫にだ。棒に糸で括っている毛虫を見せてだ。
そうしてだ。こんなことを言っていた。
「どうですか？」
「ちょ、ちょっと」
「毛虫は嫌いですか？」
「僕そういう虫は苦手なんだよ」
その白猫は泣きそうな顔になり彼に言う。
「だから近寄らせないでよ」
「駄目ですよ。こんなものを怖がっていてはですね」
「けれどどうしても」
「ほらほら、怖がらない怖がらない」
こうしてだ。意地悪をしていた。その黒い翼の白猫をだ。

## 第三話　受け入れる器その三

まさむにゃがだ。右の前足で指し示しながら五代と一条に話した。
「そのにゃてんし？」
「あの黒い翼の猫がか」
「そうだよ。やっぱり悪いことしてるな」
「ううん、何か意地悪をしているな」
「その様だな」
このことは二人もすぐにわかった。そうしてだ。
あらためてだ。まさむにゃに尋ねるのだった。
「見れば頭に天使の輪があるね」
「黄金に輝いているが」
「あれかよ」
「あれを見る限りあの猫は天使かな」
「だが翼が黒いな」
二人はこのことにもすぐに気付いてだ。まさむにゃに話す。
「堕天使なのかな」
「本来の天使なら翼が白い筈だな」
「そういえばそんなことを言っていたにゃ」
ここでにゃんぱいあが二人に話した。
「にゃてんしは悪いことをし過ぎて天界を追い出されたにゃ」
「それで天界に何かしようと企んでいるらしいな」
まさむにゃも言う。
「だからあいつはなあ」
「困った方ですね」
茶々丸もここで言う。
「ああしてすぐに悪戯をされますし」
「嘘も吐くしな」
まさむにゃは顔をやや顰めさせて話す。

「だから俺はあいつは好きになれないんだよ」
「そうかにゃ。そこまで徹底的に悪くはないにゃ」
「そうか？結構意地悪いぜ」
「ううん、あの猫は」
五代は彼等の話を聞きながらこう述べた。
「確かに性格はよくないね」
「そうだな。しかし根は極端に悪くはないようだ」
一条はこのことも見抜いた。五代もそうであるが。
「少なくとも人や猫を徹底的に害したり殺したりはしないな」
「そういうことは絶対にしませんね」
「少しあの猫ともな」
「話しますか」
二人が言っているとだ。そこにだ。
そのにゃてんしがひょっこりと来てだ。こんなことを言ってきたのだった。
「僕に何か御用ですか？」
「あっ、今声をかけようと思っていたけれど」
「気付いたのか」
「はい」
その通りだとだ。にゃてんしも答える。
そしてだ。二人を見てだ。こんなことを言った。
「この町の方ではないですね」
「そうだにゃ。この人達はにゃ」
二人に代わってにゃんぱいあがにゃてんしに説明する。
「僕が遊びに行った世界にいる人達だにゃ」
「ほう、別の世界から来られた方々ですか」
「そうだにゃ」
こうにゃてんしに説明するのである。
「とてもいい人達にだ」
「そうですね。ただ」

「ただ。何にゃ？」
「どうも僕の遊びには乗ってくれそうもないですね」
とりわけ一条を見てだ。にゃてんしはすぐにこのことを見抜いたのだ。
「残念ですが」
「少なくともだ」
一条が真面目な顔でそのにゃてんしに答える。
「我々は君の悪戯にどうこうされることはない」
「そういうことは子供の頃にやったりやられたりだからね」
五代もその人生経験から話す。
「だからそういうことにはね」
「どうこうされることはない」
「それは残念です」
こうは言うがだった。にゃてんしは。

## 第三話　受け入れる器その四

特に表情に出すこともなくだ。こう言っただけだった。
「では貴方達には何もしません」
「しても何もないから」
「それでなのか」
「その通りです。それではですが」
「それでは？」
「我々への質問だな」
「そうです。見たところ貴方は」
にゃてんしはここで五代をまじまじと見た。それからだ。
こうだ。彼に尋ねたのだった。
「只の人ではありませんね」
「それはわかるんだね」
「はい。伊達に天使だった訳ではないですから」
その力からだ。五代のことがわかるというのだ。
「一体どういう方なのでしょうか」
「仮面ライダーと言おうか」
五代は真面目な顔になってだ。にゃてんしに答えた。
「このことはにゃんぱいあ君は知っていると思うけれど」
「そういえば聞いたにゃ」
あちらの世界に来た時のことを思い出してだ。にゃんぱいあも応える。
「何か色々な連中と戦っている人達らしいにゃ」
「そうなるね」
五代もそのことを認めた。
それでだ。彼等にこう話したのだった。
「俺達は」
「俺は変身はしないが」

一条も言う。それでも同じだというのだ。
「それでもだ」
「色々な奴等と戦ってきているんだ」
「だがそれでもだ」
「戦っている相手は同じだよ」
こうも言ったのだった。
「それはね」
「あれ？何かおかしいにゃ」
にゃんぱいあもその言葉に対して言う。
「色々な奴と戦っていると言ったにゃ」
「そうですね。それで同じというのは」
茶々丸もこのことを指摘する。
「妙な感じがしますけれど」
「そのことだが」
一条が彼等のその疑問に答える。
「つまりだ。色々な敵を出している黒幕がいる」
「ああ、そういうことですか」
その話を聞いて最初に理解したのはにゃてんしだった。
それでだ。一条に対してこう尋ねた。
「犬やら猫の後ろに人間がいたりするというのと同じですね」
「そうだな。簡単に言えばそうなる」
一条もにゃてんしのその話で大体いいとした。
「そしてその黒幕だが」
「何ていうんだよ」
「スサノオという」
一条は今度はまさむにゃに話した。
「神と言えば聞こえがいいがかなり癖の悪い神だ」
「神は大体そういうものですよ」
にゃてんしは一条の今の言葉にすぐにこう言ってきた。
「傲慢で身勝手なものです」

「そうかも知れない。しかしだ」
一条はにゃてんしの言葉に頷きながらさらに話す。
「スサノオは少し違っている」
「俺達と戦い。罠を仕掛けて」
五代がだ。仮面ライダークウガである彼が詳しく説明する。

## 第三話　受け入れる器その五

「そうしたことで人間を試して見ているんだ」
「どうしてそんなことをするにゃ？」
「退屈を紛らわさせる為にね」
「それでそこまで回りくどいことをするにゃ」
「そうなんだ。どうやらこの世界にも」
一条はここでだ。遂にだった。
スサノオの存在をだ。彼等に話すのだった。
「スサノオは関わっているから」
「我々はそのスサノオを探しているのだ」
一条もそうだというのだ。
「何処にいるのかをだ」
「何処かっていってもな」
「そのスサノオがどういう姿をしているのか」
「それもわからないのですけれど」
まさむにゃに茶々丸、にゃてんしがそれぞれそのスサノオについてだ。五代と一条に対して突っ込みを入れた。そうしてきたのだ。
それに対してだ。二人はこう話した。
「姿は色々あるんだ」
「その都度変えてくる」
つまりだ。姿ははっきりしないというのだ。
「俺達の前に現われる度に姿を変えているから」
「それははっきりと言えない」
「それじゃあ絶対にわからないにゃ」
にゃんぱいあは二人の話を聞くとだ。
すぐに困った顔になって返した。
「姿がわからないのなら」
「はい、お話になりません」

茶々丸は兄よりも手厳しかった、可愛い顔をしてぴしゃりと返す。
「それでどう調べろというのでしょう」
「手懸りはあるよ」
すぐにだ。五代がこう告げる。
「それが吸血鬼なんだよ」
「僕を助けてくれたあの人にゃ」
「その人が何処にいるのか知りたいんだ」
そこにあるとだ。五代は話す。
「教えてくれたら有り難いけれど」
「知っているのなら」
「ああ、それでしたら」
すぐにだ。にゃてんしが答えてきた。
「面白い方々がおられますよ」
「吸血鬼の行方を知っている？」
「そうした相手なのか」
「はい、おそらくは」
にゃてんしは二人に話していく。
「ですから。その方々に御会いしてはどうでしょうか」
「それ本当か？」
まさむにゃは幾分疑う顔でにゃてんしに対して問い返した。
「本当に知ってるんだな」
「本当ですよ。この人達には見破られますから」
見破られるとわかってだ。にゃてんしも何かをすることはしないというのだ。
それでだ。二人には嘘を吐かないというのだ。
「ですから本当ですから」
「それじゃあ一体」
「どういう相手なのだ？」
「やっぱり猫ですかね」
「そうだろうな」

五代と一条は最初はこう考えた。しかしだ。
ここでだ。にゃてんしは二人に言ったのだった。
「いえ、蝙蝠ですよ」
「蝙蝠！？」
「今度は蝙蝠なのか」
「はい、蝙蝠です」
そのだ。蝙蝠だというのだ。
「蝙蝠の方々です」
「蝙蝠、吸血鬼には相応しいですね」
「まさに象徴だな」
五代と一条はにゃてんしからの話を聞いて話し合う。
「じゃあその蝙蝠達なら」
「吸血鬼の行方を知っているな」
「ならすぐにですね」
「その蝙蝠達の行方を探そう」
こう言うとだった。すぐにだった。
二匹の蝙蝠達が来た。どちらも頭と翼だけの姿だ。一匹の耳と足がピンク色でもう一匹のそれは黄色だ。その蝙蝠達が来てだ。

## 第三話　受け入れる器その六

五代の両肩にそれぞれ止まりだ。服の上から吸いはじめた。
そしてだ。こう言うのだった。
「何か違うね」
「そうだね」
「普通の人間の血じゃないような」
「ちょっと味が違うね」
「しかもこの人あまり痛がらないし」
「おかしいね」
その彼等を見てだ。すぐにだ。
五代は血を吸われたままだ。にゃんぱいあに尋ねた。
「若しかしてこの蝙蝠達が？」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。にゃてんしも答える。
「その方々です」
「そうか、やっぱりね」
「あの、痛くないんですか？」
カツオを少しオドオドとした感じで五代に尋ねる。
「血を吸われて」
「まあこれ位だとね」
何でもないとだ。五代は返す。
「俺は別に何ともないから」
「そうなんですか」
「これまでの戦いで何度も死に掛けているしね」
「それと比べればですか」
「そう。何ともないよ」
こうカツオに答える五代だった。
「特にね。けれどだよ」

「けれど？」
「この蝙蝠達は知ってるんだよね」
まだ自分の血を吸っている蝙蝠達を横目で見ながらだ。五代はカツオに尋ねた。
「吸血鬼の居場所よ」
「そうみたいですね」
「なら話は早いよ」
それならというのだ。
「彼等に聞くから」
「ちょっと待ってね」
「吸い終わってからね」
蝙蝠達も応えてきた。
「お話していいかな」
「吸血鬼さんのことは」
「うん、いいよ」
五代もだ。気軽に返す。
「それじゃあそういうことでね」
「何かこうして気軽に血を吸わせてくれるし」
「お兄さんいい人だから気に入ったよ」
こうしただ。のどかな会話をしつつだ。蝙蝠達は五代の血を楽しんだ。にゃんぱいあも彼の足にかぶりついてだ。血を吸った。
それからだ。血を満腹になるまで吸った蝙蝠達はだ。五代と一条に言ってきた。
宙をぱたぱたと舞いながらだ。そのうえで話すのだった。
「まずは僕達の名前ね」
「それ言うね」
「そうだね。まずはお互いに名乗って」
「それからだな」
こう言葉を交えさせてだった。それぞれだった。
まずはピンクの蝙蝠と五代が名乗った。

「毛利っていうんだ」
「五代祐介。宜しくね」
続いてだ。黄色の蝙蝠と一条だった。
「小森だよ」
「一条薫。覚えていてもらおう」
「二人共別の世界から来た人にゃ」
にゃんぱいあは蝙蝠達にこのことを付け足した。
「宜しくにゃ」
「へえ、他の世界からなんだ」
「こっちの世界に来たんだ」
「うん、そうなんだ」
「縁があって行き来することになる」
二人は二匹の蝙蝠達にも自分達のことを話した。
「もっと言えば俺はさ」
「五代さんだったっけ」
「何なの？」
「仮面ライダーなんだ」
このこともだ。五代は話した。

## 第三話　受け入れる器その七

「バイクに乗って戦う仮面の戦士なんだ」
「そうにゃ。何かとても強いらしいにゃ」
またにゃんぱいあが蝙蝠達に話す。
「そうでなくても五代さんは凄くいい人だにゃ」
「うん、それはわかるよ」
「よくね」
蝙蝠達もだ。そのことはわかるというのだ。
「僕達にたっぷりと御馳走してくれたし」
「こうしてお話していてもわかるしね」
「それにしても仮面ライダーなんだ」
「話は聞いてるよ」
「えっ！？」
毛利君と小森君の今の言葉にだ。五代は思わず問い返した。
「君達仮面ライダーのことを知ってるんだ」
「うん、吸血鬼さんから聞いてるから」
「バンパイアさんからね」
「何か。向こうもですね」
「知っているのだな」
五代と一条はここでもだった。顔を見合わせてだ。
そのうえでだ。話をするのだった。
「まさかとは思いましたけれど」
「最初から知っているのか」
「これはまさか」
「覚悟しておくか」
こちらを既に知っている、そのことから吸血鬼はスサノオの分身かその統率下にあり仮面ライダーと敵対しているのではないか、こう考えてだ。

そうしてだ。彼等はだった。
「若しそうなっても」
「勝たなくてはな」
「そうですね。絶対にですね」
「勝とう」
「それでどうしたの？」
「何かあったの？」
まただ。毛利君と小森君が二人に尋ねてきた。
「何か吸血鬼さんに用があるの？」
「それで僕達に用があるみたいだけれど」
「うん、そうだよ」
「それはその通りだ」
こうだ。二人も二匹にはっきりと答える。
「それでだけれどいいかな」
「吸血鬼は今何処にいる？」
「まさかと思うけれどまた向こうから出て来るとか」
「そういうのはないな」
「今お城にいるよ」
「吸血鬼さんのお家にね」
流石に今回はそれはなかった。そしてだ。
二匹の話によるとだ。吸血鬼は。
城を持っていてそうしてそこに住んでいるというのだ。それでだ。
彼等は今度はだ。こう言うのだった。
「じゃあ今から？」
「その吸血鬼の城に行くか」
「そして万が一の時は」
「腹を括るか」
こうしてだ。覚悟も決めてだ。あらためてだ。
毛利君と小森君にだ。頼みをした。
「それならその吸血鬼さんのお城に今から」

「案内してくれるだろうか」
「うん、いいよ」
「それじゃあね」
彼等も応えてだ。そうしてだった。
吸血鬼への城に案内するのだった。その二人にだ。
にゃんぱいあ達もだ。こう言ってきた。
「じゃあ僕達もにゃ」
「ああ、行くか」
「そうですね。面白そうですし」
「行きましょう」
あっさりとついて行くことにした。とりわけ。
にゃんぱいあはだ。とても楽しそうにだ。こう言うのだった。
「命の恩人に会えるなんて楽しみだな」
「そういえば兄上はずっと」
「そうだにゃ。会いたいと思っていたにゃ」
こうだ。満面の笑顔で茶々丸に言うのである。
「だから凄く楽しみだにゃ」
「それなら余計にですね」
「行きたいにゃ」
こうした話をしてだ。にゃんぱいあはとりわけ楽しそうに吸血鬼の城に向かうのだった。

## 第三話　受け入れる器その八

だが、だ。ふとだ。五代がそのにゃんぱいあ達に尋ねた。
「長い旅になるかも知れないからね」
「何だにゃ？」
「どうしたんだ？」
にゃんぱいあとまさむにゃが彼の言葉に応える。
「何かあるのかにゃ」
「別に何でもないだろ」
「君達の御主人達に連絡しておかなくていいのかな」
彼が言うのはこのことだった。
「それはどうなの？」
「ああ、その心配はないよ」
「すぐそこだから」
また毛利君と小森君が話してきた。二匹は五代の頭の上を飛んでいる。
「もうすぐ見えてくるから」
「安心していいよ」
「あれっ、近いんだ」
「それはまたな」
二人はそう言われてだった。
いささか拍子抜けした。そしてそれは。
にゃんぱいあも同じでだ。こうまさむにゃに言うのだった。
「あれっ、こんな近くにいたのにゃ？」
「歩いていける距離だよな」
「そうだにゃ。それだけの距離だにゃ」
実際にそうだとだ。まさむにゃに話すのである。
「本当に意外だにゃ」
「身近な人だったんだな」

「これならもっとお家の外をしっかり散歩しておくんだったにゃ」
「まあそれは仕方ないぜ」
まさむにゃは前足を組みとことこと歩きつつ述べた。
「俺達の移動範囲って限られてるからな」
「縄張りの中でしか動けない筈だな」
一条は猫の習性から話す。
「もっとも猫の縄張りは広い場合もあるが」
「この辺りは一応縄張りにゃ」
「俺もだ」
「僕もです」
にゃんぱいあだけでなくまさむにゃと茶々丸も答えてきた。
「これでも結構広いんだぜ」
「他の方と重なってる場所もありますが」
「僕も一応」
カツオもおどおどとしながらだが話す。
「この辺りは」
「僕に縄張りは関係ありません」
にゃてんしはそうだというのだ。
「何しろ元天使ですからね」
「それでこの辺りに気付かなかったのはどうしてかな」
「縄張りでもあまり行かない場所もあるにゃ」
だからだとだ。にゃんぱいあは二人に話した。
「それでにゃ」
「成程、そういうことなんだ」
「だから誰もその城には気付かなかったのか」
五代も一条もこのことがわかった。
「猫といっても色々あるんだね」
「はじめて知った」
二人もだ。知らないことは多い。所詮人間の知っていることなぞまさに大海の中の一杯のスプーン程度のものしかないのである。

そのことをだ。二人は今再認識したのだ。
そうした話をしながらだった。彼等はその城の前に来たのだ。その城は。
如何にもだった。実に不気味な城だった。
西洋風であり石造りだ。苔や蔦が壁を飾りやたらと古い。
塔もあり窓はやけに頑丈そうだ。そしてやけに細く曲がった木々に囲まれている。何かの動物の咆哮まで聞こえてきそうだ。
その城の門のところに来てだ。二人は話した。
「ここはまさに」
「吸血鬼がいる場所だな」
「この如何にもって場所に吸血鬼がいる」
「俺達の手懸りになる」
こう話してだ。そのうえでだ。
彼等は門からどうして城の中に入ろうと考えはじめた。その中でだ。
ふとだ。カツオが二人に言ってきた。
「あの」
「うん、この城に入るには」
「どうすればいいかだが」
「チャイムがありますけれど」
カツオはいつもの少しおどおどとした調子で二人に話してくる。
見ればだ。

## 第三話　受け入れる器その九

門の左の柱、ダークグレーの石の柱にだ。チャイムがあった。音符のマークまでついている。それを見てだった。
二人はだ。やや拍子抜けしてだ。顔を見合わせてからだ。
そうしてからだ。こう話すのだった。
「何か。今度も」
「拍子抜けするものがあるな」
「そうですよね。吸血鬼っていうからさぞかし危険な相手かって思いましたけれど」
「これでは一般市民と変わらないな」
「じゃあチャイムを押しますか？」
五代が提案した。
「そうしますか」
「そうだな。とりあえずはな」
一条も五代のその提案に頷く。そしてだった。
五代がそのチャイムのボタンを押した。するとだ。
暫くしてだ。チャイムの向こうからこう返事が返って来た。
「はい、どちら様でしょうか」
「普通の声ですね」
「そうだな」
「新聞なら間に合ってますよ」
まずは新聞のことから話してきた。
「東スポ取ってますから」
「あれっ、朝日じゃないんですね」
「読売でもないな」
「とりあえず新聞はいいですから」
まただ。返事が返って来た。
「それなら帰って下さいね」

「新聞屋さんじゃないにゃ」
にゃんぱいあが下からその声に言った。
「僕達は吸血鬼さんに会う為に来たにゃ」
「僕に？」
吸血鬼と言われるとだ。すぐにだった。
声はだ。今度はこう返してきた。
「僕に何か用かな」
「はい、実はですね」
「貴方に会いたくて来た」
「セールスマンもお断りですよ」
今度はこう言ってきたのだった。
「それなら別に」
「だからそういうのじゃないです」
「猫について聞きたい」
五代と一条は今度はこう声の主、吸血鬼と思われる彼に述べた。
「貴方が助けた猫と一緒にいるんです」
「それで聞きたいことがあるのだ」
「ああ、そのころですか」
吸血鬼の声は実に素っ気無いものになった。
その素っ気無い声でだ。彼はまた言ってきた。
「ならいいですよ。お城の中に入って来て下さい」
「いいんですね、そうして」
「今から」
「はい、どうぞ」
ここでも素っ気無くだ。彼は言ってきたのだった。
「御待ちしています」
「よし、それじゃあ」
「今からな」
二人は話があまりにも簡単にいっていることに首を捻りながらもだ。それでもだ。

にゃんぱいあ達を連れてだ。そのうえでだ。
門を開け城に向かう。城の左右の木々は今にも動かんばかりの姿だった。

第三話　完

２０１１・８・２４

# 第四話　吸血鬼の話その一

第四話　吸血鬼の話

五代と一条はにゃんぱいあ達と共に門を潜り城に向かう。その途中の道は。

左右に木々が生い茂りその中から何かが出そうな気配がある。その気配についてだ。

五代はだ。こう言ったのだった。

「猫に蝙蝠かな」

「そうだな。そうした気配だな」

「特に危険な動物の気配はしませんね」

「吸血鬼の使い魔達か」

「はい、そうですよ」

「ここには僕達のお友達が一杯いるんです」

毛利君と小森君がそうだとだ。二人に話してきた。相変わらず二人の上をぱたぱたと羽ばたいている。そうして話してきているのだ。

「血を少し貰う以外は全然危なくないですよ」

「皆大人しくていい子ばかりですから」

「吸血鬼といっても人に危害を及ぼす奴だけじゃない」

「そういうことか」

二人はまたこのことを確認させられた。

「俺達も吸血鬼に対する偏見があったみたいですね」

「吸血鬼も人の心があれば」

どうなるのか。一条は自然にこのことについても話した。

「人間なのだからな」

「ですね。姿形がどうであれ」

「心がそれならば」

「その人は人間ですね」

「仮面ライダーと同じく」

だからこそだ。わかるというのだ。
そのことを話してだった。彼等は。
その古い城の前に来た。その入り口は。
今にも朽ち落ちてしまいそうだ。その入り口を開いた。すると。
鈍い、きしむ音がした。木の扉が開き。そしてその中は。
暗い。そこからは何も見えなかった。
「まるで洞窟だ」
「ですね」
五代は一条のその言葉に頷いた。
「そしてこの奥に」
「吸血鬼がいるのか」
「いえ、もう来られてますよ」
「あちらから」
しかしだった。またしても毛利君と小森君がだ。二人に言ってきた。
するとだ。その暗闇の中からだ。
黒いマントにタキシードを着てだ。金髪を後ろに撫でつけた男が出て来た。
肌は青白く顔は幾分やつれた感じだが整っている。目は紅い。その彼が出て来てだ。五代と一条に舞踏会式の挨拶をしてきた。
それからだ。彼はこう二人に言ってきた。
「はじめまして、吸血鬼です」
「五代祐介です」
「一条薫だ」
「猫のことですね」
吸血鬼は頭を上げて二人にまた言ってきた。
「そのことですね」
「はい、宜しければ」
「そのことについて話してもらえるだろうか」
「わかりました」

にこやかに笑ってだ。吸血鬼も応えてきた。
そのうえでだ。二人とにゃんぱいあ達に述べてきた。
「いいでしょうか」
「はい、それでは」
「何処に」
「城の応接間に来て下さい」
それでだ。話をしたいというのだ。
「飲み物も用意していますので」
「血かにゃ」
「いえ、コーヒーです」
吸血鬼はにゃんぱいあにはこう返した。
「人間の方々には。僕はトマトジュースです」
「じゃあ僕達は何にゃ？」
「君はトマトジュースですね」
吸血鬼はにゃんぱいあを見てにこりと笑ってだ。こう述べたのだった。
「若しくは苺ジュースでしょうか」
「どっちも大好きにゃ」
「では僕と同じトマトジュースで」
同じものをだというのだ。
「それを用意しましょう」
「有り難うにゃ。流石は僕の命の恩人にゃ」
「毛利君と小森君もそれで」
彼等にもトマトジュースを分けるというのだ。
「そうしましょう」
「はい、有り難うございます」
「ではお言葉に甘えまして」
二匹も応える。かくしてだった。

## 第四話　吸血鬼の話その二

二匹の飲み物も決まった。まさむにゃ達にはミルクを用意するとだ。吸血鬼も話した。

全て決めてからだ。一行はあらためて城の中に入った。城の廊下は暗い一歩先すらもわからない様な状況だ。しかしだった。

吸血鬼はその暗闇の中を何でもないといった風に進んでいく。その彼の動きを見てだ。五代と一条は彼の背を見ながら話をした。

「流石ですね」

「闇夜には何もないか」

「ですね、見えてるんですね」

「そうだな」

二人でだ。言うのだった。

「ちゃんと」

「道が」

「はい、見えています」

実際にそうだとだ。吸血鬼も答える。前を向いて進みながら。

「私の目はそういう目ですから」

「吸血鬼は夜でも見える」

「だからか」

「そうです。私は吸血鬼です」

そのことを話し。さらにだった。

「仕事は手品師です」

「手品師！？」

「仕事もあるのか」

「人の世で生きるのなら」

それならばだとだ。吸血鬼も話してくる。

「仕事は必要ですから」

「だからですか」

「仕事も持っているのか」
「はい、猫達の餌代もそれで得ています」
そのだ。仕事からだというのだ。
「そうしています」
「成程、つまり貴方は」
「自分を人間だと考えているのか」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。二人に答える吸血鬼だった。
そうした話をしながらだ。彼等は応接間に着いた。そこはごく有り触れた品のいい部屋だった。二人はそのソファーに座った。
向かい側のソファーには吸血鬼が座る。にゃんぱいあ達はソファーの周りにそれぞれたむろしてだ。話し合いがはじまるのだった。
二人にコーヒーを出しトマトジュースを飲みながらだ。吸血鬼が話す。
「それで御二人は」
「はい、別の世界から来ました」
「そこで戦っている」
「ああ。じゃあ噂は本当だったんですね」
ふとだ。こんなことを言う吸血鬼だった。
「それぞれの世界が入り組んでいるんですね」
「えっ、まさか」
「知っていたのか」
「はい、聞いています」
そうだとだ。吸血鬼は少し驚く二人に話す。
トマトジュースを飲みながらだ。述べていくのだった。
「吸血鬼の集まりの中で」
「その中で聞いたのですか」
「我々のことを」
「仮面ライダーですね」
吸血鬼の言葉だった。

「貴方達は」
「ええ、俺がです」
五代がだ。内心驚きながらも吸血鬼の問いに答えた。
「仮面ライダー、仮面ライダークウガです」
「やっぱり仮面ライダーの方でしたか」
「それでこちらにお邪魔したのは」
「何故僕が困っている猫達を助けるかですね」
「吸血鬼としてにしても」
「好きだからですよ」
吸血鬼はあっさりとした笑みでだ。それが為だと答えた。

## 第四話　吸血鬼の話その三

そのうえでだ。こうも話したのだった。
「昔から動物は好きなんですよ」
「何かそれは」
「人間の会話ですよね」
「はい、そう聞こえます」
「僕は元々人間です」
今度は屈託のない笑み、気品のある顔にそれを浮かべてだ。
そうしてだ。さらに話すのだった。
「死んで。何かの力で吸血鬼になったのです」
「あれっ、僕と同じだにゃ」
ここまで聞いてだ。にゃんぱいあが述べた。
「僕は吸血鬼さんにそうしてもらったけれど」
「そうそう、実は同じなんだよ」
吸血鬼は今度はにゃんぱいあに顔を向けて話す。
「僕の場合は死んでからだけれどね」
「そうだにゃ。同じだにゃ」
「ということはまさか」
「貴方を吸血鬼にしたのは」
五代も一条もだ。そこまで聞いてだ。
「スサノオでしょうか」
「スサノオ？」
「あっ、この世界では名前も姿も変えているかも知れません」
「つまりだ。神だ」
一条はスサノオをこう表現して吸血鬼に話した、
「人を見て楽しむ神だ」
「人をっていうと」
「君は死んだと今言ったな」

「若くして。病気で」
そうなったとだ。吸血鬼自身が話す。
「けれど。そこを助けてもらって」
「その君を助けた者がだ」
「そのスサノオですか」
「僕達吸血鬼を生み出したんですか」
「そう考えていいだろう」
一条は真剣な面持ちでその吸血鬼に話していく。
「実際にこれまで多くの種族をそうして生み出してきた」
「種族っていいますと」
「つまりです」
ここでだ。さらにだった。五代がだ。吸血鬼に話してきた。
「俺達の世界ではそうして多くの勢力を生み出してきまして」
「我々はその様々な種族と戦ってきた」
一条もこのことについて話す。
「そうしてきた」
「そうだったんですか」
「俺が戦った最初の種族はグロンギでした?」
「グロンギといいますと」
「戦うこと、いや人間をることを文化とする種族で」
忘れられなかった。五代にとってグロンギとの戦いはまさに運命だったからこそ。
だからこそ忘れられずにだ。彼は今そのグロンギのことを話すのだった。
「そうして最後に生き残った者が彼等の主と戦う文化だったんです」
「またそれは変わった文化ですね」
「それがグロンギという種族でした」
そうだったとだ。一条は話す。
「そしてその主が」
「そのスサノオですか」

「はい、そうです」
まさにそうだというのだ。
「その時はン＝ダグバ＝ゼバでした」
「それで五代さんはそのン＝ダグバ＝ゼバと」
「闘いました」
究極の戦士になって闘った。このこともまた五代にとっては忘れられないことだった。
「そうして戦いを終わらせました」
「そのスサノオがですか」
「貴方を吸血鬼にしたのです」
「いや、僕も含めて」
吸血鬼はそのグロンギの話を聞いてだった。
そのうえでだ。戸惑う顔になりこう話した。

## 第四話　吸血鬼の話その四

「吸血鬼は人を特に襲ったりしませんよ」
「血を吸うだけですよね」
「なかったら苺やトマトとかで充分ですし」
この辺りはにゃんぱいあと同じだった。
「ですから人に対して危害を加える様なことは」
「スサノオは人間と戦っているだけではないのだ」
「ああ、見ているんでしたっけ」
「そうだ、見ているのだ」
一条が吸血鬼に今度話したのはこのことだった。
「その様々な種族との戦いを見てだ」
「それで？」
「人間を見て、そしてその退屈を紛らわせているのだ」
「じゃあ僕達吸血鬼も」
「にゃんぱいあも含めてだ」
一条は彼も含めてきた。
「君達は見られているのだ」
「人間としてですか」
「スサノオはいつも見ているんですよ」
一条と交代する形でまた五代が話す。
「人間が。姿形を変えられてです」
「僕みたいに」
「果たしてその種族のものとされている性格になるか」
それと共にだった。
「変わらない姿の人間が彼等とどうしていくのか」
「そうしたことを見ているんですね」
「そうです。ですから」
「君達は」

こちらの世界の吸血鬼達のことだ、今一条が言ったのは。
「人間としてこの世界に生きているな」
「ええ、楽しく」
「そして猫達を助けているな」
「困っている動物を助けることは当然ですから」
「それだ。君達は全て見られていたのだ」
一条は真剣な面持ち指摘していく。
「何もかもだ」
「そうだったんですか。それで」
「それでだな」
「僕達は合格したんでしょうか」
今度は吸血鬼が尋ねた。五代と一条に。
「その人間に」
「はい、スサノオから見ればですけれど」
「合格しているだろう」
二人も吸血鬼にこう答えた。
「この世界の人達も含めて」
「そうなっていると思う」
「そうですか。じゃあ僕達は人間なんですね」
「はい、紛れもなく」
「その心が人間だからだ」
それも心優しい。それが吸血鬼の心だった。
「ですから合格したと思います」
「あくまでスサノオから見ればだが」
「そうですか。じゃあ僕としてはですね」
二人に言われてだ。吸血鬼は安堵した顔になった。
そしてそのうえでだ。こうも言ったのだった。
「このまま人間として生きさせてもらいます」
「はい、そうされて下さい」
「是非な」

「わかりました」
吸血鬼は満足した面持ちで頷いた。そしてだ。
その彼にだ。五代と一条は。あらためてだ。
彼に対してだ。こう尋ねたのだった。
「それで、なんですけれどスサノオの」
「君を吸血鬼にした彼のことだが」
「はい、あの人のことですね」
「一体どちらにいますか？」
「この世界の何処に」
「月に一回吸血鬼同士で集っているんです」
吸血鬼は二人にこのことを話した。
「そこにマスター。僕達を吸血鬼にしてくれた」
「スサノオも来る」
「そうなのか」
「そうです」
まさにだ。その通りだというのだ。

## 第四話　吸血鬼の話その五

「ではその会合に」
「御願いします」
「連れて行ってくれ」
「わかりました」
吸血鬼の返答もすぐだった。
「それなら。早速今夜ありますので」
「よし、それじゃあ」
「その会合に行こう」
「そうしてスサノオと会って」
「その目的を問い詰めるとしよう」
ここでも。スサノオと戦うつもりだった。
そうしてだ。早速その夜だった。
今度はだ。吸血鬼が彼等を案内した。
その道中でだ。五代と一条はだ。
先に進む吸血鬼にだ。こう尋ねたのだった。
「それでなのですが」
「君達のマスターはどういった姿をしているのか」
「それです。一体」
「どういった格好なのか」
「それですね」
吸血鬼もだ。彼等のその言葉にだ。
すぐにだ。こう答えたのだった。
「服装は僕と同じでして」
「タキシードにマント」
「それか」
「はい、これは吸血鬼の正装です」
そうだというのだ。彼が今実際にしている格好はだ。

「二十世紀初頭から決まっているんです」
「あれっ、昔は違ったの」
カツオは吸血鬼その話を聞いて述べた。
「そうだったの」
「そうだよ。昔は正装も違ったんだよ」
「というとどんな服を着てらしたんですか？」
「昔の貴族の礼装だったんだ」
かつて着ていたのはそれだというのだ。
「僕達は闇の貴族とも言われているからね」
「だから貴族の礼装なんですか」
「その時代ごとのね」
「それでタキシードなんですか」
「マントは翼みたいなものだよ」
マントについても語られた。
「これはね」
「マントはそれなんですか」
「そう、僕達は空も飛ぶから」
ただしこの姿で飛びはしない。宙に浮かぶことはあってもだ。
それでも吸血鬼本来の姿で飛ばない。それならばだった。
「蝙蝠に姿を変えてね」
「ああ、だから僕の背中に蝙蝠の翼があるにゃ」
にゃんぱいあはここで自分のその背中のことがわかった。
「それでだったにゃ」
「そうだよ。吸血鬼は蝙蝠にもなれば」
それに加えてだった。
「狼にもなれるし霧にもなれるし」
「何だ？結構変われるだな」
「吸血鬼の能力は多彩なんだ」
まさむにゃにもこう話す。
「だから蝙蝠にもなれて」

「それでマントもあってか」
「そういうことだよ。ついでに言えば」
今度は吸血鬼の方から話した。
「僕達はこうして日の下にいても大丈夫だよ」
「そうそう。それ位では何でもないんですね」
にゃてんしはだ。どうやらそのことを知っていたらしい。
それで実際にだ。こんなことも言った。
「カーミラさんや伯爵さん普通にいましたからね」
「あの人達は吸血鬼の中でも名士だよ」
この吸血鬼も彼等のことを知っていた。しかも名士だというのだ。
「素晴らしい人達だよ」
「そうですよね。あと大蒜も」
「あれが通じるのはスラブの吸血鬼だから」
吸血鬼のルーツの一つはそこにある。東欧にだ。

## 第四話　吸血鬼の話その六

「僕は大蒜とトマトを使ったパスタも好きだから」
「そうそう、トマトに大蒜を入れると余計に美味しいんだにゃ」
またにゃんぱいあがこのうえない笑顔で話す。
「僕も大好きだにゃ」
「そう、パスタもいいね」
吸血鬼はさらに上機嫌で話す。
「イタリア料理もいいよね」
「吸血鬼にイタリアというのは」
茶々丸にとっては。それは。
「あまり合わないと思いますが」
「あれっ、そうかな」
「ルーマニアとかならともかく」
「ルーマニアもラテン系だよ」
イタリアと同じくである。実はそうなのだ。
「だから別に構わないじゃないかな」
「では好きなものは何ですか？」
「パスタの他には赤ワインで」
吸血鬼は茶々丸のその話に応えて言う。
「あとは鮪のお刺身も」
「和食も好きにゃ？」
「だから日本にいるんだよ」
そうだともいるのだ。
「和食が好きだからね」
「ううん、やっぱり何ていうか」
「人間的だな」
五代も一条もだ。あらためてだ。
吸血鬼自身の話からだ。彼が人間であることを知ったのだった。

そのことを知って話をしながらだった。
一行が辿り着いた場所は。そこはというと。
「あれっ、ここって」
「そうだな。ホテルだな」
「はい、ホテルです」
豪華なホテルだった。帝国ホテルの様な。
そのホテルの前に来てだ。また話す五代と一条だった。
ホテルは白い巨大な姿を彼等の前に現わしていた。まさに聳え立っていた。そのホテルを見上げながらだ。吸血鬼が話した。
「ここのパーティー会場で、ですね」
「会合ですか」
「その吸血鬼の」
「はい、それが行われます」
こう話した。しかしだ。
ここでだ。黒と金色の制服を着たホテルマンが来てだ。彼等に言ってきた。
「お客様ですね」
「あっ、はい」
吸血鬼がそのホテルマンに応える。
「今日パーティーに招待されていた」
「確か」
ホテルマンはここで日本人そのものの名前を言った。するとだ。
吸血鬼は大きく頷きだ。こう返したのだった。
「それが私です」
「わかりました。では案内させて頂きます」
「それとです」
ホテルマンは手慣れた動作でだ。今度はだ。
五代と一条に目を向けてだ。こう言うのだった。
「こちらの方々は」
「連れです」

「お連れの方々ですか」
「はい、ですから」
「わたりました」
ここでまた和風な名前を出し。そうして吸血鬼から五代と一条に顔を向けて。
そのうえでだ。こう彼等に話した。
「ではです」
「いいんでしょうか」
「我々も参加して」
「はい、どうぞ」
すぐに応えたホテルマンだった。
そしてだ。今度はだ。
にゃんぱいあ達も見る。彼等を見てからだ。

## 第四話　吸血鬼の話その七

吸血鬼にだ。こんなことを話してきた。
「当ホテルはペット持ち込みも可ですが」
「それでもですか」
「はい、それでもです」
こう言ってだ。そのうえでだ。
吸血鬼にだ。こうも言った。
「ですがサインを御願いできますか」
「持ち込み許可のですね」
「はい、ペットの」
ホテルマンは気軽に彼等に話す。
「その許可証にサインを」
「それでは」
「今から」
五代と吸血鬼が応えた。そうしてだ。
その中でだ。吸血鬼が出て来てだ。五代に話した。
「ではここは僕が」
「サインされますか」
「はい、僕が主に呼ばれてますから」
言うならホストだからだ。それでだというのだ。
彼はだ。五代に自分がサインすると言ってだった。
実際に彼がサインをしてだ。にゃんぱいあはよしとなった。そうしてからだ。彼等はだ。
吸血鬼に案内されてホテルの中を進む。ホテルの廊下は奇麗な赤絨毯でだ。その絨毯は隅から隅まで丁寧に掃除されている。
全体的に気品のある造りだ。そのホテルの中を進んでだ。
にゃてんしはこんなことを言った。
「いや、ここは中々」

「いいにゃ？」
「はい、天界もよかったですが」
彼が元いただ。そこを話に出してだ。
そのうえでだ。彼は今話すのだった。
「ここもいいですね。というよりは」
「というよりは？」
「やっぱり人間の世界の方が楽しいでしょうか」
こう話したのだった。
「とても」
「そうなのにゃ」
「天界は杓子定規な方と何から何まで善で統一されて面白くないのです」
そうだというのだ。にゃてんしの言葉では。
「むしろ。多くの悪がある方が」
「おい御前」
にゃてんしの顔に黒いものがさした時にだ。まさむにゃがだ。
すぐにだ。彼を右の前足で指し示し言った。
「それが天使の言葉か？」
「はい、そうですよ」
「何処がそうなんだよ」
「どうせ私は天界を追い出されましたから」
表情は変わらないが黒さは増していた。
「それでもいいではないですか」
「そんなのだから天界を追い出されたんじゃないのか？」
「何分融通の利かない世界でしたから」
「だから御前が悪かったんじゃないのか？」
「さて、どうでしょうか」
「しかしだ」
ここでだ。一条がだ。
にゃてんしのその話を聞いたうえで述べた。

「それも一理ある」
「僕の言葉にですね」
「そうだ。実際に人間というものはな」
「奇麗ごとが好きにしても」
「善ばかりではないからな」
これまでの戦いからの言葉だった。これも。
「悪もある。そうしたものも含めて全てが人間だ」
「全てがですか」
「人間と言っても完全に純粋でもない」
一条はやや首を捻りながら話す。
「悪の部分もある。だがそれに絶望したり諦めることがだ」
「スサノオの思う壺なんだよ」
五代もこのことについて話す。
「スサノオはそうしたところも見ているからね」
「非常に複雑なのですね」
茶々丸はそうしたことを聞いて述べた。
「スサノオという人のやることや考えていることは」
「うん、何重にも罠を仕掛けているから」
五代はにゃんぱいあ達にこうも話す。
「それを乗り越えていくことが大事なんだ」
「では僕は乗り越えられたのでしょうか」
その五代の考えを聞きながら。吸血鬼もだ。

## 第四話　吸血鬼の話その八

考える顔になりだ。彼に問うた。
「スサノオのその罠を」
「それは彼に会ってからはっきりする」
一条はここでは即答しなかった。それをあえて避けたのだ。
そしてだ。そうした話をしているうちにだ。
その会場が行われている大広間の扉の前に来た。そこを開けると。
立食のパーティーが開かれていた。誰もがだ。
吸血鬼と同じ格好をしていた。男も女もだ。ズボンをはいていた。
それを見てだ。にゃんぱいあが首を捻って言った。
「あれっ、女の人もズボンにゃ」
「吸血鬼の正装だからね」
それでだとだ。その吸血鬼がにゃんぱいあに答えた。誰もがテーブルを囲んでその上にある馳走や酒を飲んでいる。赤い食べものが多い。
その中でもだ。とりわけだ。
酒はだ。紅いものばかりだった。ワインが多い。
そのワインをもの欲しそうに見ながらだ。吸血鬼は五代達に話す。
「ここです」
「ここが会場ですね」
「吸血鬼達のパーティーの」
「はい、そうです」
まさにそうだとだ。吸血鬼も答える。
「ここがです」
「さて、それではですね」
「このパーティーの主賓を探すか」
二人はこう言い合ってだった。そうしてだ。
中を見回す。だがここでだ。

その吸血鬼達がだ。彼等のところに来てだ。笑顔で声をかけてきた。
「やあ、よく来たね」
「久し振りだね」
「それでそちらの人達は？」
「お客さんかな」
「ひょっとして」
「うん、そうだよ」
その同胞達にだ。吸血鬼は笑顔でこう答えた。
「僕の友達なんだ」
「ふうん、見たところ悪い人達じゃないね」
「かなり真っ直ぐだね」
「しかもかなり強い」
「そういう人だね」
「わかるんだ」
吸血鬼が彼等に応える。
「そうしたことも」
「伊達に何百年も生きているからね」
「それもわかるよ」
「一目見ただけでいい人か悪い人かはね」
「そうしたことは」
わかるとだ。彼等も言う。そしてだ。
今度はにゃんぱいあ達を見てだ。こんなことも言ったのだった。
「で、そこの猫ちゃん達はペット？」
「蝙蝠もいるし」
「じゃあ使い魔？」
「それかな」
「あっ、ペットでもないし使い魔でもないし」
そうしたものではないと言ってだった。そしてだ。
そのうえでだ。吸血鬼はだ。彼等にこう話した。

「友達なんだ」
「ああ、友達か」
「そういえば君猫とか蝙蝠とか好きで」
「すぐに助けてたし」
「そういう子達なんだ」
「その通りだにゃ」
にゃんぱいあも彼等に話す。右の前足をあげて応えてだ。
「僕はこの人に助けてもらったにゃ」
「ああ、やっぱりね」
「そうだったんだね」
「彼はいつも優しいからね」
「困っている相手がいたら見捨てていられない人だから」
猫や蝙蝠だけではないというのだ。助ける相手はだ。
そしてだ。彼等は再びだ。五代達を見た。特に五代を見てだ。

## 第四話　吸血鬼の話その九

こうだ。彼等に言った。
「君達、相当色々な戦いを経てきたね」
「特にそっちの優しい感じの人」
五代のことである。
「貴方は特にですね」
「とても優しい人ですが多くの戦いを経てきた」
「戦いたくはなくても」
「そうしてきてですね」
「生きてきましたね、ずっと」
「その姿になれるようになって」
「はい」
その通りだとだ。五代もだ。
真剣な顔になってだ。そうしてだった。
頷いてだ。彼等に答えたのだった。
「俺は。仮面ライダーです」
「仮面ライダー？」
「それが貴方のその戦う時の姿」
「それなのですか」
「その仮面ライダーというのが」
「はい、仮面ライダークウガといいます」
それだとだ。吸血鬼達にもだ。五代は話した。
「その姿で戦ってきています」
「では今ここに来ておられる理由は」
「それは何故でしょうか」
「それは」
「貴方達のマスターのことでだ」
五代と共にだ。一条が話してきた。

「その彼のことだ」
「そうですか。あの方とですか」
「御会いしたいのですか」
「そう仰るのですか」
吸血鬼達はそれを聞いてだ。納得した様にそれぞれ言った。
それでだ。すぐに二人に言ってきた。
「では今は」
「マスターに会われますか」
「今ここで」
「来られてるよね」
吸血鬼が同胞達に尋ねた。
「あの方も」
「あれっ、さっきまでおられたけれど」
「何処かな」
「何処に行かれたのかな」
吸血鬼達は周囲を見回した。会場の中をだ。
そうして彼を探すがだ。それでもだった。
何故か見当たらずだ。彼等もだった。
困った顔になる。それでもだ。
その彼が見つからずだ。困ってしまっていた。
「おかしいなあ。すぐにおられるってわかる方なのに」
「どうして今に限っておられないんだ？」
「また急に姿を消されて」
「よくこういうことがあるにしても」
「そうだよな。ちょっとな」
「今は特に」
「まあここにはおられるんだよね」
ここで言ったのは吸血鬼だった。同胞達に言ったのである。
「それはそうだよね」
「うん、それは間違いないよ」

「私達実際に御会いしたし」
「だからね」
「おられるのは間違いないから」
それは確かだというのだ。だがそれでもだった。
その彼は見つからずだ。彼等は途方に暮れることになった。
しかしここでだ。にゃんぱいあが言うのだった。
「まあ言っても仕方ないにゃ」
「仕方ない？」
「仕方ないっていうと」
「待つのが一番だにゃ」
あっけらかんとしてだ。こう言ったのである。
「その人を」
「いや、何時出て来られるかというと」
「それがわからないからね」
「急に消えられて急に出てこられる方だから」
「どうも」
吸血鬼達がこう言うとだった。ふとだ。
五代があることを思い出してだ。こう一条に囁いた。

## 第四話　吸血鬼の話その十

「そうしたところは同じですね」
「そうだな。変わらないな」
「スサノオですね。やはり」
五代も一条もだ。彼のことはよくわかっているからこそだ。
それでだ。頷き合って話すのだった。
「そうして様子を見ているんですね」
「俺達のな」
「ということは」
それならばとだ。五代は言っていってだった。
そうしてだ。一つの答えが出たのだった。
「スサノオは出て来るな」
「間も無く」
「何かわかっておられる感じですね」
吸血鬼がその二人に対して述べた。彼等を見てだ。
「マスターのことも」
「まあ。そのマスターが俺達が思っている相手ならね」
「その行動はわかっているから」
二人はこのことを仮定して話していた。
しかしだ。それでもだった。
あらためて考えながらだ。述べたのだった。
「じゃあ。今はにゃんぱいあ君の言う通り」
「じっくり待つとするか」
「そうにゃ。とりあえず何か食べるにゃ」
にゃんぱいあの考えはもうそこに至っていた。
「とりあえず赤いものを食べたいにゃ」
「ああ、苺があるよ」
吸血鬼がだ。その彼に話す。

「それでいいかな」
「苺大好きにゃ」
満面の笑顔でだ。にゃんぱいあは吸血鬼の言葉に応えた。両方の前足も万歳の形になっている。身体全体で喜びを表わしている。
そうしてだった。早速だ。
テーブルの上に登ってそうしてだった。苺を食べはじめた。
まさむにゃや茶々丸もそれに続く。五代達もだ。
パーティーの料理、バイキングのメニューをだ。それぞれ楽しみはじめた。その味は。
「美味いですね」
「そうだな」
また五代の言葉に頷く一条だった。ただし今度は頷く話の中身が違っていた。
「味はいいな」
「このホテルはかなりのホテルみたいですね」
「はい、かなりのホテルです」
実際にそうだとだ。吸血鬼も答える。
彼は赤ワインを飲んでいる。そうしながら話していた。
「もうこっちの世界ではかなりランクが上の」
「ですよね。この味は」
「かなりのものだな」
「じゃあこの御馳走を食べながら」
「待つか」
スサノオが来るのをだ。待とうというのだ。
そうした話をしてだった。彼等は。
御馳走に美酒を食べながらだ。相手を待っていた。そうしてだ。
やがてだ。彼等の周囲が騒がしくなってきた。
「おお、マスター」
「戻られたのですか」
「そうなのですね」

「いや、ずっとこの場所にいた」
そうだとだ。誰かが言った。
「この会場にな」
「あれっ、そうだったんですか」
「最初からですか」
「おられたんですか」
「いた」
あの声だった。二人、とりわけ五代はだ。
その声を聞いてだ。瞬時に身構えた。その彼と共にだ。
一条もだ。声の方を見たのだった。そこはだ。
人だかりができて見えない。しかしだった。
そこにいるのはわかった。彼がだ。それでだった。
二人はだ。それぞれ身構えたまま言うのだった。
「あそこですね」
「そうだな。あの中にな」
「奴がいます」
「スサノオが」
「ああ、あの方がですか」
吸血鬼も彼等のそのやり取りを聞いて述べる。

## 第四話　吸血鬼の話その十一

「やっぱりそうなんですか」
「うん、間違いない」
「声でわかる。それにこの気配」
「圧倒的なプレッシャー」
そうしたものまで感じてだ。二人はわかったのだ。
そうしてだった。その人だかりを見る。やがてだ。
その人だかりの中からだ。彼が出て来たのだった。
吸血鬼の礼装のそのタキシードにマントでだ。髪の毛は一本もない。
肌はやはり白く目は血走りだ。口からは普通の吸血鬼よりも大きく鋭い牙がある。その姿を見るまでもなくだ。二人は既に確信していた。
そしてだ。本人に対してだ。直接にだった。
その名前をだ。呼んだのだった。
「スサノオ」
「やはりいたか」
「ふむ」
それを聞いてだ。その声でだ。
その吸血鬼のマスター、スサノオが言ってきた。
「来ているのはわかっていた」
「そちらもか」
「わかっていたというのか」
「如何にも」
その通りだと答えてだった。そうしてだ。
スサノオはだ。二人の頭に直接語り掛けてきたのだった。
『さて、それではだ』
『頭の中にか』

『直接語り掛けて来るか』
『如何にも』
その通りだとだ。答えきたスサノオだった。
『君達の聞きたいことはわかっている』
『この世界で何をしている』
『何を考えてだ』
『既にわかっていると思うが』
スサノオは頭の中で笑ってみせて述べた。
『最早な』
『この世界でも見ているんだな』
『人間を』
『そう、私は永遠の退屈の牢獄の中にいる』
そこから逃れることはまだできていない。それでだというのだ。
スサノオはだ。二人にだ。さらに語り掛けてきた。
『その退屈を紛らわせる為にだ』
『人を吸血鬼として助け』
『そうしてか』
『そうだ。人間を見ている』
このことはだ。やはり同じだった。
スサノオは自らの口で言いだ。そしてだ。
二人にだ。さらに話してみせた。
『ただし。この世界ではだ』
『この世界では！？』
『一体何をしているというのだ』
『戦うことはしていない』
それはしていないというのだ。これも五代達の見た通りだった。
『見ているだけだ』
『人間を』
『それだけだというのか』
『そして君達に伝える為に今いる』

今度はこんなことを言ってきたスサノオだった。
『私はあらゆる世界にいてそうして人を見ている』
『そしてか』
『それぞれの世界で人間を見ているというのか』
『他の世界では戦うこともある』
『その世界にいる戦士達と』
『やはりそうしているのか』
『そしてだ』
ここまで話してだった。スサノオは。
その声を笑わせてだ。そのうえでだった。

## 第四話　吸血鬼の話その十二

二人の脳にだ。告げたのだった。
『君達が来るのを待っている』
『貴様がその考えでいる限りはだ』
『俺達は戦う』
二人の、より言えばライダー達の答えは決まっていた。そのスサノオ、目の前にいるバンパイアマスターを見据えての言葉だった。
『そして全ての戦いでだ』
『貴様を退ける』
『それを楽しみにしている』
まさにだ。それをだというのだ。
ここまで話してだ。スサノオは。
不敵な笑みを浮かべてだ。踵を返してだ。
吸血鬼達の中に姿を消した。そうしてだった。
目的を果たした五代達は帰ろうとした。だがここでだ。
茶々丸がだ。二人に言ってきたのだった。
「あっ、待って下さい」
「えっ、待って欲しいって」
「何かあるのか」
「折角来たんですから楽しみましょう」
こう二人にだ。二人の足下から話したのだった。
「御馳走にお酒を」
「ううん、戦わないっていうし」
「それならいいか」
「ああ、戦わないんですか」
茶々丸も二人の話を聞いて述べる。
「それはよかったですね」
「スサノオは戦いばかりを求めてはいない」

「この発想はなかった」
二人もだ。それはなかった。
何故ならスサノオとは常に戦ってきたからだ。だからこそだ。
スサノオは戦うものだを思っていた。しかしそれは違っていた。
彼は。
「戦いを抜きにしてもまず人間に仕掛け」
「そうして人間を見ているのだ」
「それがスサノオの目的」
「そういうことか」
「マスターは難しい方だったのですね」
吸血鬼もあらためて知ることだった。自身のマスターとはいっても。
「まあとにかく戦いが行われなくて何よりです」
「とりあえずはですけれどね」
「この世界では」
「では今は楽しみましょう」
吸血鬼も彼等に話した。そうしてだった。
一行は御馳走に美酒を楽しんでからだ。そうしてだった。
帰路についた。その中でだ。
まさむにゃがだ。二人に尋ねた。
「それでだけれどよ」
「それで？」
「それでというと」
「あんた達もうこの世界でやることはやったんだよな」
「うん、スサノオとの話は終わったから」
「後は帰るだけだ」
こう話してだった。二人は実際にだ。
今は彼等がこの世界に来る時に通ったその公園の土管に向かっていた。だが、だ。
ここでだ。にゃてんしが彼等に言ってきた。

「僕達もそちらの世界に行っていいですよね」
「うん、何時でも来て」
「そして楽しんでいってくれ」
彼等の世界をだ。そうしてくれというのだ。
「何なら今からね」
「来るか？」
二人はここで彼等を誘った。
「俺達の世界に」
「俺達もこの世界が気に入った」
「だからお互いにね」
「行き来しないか」
「いいですね」
吸血鬼がだ。二人の提案にだ。
笑顔になってだ。それで述べたのだった。
「それではお互いに」
「あっちの世界に自由に行っていいにゃ」
「それはいいな」
にゃんぱいあとまさむにゃも言う。
「ならあっちでも血を吸うにゃ」
「ってそれはまずいだろ」
そこはすぐに突っ込みを入れるまさむにゃだった。
「幾ら何でもな」
「じゃあどうすればいいにゃ？」
「俺の血を吸えよ」
これがまさむにゃの言葉だった。
「他の世界の奴等の血を吸ったら問題だからな」
「そうかにゃ。血を吸って駄目かにゃ」
「よくないね」
五代もそこは突っ込みを入れる。
「どうしてもなら俺の血を吸えばいいから」

「何か面白くないにゃ」
まさむにゃと五代に言われてだ。にゃんぱいあは。
少し面白くないといった顔になった。しかしだ。
すぐに気持ちを取り直してだ。こう言いだした。
「なら五代さん、あっちの世界に行ったらにゃ」
「俺の血を吸うんだね」
「それと苺にゃ」
それもだとだ。笑顔で言うのである。
「苺たっぷりと欲しいにゃ」
「本当に苺好きだね」
「赤いものは何でも大好きにゃ」
こう言ってであった。彼等は元の世界に戻り別の世界に行くのだった。
にゃんぱいあの世界でだ。一つのことがわかった。そしてそれがライダー達の戦いのだ。はじまりとなり合図となるものだった。

第四話　完

２０１１・８・３１

# 第五話　忠の世界その一

第五話

忠の世界

にゃんぱいあ達の世界でのことは五代が終わらせた。しかしだ。

響鬼は川の土手にだ。明日夢と横に並んで座りだ。そうしてだった。

彼はだ。こう明日夢に話した。

「この戦いはかなり激しく長いものになるだろうな」

「にゃんぱいあちゃんの世界だけじゃないですか」

「うん、それに終わらないな」

こうだ。川の銀色のせせらぎを見ながら話す。

「あの女のこともあるし」

「あと野獣ですね」

「多分それだけじゃない」

他の世界の存在についてもだ。響鬼は言及した。

「にゃんぱいあの世界も出たんだ」

「なら他の世界も」

「関わってくるだろうな。だから」

「戦うんですね」

「今回の相手は魔化魅だけじゃない」

他の存在もだ。今回の彼等の相手だとも言うのだった。

「その中で俺が一番気になるのは」

「野獣ですか？」

「いや、女だ」

そちらだというのである。響鬼が一番気になっているのはだ。

「あの女だ」

「っていいますと」

「乾達と戦っていたあいつだよ」

「ああ、あの人ですか」
「明らかに何か知ってるしな」
考える顔で言う響鬼だった。
「あいつと会いたいな」
「それで確めたいんですね」
「あいつが何処から来たか」
響鬼は太陽の光を反射し銀色に輝いている川を見る。川は波打つ度に銀色に光る。その合間に青も見えている。その川を見ながらだ。
彼はだ。明日夢に話すのだった。
「そしてその力も」
「スサノオが関わってるのは間違いないですよね」
「それは確かだな」
このことはだ。もう言うまでもなかった。
「だから是非あの女と会いたいな」
「会えますかね」
「会えるさ」
このことにはだ。響鬼は微笑みだ。
そのうえでだ。こんなことを言うのだった。
「あの女の方から俺達の相手をしに」
「来るんですね」
「だから待っていればいいんだ」
「じゃあその間は」
「たちばなに行こう」
まずはそこにだというのだ。
「それでお茶でも飲もう」
「何か落ち着いてますね」
「焦っても仕方ないからな」
このことにはだ。響鬼は気さくに笑って話した。
「ここは明るくいこうか」
「そうですね。焦らず明るくですね」

「リラックスしていこうな」
実に響鬼らしい言葉だった。
「それじゃあ何を食べる？少年は」
「少年じゃなくて明日夢ですよね」
「ははは、そうだったそうだった」
かつての呼び名はだ。何となく出してしまった響鬼だった。そうしたリラックスした雰囲気でだ。二人はたちばなに行った。
そしてそこで、であった。二人は店に入るとすぐに立花香須美と立花日菜佳にだ。こう言われたのだった。
「あれっ、響鬼さんですか？」
「明日夢君まで」
何故かだ。二人は思わぬ客といった顔で二人を出迎えたのだ。
それでだ。こう言ってきたのである。
「さっき何か連絡があって」
「来て欲しいって言われてましたけれど」
「えっ、誰にだい？」
響鬼もだ。二人の話を聞いてだ。

## 第五話　忠の世界その二

すぐに怪訝な顔になってだ。二人に問い返した。
「そんなことを」
「威吹鬼さんと轟鬼さんからです」
「御二人に連絡はいってなかったですか？」
「あの二人に」
それを聞いてだ。余計にだ。
響鬼は首を捻りだ。そしてだった。
「というとまさか」
「魔化魅でしょうか」
ここで明日夢も言った。
「それが出て来たんでしょうか」
「いや、まさか」
「あの人ですか」
「あの女かな」
考える顔で述べる響鬼だった。
「やっぱり」
「噂をすればでしょうか」
こう話すとだ。ここでだった。
明日夢の携帯が為った。彼はすぐにそれに出た。すると出て来たのは。
天美あきらだった。彼女が言ってきたのだ。
『明日夢君、今何処ですか？』
「うん、たちばなだけれど」
『響鬼さんはおられますか？』
「いるよ」
すぐに答える明日夢だった。
「ならすぐに」

『来て下さい』
話は急いでいる感じだ。
『あの女の人が出て来ました』
「場所は何処なの？」
『はい、あの橋の下です』
そこだというのだ。
『そこで今』
「わかったよ。それじゃあ」
ここまで聞いてだ。明日夢はあきらにこうも言った。
「京介にも伝えるから」
『御願いします』
「それじゃあね」
こう話してだ。携帯を切りだ。
響鬼にだ。話したのだった。
「あのいつもの橋のところで戦っておられるそうです」
「ああ、あそこか」
橋の下と聞いただけでだ。響鬼もわかった。
「あのいつも戦っている石と川のか」
「ですね。じゃあ」
「行くぞ、明日夢」
響鬼もすぐにだった。
明日夢に声をかけてだ。そうしてだった。
たちばなを後にする。その際だ。
立花姉妹がだ。こう二人に尋ねた。
「私達のどちらかが行かなくていいの？」
「サポーターとして」
「ああ、いいさ」
響鬼は二人に背を向けて店から出ようとしていたがここでだ。
二人の方を向きなおりだ。気さくな笑みで応えた。
「明日夢がいるからな」

「あっそうね、明日夢君がいるのならね」
「何の心配もいらないわね」
二人もだ。響鬼の言葉を受けてだ。
すぐに笑顔になってだ。こう応えたのだった。
「やっぱり響鬼さんには明日夢君よね」
「それならそれでいけるわね」
「ええと、できるかどうかわからないですけれど」
少し照れ臭い笑みになってだ。明日夢も応える。
そうしたやり取りからだ。二人はたちばなからだ。その橋の下に向かう。当然その途中で桐矢に連絡もしてだ。そのうえでそこに向かった。
小石が敷かれた場所が下に絨毯の様に拡がる青い塗装の鉄とコンクリートの橋の下には小石と共に浅い川がある。そこに足首を浸からせてだ。

## 第五話　忠の世界その三

威吹鬼と轟鬼がだ。あの女と戦っていた。
二人でそれぞれ左右から攻撃を仕掛ける。しかしだ。
女は強くだ。全く相手にならなかった。
「くっ、やはり僕達だけでは」
「適わないというのか？」
一旦間合いを離して体勢を立て直しながらだ。二人は言う。
「乾さん達とは違い」
「それも二人だと」
「確かに貴方達は強いわ」
女はその手に持った刀を悠然と構え宙に浮かんだ状態でその二人に告げる。
「けれど」
「けれど？」
「何だっていうんだ」
「私はもっと強いのよ」
そうだとだ。女は言うのである。
「あの三人、とりあけファイズとカイザだったかしら」
「既に覚えているというのか」
「一度の戦いで」
「記憶には自信があるわ」
それでだ。もう覚えたというのだ。
「あの二人の強さはかなりだったわね」
「だが僕達はというのか」
「乾さんよりも」
「同じ位かしら。けれど」
それでもだというのだ。女は。
「二人では私の相手にはならないわ」

「くっ、やはりそうか」
「二人だけではか」
「そして」
「そして？」
「今度は何だって言うんだ？」
「私の相手にならなければ」
それではだ。どうかともいうのだ。
「天草様の相手はできないわね」
「天草！？」
「というとまさか」
その名を聞いてだ。二人はすぐにだ。
ある者の名を思い出した。その者こそは。
「天草四郎のことか！？」
「島原の乱の」
「知っているのね。そうよ」
その通りだとだ。女も返す。
「この柳生義仙の主であるあの方の相手はできないわね」
「天草、あちらの世界の天草なのか」
「この女の世界の」
「その通り。この世界の天草様と私達の世界の天草様は違うわ」
実際にそうだとだ。女、義仙も答える。
「その天草様には遥かに及ばないわ」
「くっ、僕達ではか」
「二人だけでは」
「ええ。ただ二人ではなくなるわね」
ここでだ。義仙がこう言うとだ。
後ろからバイクが一台来た。そこからだ。
まずは明日夢と桐矢が降りて来てだ。二人に言ってきた。
「お待たせしました！」
「すいません、遅れました」

「ああ、あきらが呼んでくれたんだ」
威吹鬼は二人の姿を見てすぐに察した。
「有り難いね。それで響鬼さんも」
「よっ」
左手を敬礼の様にしてびしっと前にやってだ。響鬼はバイクから降りてから二人に挨拶をしてきた。
「頑張ってくれてるな」
「はい、何とか」
「生きてます」
「で、あきらは？」
響鬼は周囲を見回しながら彼女の姿を探した。
「何処にいるんだ？」
「あれっ、さっきまでいたんですけれど」
「何処に行ったかな」
「すいません、大丈夫ですか？」
威吹鬼と轟鬼が言ってからだ。すぐにだった。
そのあきらが出て来てだ。頭を下げて来た。
「実はおトイレに行っていまして」
「そうか。それなら仕方ないな」
威吹鬼はそれで納得した。

## 第五話　忠の世界その四

「まあとにかく。今は」
「はい、今はですね」
「響鬼さんが来てくれたから」
それでだというのだった。そうしてだ。
響鬼の変身も終わりだ。三人でだ。
義仙と対峙する。そのうえでだ。
響鬼はだ。明日夢に言った。
「じゃあ明日夢はな」
「はい、天美さんとですね」
「ちょっと安全なところにいてくれ」
戦えない彼はそうしろというのだ。
「危ないからな」
「わかりました。それじゃあ」
「じゃあ俺も」
桐矢もだ。変身してだった。
そのうえで義仙に対峙する。これで四人だった。
四人はもうそれぞれの楽器を手にしている。武装しながらだ。
響鬼は義仙の正面にいながらだ。三人に告げた。
「じゃあ俺が正面から攻めるか」
「それではですね」
「俺達は」
「ああ、横から頼むな」
こう威吹鬼と轟鬼に言ってだ。
そのうえでだ。桐矢にも言った。
「いいな」
「はい」
彼も響鬼の言葉に頷く。

「四人で仕掛けてですね」
「一気に決めるぞ」
「そうね。四人ならね」
どうかとだ。義仙も言ってくる。
「私の相手になるわね」
「こっちも一対一でいきたいんだがね」
それにはこだわりも見せる響鬼だった。
しかし彼も状況がわかっている。だからなのだ。
「まあ仕方ないな」
「好みは言っていられないということね」
「そういうことだ」
響鬼は口調はいつもの通り飄々とはしている。
しかしだ。それでもだ。
義仙を見据えたままだ。次第に間合いを詰め。
四人の鬼で一斉に攻撃を浴びせようとする。だが、
ここでだ。急にだった。
義仙はだ。構えを解いてこう響鬼達に言ってきた。
「いいわ、それじゃあ」
「それじゃあ？」
「ここで決着をか」
「いえ、それはまだよ」
こうだ。余裕の笑みで告げたのである。
「ここでそれを決めるのは勿体無いわ」
「勿体無い」
「何が言いたい」
威吹鬼と轟鬼が義仙に問うた。
「まさかここではなく」
「別の世界でというのか」
「私達の世界で決着をつけましょう」
これが義仙の言いたいことだった。

それを告げてだった。彼女は。
宙に浮かんだままでだ。足からだ。
姿を消していく。その中で響鬼達に告げた。
「門は既にあるわ」
「それは何処だ」
桐矢が鬼の姿で義仙人に問う。
「御前達の世界に行く門は」
「この橋の上よ」
そのだ。彼等が今いるそこのだというのだ。

## 第五話　忠の世界その五

「そこにあるわ」
「何だ、近いな」
それを聞いてだ。響鬼が言った。
「そこからか」
「来るといいわ。そしてそこでね」
「天草、そしてだな」
「そうよ。スサノオというのね」
義仙も響鬼達の言葉に合わせて言う。
「あの方もおられるわ」
「さて、今度はどういった姿で出て来るのか」
響鬼はもうスサノオのことを考えていた。
「そしてあちらの世界でどういった戦いになるのか」
「楽しみにしているのかしら」
「楽しみはしないさ」
響鬼はそれは否定した。少なくとも彼は戦いに楽しみや喜びといったものを見出す者ではない。それで言うのであった。
「だがそれでも」
「戦いはするというのね」
「ああ、そういうことさ」
「わかったわ。それじゃあ来るといいわ」
既にだ。義仙の姿は完全に消えていた。声だけが残っている。
その声で告げてだった。気配も消えた。
後に残ったのは鬼達だった。その鬼達にだ。
明日夢とあきらが駆けて来てだ。こう話してきた。
「あの、橋の上に」
「怪しい門が出て来ました」
「成程、言った通りだな」

元の姿に戻りながらだ。響鬼は。
二人の言葉に頷きだ。それからこう彼等に告げた。
「さっき女から聞いたよ」
「あの隻眼のですか」
「おかしな女に」
「うん、そうなんだ」
「橋の上にあいつ等の世界に行く門があるってね」
威吹鬼と轟鬼も元の姿に戻っている。その姿で明日夢とあきらに返す。
「言った通りだね」
「少なくともあいつは嘘は吐いていないんだな」
「それなら」
桐矢はまさに単刀直入だった。勇んでだ。
響鬼にだ。右手を力瘤にして言った。
「今から行きましょう」
「そうだな。早く行って早く片付けよう」
響鬼はあえてリラックスした調子で言ってだ。そうしてだ。
一行にだ。こうも言った。
「じゃあ今から橋の上に行こう」
「よし、それなら」
「橋の上の門に」
全員応えてだ。そうしてだった。
彼等はだ。橋の上に向かう。その彼等にだ。
一組の男女が来てだ。言ってきたのだった。
「おっと、四人だけじゃな」
「少し寂しいわね」
「えっ、斬鬼さん」
「それに朱鬼さんも」
轟鬼と威吹鬼はだ。彼等の姿を認めてだ。
目を丸くさせてだ。驚いた声で言った。

「死んだ筈なのに」
「まさか」
「そうだ、あの黒衣の青年にだ」
「甦らせてもらったわ」
彼の力によってだ。そうなったというのだ。
「仮面ライダーはスサノオとの戦いが続く限り何度でも蘇り戦う」
「それが宿命だと言われてね」
「そうですか。だからこそ」
「生き返って来られたんですね」
「そういうことになる。だからだ」
「私達も一緒に行くわ」
こう言ってだった。二人もだ。

## 第五話　忠の世界その六

響鬼達に合流してだ。あちらの世界に赴くというのだ。
彼等は今から門に向かおうとする。しかしここでまた、だった。
今度は威吹鬼の携帯に電話がかかあってきた。それでだ。
出るとだ。電話をかけてきた主は。
「あれっ。香須美さん」
『戦いは終わりましたか？』
「終わることには終わりました。ですが」
『ですが？何かあったんですか？』
「あの女に去られました」
そのだ。義仙にというのだ。
「あの女の世界に」
『そうなんですか。残念ですね』
「いえ、残念ではないです」
すぐにだ。威吹鬼は香須美に言った。
「門を見つけました」
『えっ、門を！？』
「はい、今からそちらに向かいますので」
『あの。門って何処ですか？』
うわずった声でだ。香須美は威吹鬼に問い返した。
『そこは』
「橋の上です」
彼等が戦っているそこだとだ。威吹鬼は話す。
「そこにあります」
『ああ、あそこですね』
それだけでだ。香須美もわかった。そうしてだ。
『わかりました。それでは』
「それじゃあですね」

『今からそちらに向かいます』
その判断は早かった。
『これから。妹と一緒に』
「わかりました。では待っています」
こうしてだった、立花姉妹も来ることになってだ。
一行は橋の上に出た。そこにある門は。
如何にも和風の門だった。黒い瓦にだ。木の扉の重厚な門だ。
その門を見てだ。轟鬼が言う。
「何かお城の門みたいですね」
「そうだな」
斬鬼もその通りだとだ。弟子の言葉に頷く。
「あの女が行き来するのに使うのに相応しいか」
「それでなんですけれど」
ここでだ。明日夢はだ。
その門を見ながらだ。それで言うことは。
「この門の向こうはどんな世界なんでしょうか」
「それが問題だな。おそらくは」
その門を見ながらだ。桐矢も言う。
「この門は日本風だから向こうの世界も」
「和風でしょうか」
あきらも言う。
「やっぱり」
「だとすれば俺達に相応しいな」
響鬼はこう考えて述べた。
「じゃあ今から皆で行くか」
「そうですね。香須美さん達が来られたら」
また言う明日夢だった。そうしてだ。
そんな話をしているうちにだ。一台の車が来てだ。
そのだ。立花姉妹が来てだった。そのうえでだ。
響鬼達にだ。こう言ってきた。

「それならですね」
「私達も一緒に行かせて下さい」
「よし、助っ人も来てくれたしな」
響鬼もだ。車から出て来て言う姉妹を見てだ。その気さくな笑みでだ。
一行にだ。こう言ってだった。
門の前に向かう。彼がそうした。
その彼にだ。明日夢は心配する顔で言った。
「あの響鬼さん」
「何だ、明日夢」
「気をつけて下さいね」
それはだというのだ。
「何があるかわからないですから」
「ははは、明日夢は心配性だな」
心から気遣う彼にだ。響鬼は笑ってだ。
そうしてだ。門の前まで来てだ。
右手をだ。その取っ手に置いてだ。ゆっくりと引いた。

## 第五話　忠の世界その七

するとだ。その門からだ。
白い光が出て来た。それが開かれた門の入り口から放たれる。それを見てだ。
一行はだ。口々に言うのだった。
「五代さん達から聞いたのと同じだな」
「そうですね、これは」
「じゃあこの光を潜り抜けたら」
「そこは」
「さて、どんな世界か」
笑いながらだ。響鬼が先頭に立ちだ。
光の中に入る。それに続いてだ。
明日夢達も続く。そうして中に入るとだ。
そこからだ。出て来た場所は。
その頃だ。黒く絹の様な極端に長い髪の凛とした顔の少女がだ。小柄でこれまた黒く長い髪の少女とだ。何故か不機嫌な顔で言い合っていた。
見れば凛とした少女の顔には気品がありだ。着物を思わせる丈の長い、紫に豪華な柄の上着に黒いこちらは短い服にだ。極端に短い白のスカートである。そして足は黒いハイソックスの様なものを穿いている。
目は紫で顔立ちは整いだ。気品がある。そして。
それに対する小柄な少女は白いスクール水着に赤と黒の柄の上着、頭には扇の如き紅い帽子がある。六文銭が服のあちこちに飾られている。紅い目の顔はまだ幼いが気丈そうであり麗しい。その二人がだ。
それぞれ薙刀、そして金の六文銭が入った黒い巨大な扇を手にしてだ。対峙しているのだ。その中でだ。

小柄な少女がだ。相手に対して言った。
「よいか千姫」
「何かしら、幸村」
道場の中でだ。二人は言い合っている。
「わらわはまさに肥後のラーメンこそが最高だと言っておるな」
「ええ、確かにね」
「あの濃さ、豚の骨からダシを取ったのがじゃ」
「いいというのね」
「播磨なぞ何じゃ」
ムキになった調子でだ。その千姫に言う。
「大体御主は江戸生まれであろう。何故播磨なのじゃ」
「そういう貴女は確か信州だったわね」
「そうじゃ、真田は信濃じゃ」
まさにそこだというのだ。
「信濃はよいぞ。梨に林檎にそばじゃ」
「それを言うなら播磨もよ」
何故かだ。播磨にこだわる千姫だった。
そしてだ。目の前の少女真田幸村に言うことは。
「明石焼きにカチワリに筋肉のカレーに。中華街だってあるから」
「御主実に詳しいのう」
「それに野球は虎よ」
何故かだ。千姫は野球の話までしだした。
「虎ことが最強よ」
「ふん、鷹に二回も負けておるではないか」
幸村は虎と聞いてだ。眉を顰めさせてだ。
そしてだ。こう返したのだった。
「御堂筋決戦の時もこの前の星野の時も」
「あ、あれは」
それを言われるとだ。千姫は。
弱みを衝かれた顔になってだ。こう返した。

「スタンカなんて凄いのがいたし。星野様がたまたま運がなくて」
「そもそも星野はシリーズに勝っておるのか？」
「悲運の人なのよ。仕方ないでしょ」
「どうだか。鷹なんぞ毎年優勝してもクライマックスでは負けておるぞ」
「それ威張れるの？」
「上総だか下総の鴎のせいじゃ」
幸村の答弁は苦しい。それもかなり。
「蝦夷の熊も鬱陶しいがのう」
「敵だらけじゃない、鷹は」
「そういう虎は何じゃ。ここぞという時にいつも巨人に負けおって」
「・・・・・言ってはならないことを言ったわね」
ここでだ。それまで極端に怒っていなかった千姫がだ。
全身に怒りのオーラを身にまといだ。幸村に言ってきた。
その手の薙刀を構え。そしてだった。
「この小娘！今日こそは！」
「うむ、やるか！」
「巨人許すまじ！」
彼女が怒るのはここだった。
「何があろうとも成敗してあげるわ！」
「望むところよ。わらわも大きな奴は好かぬが！」
何気に自分のことも入れる幸村だった。
「売られた勝負は受けて立つ！」
「なら今日こそは！」
「決着をつけようぞ！」
こうしてだ。二人が決闘に入ろうとしている時にだ。
道場の扉が開いてそこからだ。

## 第五話　忠の世界その八

ぞろぞろとだ。彼等が入って来たのだった。
「あれっ、ここは」
「道場！？」
「そうですね。武道の鍛錬を積む道場ですね」
「これがこっちの世界かな」
「道場だけ見たら全然変わらないけれど」
そんなことを言いながらだ。彼等は。
道場の中を見回す。すると。
そこでだ。千姫と幸村に気付いた。それでだ。
威吹鬼がだ。彼女達に尋ねた。
「あの、ここは何処かな」
「何じゃ、御主達は」
「一体誰なの！？」
幸村も半蔵もだ。彼等の姿を認めてだ。
言い争いを止めてすぐにだ。彼等に問うた。
「見たところ異国の者の様じゃが」
「けれど顔は日本人ね」
「はい、日本人です」
明日夢が二人に答える。
「それでなんですけれど」
「待て、よく見ればじゃ」
「はい？」
「御主達土足ではないか」
「そういえば」
ここでだ。千姫もそのことに気付いた。見ればだ。
一行は全員土足である。それで道場にあがっていた。
それに気付いてだ。幸村は。

怒りを急激にみなぎらせてだ。彼等を一喝した。
「道場に土足であがるとはどういう了見じゃ！」
「それは許せないわね」
千姫もだ。このことについては幸村と同じだった。それでだ。
その手にしている薙刀を手にしてだ。彼等に問う。
「すぐに過ちを認めて謝罪しなさい。さもなければ」
「容赦はせぬ！」
幸村も扇を構える。完全に本気である。
しかしだ。ここはだ。
響鬼がだ。すぐにだった。
自分の後ろの一行に顔を向けてだ。こう言ったのだった。
「まずは靴を脱ごう」
「そうですね。幾ら急に出て来たとはいえ道場ですから」
「土足はいけませんよね」
威吹鬼と轟鬼が応える。
「それじゃあまずは靴を脱いで」
「玄関に置きましょう」
「むっ、思ったより素直な者達だな」
彼等のそうしたやり取りを見てだ。幸村はその目を少し動かした。
それでだ。こうも言うのだった。
「ふむ。下駄箱はそちらじゃ」
「ここか」
斬鬼が道場の入り口のその下駄箱を見た。木製で上に何段も重なっている古風な下駄箱がそこにあった。それを見てだ。
一行は納得してだ。そこにそれぞれ靴を脱いだ。
それからだ。朱鬼が幸村と千姫に尋ねた。
「あと。掃除をしておきたいけれど」
「ほう、ちゃんとしてくれるか」
「それもなのね」
「汚したからね」

それはしておかなければなｒなあいというのだ。
「だからね」
「よい心掛けじゃ。雑巾と箒を持って来よう」
こうしてだった。掃除もしてからだ。あらためてだ。
響鬼一行はだ。幸村達にだ。道場においてだ。
向かい合いだ。そのうえでだ。
頭を下げた。それから話すのだった。
「いきなり出て来てそれで道場を汚してしまってな」
「ふむ、まことにいきなりよの」
幸村が響鬼の言葉に応える。
「それで道場の土足のことじゃが」
「まことに申し訳ない」
「よい。過ちを認めたからにはのう」
それでいいというのだ。それはだ。
千姫も同じでだ。こう言うのだった。
「まあいいわ。掃除もしたし」
「そうか。許してくれるのか」
「だから過ちを認める者には何も言わぬ」
またこう言う幸村だった。そのうえでだ。

## 第五話　忠の世界その九

あらためてだ。こう響鬼達に尋ねた。
「御主達は一体何者じゃ」
「言葉は日本語ね」
「だから日本人なんだ」
またこう話す響鬼だった。
「ただ。世界は違うがな」
「違う世界から！？」
響鬼のその話を聞いてだ。千姫は。
すぐに怪訝な顔になってだ。こう言った。
「そんな。馬鹿な話が」
「待て、それは有り得る」
しかしだ。幸村はだ。
考える顔になりだ。こう言ってだ。
そのうえでだ。また響鬼達に尋ねた。
「様々な世界が並行して存在していることは聞いておる」
「そうなんです。それでですね」
今度は明日夢が話す。
「僕達ここに柳生義仙という人と戦ってそれで来たんですけれど」
「！？柳生じゃと」
「柳生義仙」
その名を聞いてだ。幸村も千姫も。
表情を一転させ強張らせてだ。一行に言うのだった。
「あの者は死んだ筈だぞ」
「しかも貴方達の世界に出て来たですって！？」
「はい、そうです」
「その通りです」
あきらもそうだと答える。

「それで僕達は門を通って」
「この世界に来たんですけれど」
「十兵衛と刺し違えたのではなかったのか」
「それがどうして」
二人はだ。響鬼達の話を聞いてだ。
その表情を曇らせてだ。そうして言うのだった。
「御主等の世界に出て来たのじゃ」
「そして門とは一体」
「あの、それでなのですけれど」
「いいですか？」
立花姉妹が幸村と千姫に話してきた。
「私達もこちらの世界のことは全く知らないので」
「よかったらどういった世界か教えてくれますか？」
「そうじゃな。わらわ達ももっと聞きたいことがあるしのう」
「そちらの世界のことを」
「服だけを見れば私達の世界と全く違いますね」
「それもかなり」
立花姉妹は自分達の前で正座する二人の姿を見て言う。どう見てもだ。
姉妹の服とは全く違う。それを見てだ。
姉妹はだ。こう言うのだった。
「水着にミニスカートですか」
「それもかなり派手な」
「おかしいか？」
「これが私達の普段着よ」
「あの、それがかなり」
「驚いてまして」
二人が言うとだ。桐矢もだ。
少し戸惑いながらだ。二人に言った。
「とにかく。どういった世界なのかをな」

「わかった。それではじゃ」
「皆も呼んでお話してあげるわ」
「あれっ、二人だけじゃないんですか」
「そうじゃ。この屋敷にはわらわ達の他に何人か住んでおる」
「ここは幕府の武道指南役の屋敷なのよ」
「武道指南役というと」
あきらはそう言われて驚きながら述べた。
「それに幕府というと」
「うむ、徳川幕府じゃ」
「私の家でもあるわ」
千姫は自分の家の話もここでした。
「徳川将軍家よ」
「徳川幕府がまだ続いてるんですか」
そのことを知ってだ。あきらだけでなく響鬼達全員が驚きを隠せなかった。
「私達の世界と全く違いますね」
「ではお互いの世界の話をしようぞ」
こうしてだった。お互いに道場に集った。響鬼達は既に集っているが。

## 第五話　忠の世界その十

大柄で丈の長い黒服とズボンに身を包んだあどけなさが微かに残る柔らかい笑顔の灰色の髪の少年だった。
「柳生宗朗です」
「服部半蔵です」
青い目に紫の長い髪のメイドである。ただカチューシャの後ろは紅い巻物をかんざしにしている。眼鏡をかけた楚々とした顔の少女だ。
「後藤又兵衛です」
白い褌である。上は短いセーラー服をビキニの様にしている。
青がかった灰色の髪を小柄をかんざしにして止めている。凛とした中にも何処か優しい雰囲気をした顔の瞳は少し垂れていて黒い。背が高い。
「直江兼続ですわ」
黒いベストとミニスカート、ハイソックスに白いブラウスと紅いネクタイ。栗色の瞳を持つ顔はまだ幼い。紫の髪をツインテールにして長く伸ばしている。頭には愛の字が書かれた髪留めがある。
この面々がだ。響鬼達と向かい合ってだ。
正座をして一礼をする。響鬼達もそれに応える。それからだった。
彼等はだ。お互いにだった。自分達の世界の話をした。
それが終わってからだ。宗朗が言った。
「にわかには信じられないのはお互いですね」
「そうだよな。こっちもな」
響鬼もだ。腕を組んだ言う。
「そっちの世界とこっちの世界がな」
「その門でつながっていてですね」
「しかもその義仙って女はそちらの世界でも暴れてたんだってな」
「はい、そうです」

その通りだとだ。義仙も話す。
「あの時は大変でした」
「しかし十兵衛がじゃ」
幸村はこのことを残念な顔で述べた。
「失ってからじゃからな」
「あの小娘がいなくなって清々しますわ」
「・・・・・・・・・」
兼続がそんなことを言うとだった。千姫がだ。
無言で何時の間にか彼女の手元にあった鈴付きの紐を引っ張ると。
それで。
兼続の頭の上に盥が落ちた。それから言うのだった。
「憎まれ口は黙っておきなさい」
「あいたたたたた・・・・・・。酷いですわ」
「自業自得じゃ」
幸村も兼続には厳しい。
「とにかくじゃ。あの女が生きておってじゃ」
「スサノオ、ですね」
半蔵が言うのはその存在についてであった。
「貴方達の世界で絶えず仕掛けてきている神ですね」
「かなりおかしな神ではあるな」
斬鬼はスサノオをそう考えていたし実際にそうだと話した。
「仮面ライダーに常に仕掛けてきているんだからな」
「圧倒的な力があるというのにそれに徹している」
叉兵衛も怪訝な顔で述べる。
「確かに妙な神ですね」
「楽しんでおるのじゃな」
幸村は話を聞いてすぐに察した。
そしてだ。こう言うのだった。
「仮面ライダー、ここでは人間じゃな」
「そうなんだよな、人間に仕掛けてそれで」

轟鬼もここで話す。
「人間を見ているんだよ」
「ふむ。そういえばじゃ」
幸村は彼等の話を聞いてまた察して言った。
「こちらの世界でもそうじゃな」
「確かに。柳生義仙の時といい」
「では天草という者の背後には」
千姫もだ。考えが至った。
「そのスサノオがいるのかしら」
「そう思っていいと思います」
威吹鬼がこう千姫に返す。
「こちらの世界にもいるのは間違いないですから」
「あの女を操っているのは天草じゃ」
幸村はまた話す。
「そしてその天草の背後におるか若しくは天草はスサノオの化身の一つか」
「だとしたら厄介だね」
今度は宗朗が腕を組み考える顔で述べた。
「今度の戦いは」
「おそらくわらわ達だけでは歯が立たぬ」
幸村はここでもすぐに分析し終えて述べた。

## 第五話　忠の世界その十一

「申し訳ないが御主達にもじゃ」
「私達ね」
朱鬼が幸村のその言葉に応える。
「仮面ライダーにも」
「頼めるだろうか」
「勿論だよ」
微笑んでだ。響鬼が幸村のその申し出に応えた。
「だから来たんだ」
「そうですね。おそらく僕達も」
今度は宗朗が応える。
「貴方達と一緒ならそうしていたと思います」
「そういうことだな。それじゃあな」
「はい、一緒にですね」
「戦おうか」
「おそらくこの世界だけでは済みませんね」
半蔵が考える顔で述べる。
「スサノオとの戦いは」
「猫の吸血鬼の世界では戦いにはならなかったにしても」
叉兵衛はにゃんぱいあの世界のことから述べる。
「それでも。あらゆる世界に干渉してきているとなると」
「うむ、間違いなく多くの世界を股にかけた戦になる」
幸村の洞察はここでも発揮される。
「これは長く激しい戦になるぞ」
「そうだね。それでは響鬼さん」
宗朗は幸村の言葉に応えたうえでだ。それからだ。
響鬼に顔を向けて。こう言うのだった。
「スサノオとの戦いが一応の終結を見るまでは」

「一緒に戦ってくれるか」
「そうさせて下さい」
これでだ。仮面ライダーとサムライ達の共闘が決まったのだった。
それが決まってからだ。
ここでだ。兼続が言った。
「お話は決まりましたけれどお腹が空きましたわ」
「その辺りの雑草でも食っておけ」
幸村は相変わらず彼女には厳しい。
「少しは頭のよくなる草でも食え」
「何ですの、その言い方は」
「御主が馬鹿だから言うのじゃ」
まことに容赦がない。
「それか葱でもたらふく食え」
「うう、何と口の減らない」
「まあとにかくな」
響鬼がそんな二人の間に入る形でだ。笑って言った。
「腹が減っては戦ができぬってな」
「そうですね。では幸い今料理ができましたので」
宗朗が微笑みながら話す。
「では一緒に」
「あっ、御馳走してくれるのか？」
「鮎の塩焼きに若布の味噌汁にです」
宗朗はその献立を話していく。
「ほうれん草のおひたしに蛸と胡瓜の酢のもの、もやしとニラを茹でたものです」
「あと御飯だな」
「はい、白米です」
これは外せなかった。和食なら。
「勿論納豆もありますので」
「凄いな、やっぱり日本だな」

ここまで聞いてだ。響鬼は満面の笑顔になる。
「それで食後は」
「団子があります」
「見事、流石侍だ」
「では皆さんご一緒に」
「何か悪いですね」
あきらは遠慮の言葉を述べた。
「そこまでしてもらって」
「いや、よい」
「いいのですか？」
「わらわ達はもう仲間になったのじゃ」
幸村が言うのはこのことだった。

## 第五話　忠の世界その十二

「その中で遠慮はいらん」
「そうなのですか」
「わらわ達も御主達の世界に行くことがある」
幸村はこうも話した。
「そしてその時にはじゃ」
「そうだな。俺達が御馳走することになるな」
「そうした意味でお互い様じゃ」
幸村は響鬼にもこう述べた。
「だからいいのじゃ」
「そうだな。それじゃあな」
また響鬼が言う。
「御互いに美味い飯を食うか」
「腹が減っては戦ができぬ」
幸村が満足した面持ちで応える。
「そして胸も大きくはならぬ」
「それは無理ね」
千姫は幸村の今の言葉にはこう突っ込みを入れた。
「間違ってもね」
「言うのう、御主は」
「だって貴女の場合は中もそうだから」
「中を言えば御主もそうであろうが」
「うっ、それは」
まさに薮蛇だった。千姫にとっては。
それでだ。しまった、という顔でだった。
「それを言うと」
「中身を言うときりがないんじゃないのか？」
桐矢もそのことは何故か無視できなかった。

それでだ。あきらを見て話すのだった。
「そうだよな、やっぱり」
「あれっ、桐矢君はそうしたことは」
「俺の場合はあれなんだよ。もやしがどうとかな」
「原作と比べて大き過ぎる、ですね」
「俺の背が高いのはあれだよ。仕方ないからな」
「そうですよね。ただ見たところ」
あきらは先程打ちのめされて今も目をくらくらと回して倒れている兼続を見て言った。
「直江さんは中は背が高い様に思えます」
「あと後藤さんかな」
明日夢は叉兵衛を見て言う。
「後藤さん御自身も大きいですけれど」
「あと絵はどうでしょうか」
何故かだ。あきらはこんなことも話した。
「後藤さんの絵は」
「はい、絵は得意ですが」
叉兵衛はあきらの問いにだ。納豆を椀の中に入れて掻き混ぜながら話す。
「それが何か」
「いえ、全然違いますから」
「そうよ。間違ってはいけないから」
ここでだ。半蔵と千姫が必死の顔で叉兵衛の言葉を訂正してきた。
「叉兵衛さんに絵だけはです」
「いけないわよ。その話は」
「何か大変なことがあるみたいですね」
明日夢は二人の話からそのことを察した。そうしてだ。
いぶかしみながらだ。こんな言葉を出した。
「つまり。画伯でしょうか」
「画伯？」

「はい、何か独特な絵を描かれる人はそう言われるそうですし」
「とりあえず色々とあるからな」
響鬼はまた話した。
「とりあえずは今は親睦を深めていくか」
「はい、そうですね」
宗朗がだ。響鬼の言葉に頷いてだった。そんな話をしてだった。
彼等はその鮎や漬物、味噌汁を食べていく。そして団子に抹茶まで楽しんだ。それが終わってからだ。
立花姉妹がだ。宗朗達に尋ねた。
「この団子はどちらで？」
「どちらで買われたものですか？」
「私の実家から取り寄せたものよ」
千姫が答える。
「そこからよ」
「というと徳川将軍家から」
「わざわざですか」
「ええ。だから美味しいわね」
幾分自慢げにだ。千姫は笑って話す。
「お団子もお抹茶も」
「確かに。お茶もいいですね」
「最高です」
そうした話をしてからだった。ふとだ。
宗朗がだ。その千姫に話した。

## 第五話　忠の世界その十三

「このことですが」
「お兄様にも？」
「お話した方がいいのでは」
「いいの？それは」
「僕とあの人のことを言っていますから」
「お兄様はあれだけ宗朗とあったから」
「それでも。今回は事情が事情です」
それでだとだ。宗朗は言うのである。
「あの方にもお話しておかなければ」
「だからお兄様は」
「ああ、それは気にせずともよい」
しかしだ。ここでだ。幸村が言ってきた。
「慶彦のことはじゃ」
「お兄様を呼び捨てにするとは」
「わらわはそもそも真田じゃ。真田は徳川の敵ぞ」
「いいえ、そういう訳にはいかないわ」
「ふん、何を言われても徳川にはつかぬわ」
「まあそれはいいとしてね」
二人の間には今回は威吹鬼が入ってだ。
それでだ。二人にこう尋ねたのだった。
「その慶彦さんって人は千姫さんのお兄さんだよね」
「ええ、そうよ」
その通りだとだ。千姫も答える。
「学園の生徒会長でもあるわ」
「生徒会長でもあり」
「あら、わかったのね」
「うん、千姫さんが徳川家のお姫様だから」

そこからわかったとだ。千姫に対して答える威吹鬼だった。
「だからね」
「そうよ。お兄様は次期将軍なのよ」
「その人にもお話をするんだ」
「はい、そう考えています」
宗朗は威吹鬼達にも話す。
「それはどうでしょうか」
「いいんじゃないのか？」
最初に答えたのは斬鬼だった。
「それは」
「いいですか」
「その慶彦って人がどういう人かは知らないが」
それでもだとだ。斬鬼は言う。
「それでもな」
「それでもですね」
「話してみる価値はある」
こう話すのである。
「少なくともな」
「それにじゃ。慶彦はじゃ」
幸村は何を言われても呼び捨てを止めない。そこには彼女の意志もあるからだ。
「御主を嫌ってはおらぬ」
「僕を？」
「そうじゃ。御主自体は嫌ってはおらぬ」
そうだとだ。宗朗に話すのである。
「それに今回は事情が事情じゃ」
「うん、徳川やそれどころじゃないね」
「日本どころか世界全体の話じゃ」
「それも多くの世界の」
「だとすれば道は一つ」

幸村はまた言い切った。
「力を一つにすることじゃ」
「では早速慶彦様のところに」
「行こうぞ。よいな」
「うん、皆でね」
「僕達もですね」
明日夢がその宗朗の言葉に問うた。
「やっぱり」
「うん、君達からも慶彦様にお話して欲しいんだ」
「僕達の世界のことを」
「頼めるかな」
彼等を見てだ。宗明は問うた。
「それも含めてね」
「どうしますか、響鬼さん」
「俺の考えはもう決まってるからな」
響鬼の返答は気さくなものだった。
「行くか、次の将軍様のところに」
「わかりました。それでは」
宗朗は響鬼のその返事に笑顔で返す。こうしてだった。
彼等は徳川慶彦のところに向かう。そのうえで仮面ライダーの世界、そしてこの世界との関わりのことも話すことにしたのだった。

第五話　完

２０１１・９・７

# 第六話　信の誓いその一

第六話　信の誓い

響鬼達は宗朗達と共に徳川慶彦の下に向かう。彼の居場所はというと。

「学校なんですね」

「うん、そうなんだ」

宗朗は先頭をいっている。その中でだ。自分の後ろにいる明日夢に話した。

「僕達も学生だからね」

「そうですか。実は」

「明日夢君もだね」

「はい、そうです」

「僕も一応師範代だけれど学生でもあるから」

それでだというのだ。

「学園生活も楽しんでるよ」

「実は私と同じクラスです」

半蔵がここで衝撃の事実を語る。

「姫様も一緒ですよ」

「あまりいたくないクラスだな」

桐矢は千姫を見てすぐに言った。

「どうもな。何かと騒動を起こしそうだ」

「失礼な、私はそんな」

「自覚しておらぬところが厄介なのじゃ」

幸村は桐矢についた。それでだった。こう言ったのだった。

「全く。高飛車で金遣いは荒く」

「服部さんはそのクラスで何をしているんだ？」

「学級委員です」

半蔵はそうだと話す。

「それとこの武應学園塾の風紀委員長も務めています」
「風紀委員長としてもな」
桐矢は半蔵の話を聞いてまた述べる。
「今一つ頼りないか」
「うっ、何故そんなことを言うのですか？」
「思っただけだったがまさか」
「確かに私は幸村殿や千姫様程強くはないです」
彼女の話を聞いて響鬼達はその二人が侍としてはかなりの戦闘力を持っていることを悟った。それは気配からもかなりわかることだった。
そうした話をしてだ。さらにだった。
半蔵はだ。響鬼達にいささか必死の顔で話した。
「ですがそれでも」
「半蔵の悪口は許さないわよ」
千姫はこれまで以上に強い声で桐矢に話した。顔だけでなく身体も桐矢に向けてだ。そのうえで咎める顔になり顔を突き出して話すのだった。
「私への悪口も許さないけれど」
「半蔵が貴女の家臣だからか？」
「家臣でもあり友達よ」
そうしただ。かけがえのない存在だというのだ。
「その半蔵の悪口を言うことは絶対に許さないわ」
「姫様、そんな」
「この人達はいい人達が多いみたいだけれど」
それでもだとだ。千姫は桐矢を見て話す。生徒会長室に向かって歩きながらそのうえでだ。千姫は後ろ向きになって歩きながら桐矢に話してきている。
「この桐矢だけは違うみたいだから」
「まあそんなことは言わないでくれよ」
響鬼が微笑んで両者の間に入って述べた。

「京介も付き合ってみればそんなに悪い奴じゃないからな」
「そうかしら」
「人間っていうのはあれだよ。少し付き合っただけじゃわからないものだからな」
「少しではなのね」
「場合によっては何年も付き合っても中々わからなかったりするんだ」
そうだともだ。響鬼は微笑んで話す。
「そういうものだからな」
「随分と人生経験があるのね」
千姫もそのことはわかった。響鬼について。
「やっぱり多くの戦いを経てきてなのかしら」
「戦いもそうだし後は」
「後は？」
「多くの人とも出会ってきたからな」
「出会いもなの」
「出会いもあれば別れもあった」
それもあったとだ。響鬼は今度は少し寂しげな顔になって述べた。
「そういうのを経てきてなんだ」
「響鬼さん、貴方はどうやら」
「どうやら？」
「最初に御会いした時はわからなかったけれど」
響鬼の話をだ。そのまま言った形になった。
「喜びも悲しみも経てきたのね」
「そうなるかな。生きてきたからな」
「鬼として」
「そう、生きてきたからこそ」
そうだとだ。響鬼に話すのだった。

## 第六話　信の誓いその二

「そうして今の響鬼さんになられたのね」
「ははは、人間生きていればそれなりになっていくさ」
「正しい道を歩めば」
「正しいことかどうかわからないけれど」
「けれど？」
「鍛えてますから」
心もという意味だった。響鬼は悲しみはあえて見せずにだ。それでだった。
笑顔でだ。こう言ったのだった。千姫もそれを聞いてだ。
響鬼の心に深い、人間としての成熟を感じたのだった。
そしてそのままだ。千姫は響鬼の話を聞く。彼は生徒会長室への道中でさらに話すのだった。
「俺は実は機械が苦手なんだ」
「機械は」
「うん、だからバイクも免許は持っていたけれどね」
苦笑いになってだ。そのことを話すのだった。
「それでも。中々運転しなかったしな」
「あれっ、仮面ライダーなのにですの？」
兼続はかなり素朴に尋ねた。そのことに。
「オートバイに乗らないっていうのは」
「仮面ライダーとしては失格かな」
「仮面はともかくとして」
響鬼を見ながらだ。彼女は言う。
「オートバイに乗らない仮面ライダーはないと思いますけれど」
「実はそれでだ」
「何かと言われたりしたわ」
斬鬼と朱鬼はこんなことを兼続に話した。

「それでは音撃戦士でしかないとな」
「鬼と」
「というか鬼ではなくて？」
さらに言う兼続だった。
「それですと」
「まあな。否定できないな」
「仮面ライダーになってはいるけれど」
「一つ言わせて頂きますと」
あきらがここで話す。
「鬼は鬼ですか」
「それでもですね」
「はい、私達は人として戦う鬼です」
そうだとだ。叉兵衛に話すのだった。
「そうした鬼ですから」
「鬼といっても色々なのですね」
「あれだな。人は時として鬼になる」
響鬼、その鬼の言葉だ。
「そういうことだな」
「成程のう。人の心を持って鬼となり戦いその魔化魅を倒すのじゃな」
「簡単に言えば妖怪退治さ」
「スサノオが出すそれを」
「その為に鍛えてもいるからな」
ここでも鍛えていることを話す響鬼だった。
「そうして鬼になったんだ」
「思えば凄い話じゃ」
そのだ。生身の人間が鬼になれることについてだ。幸村は唸る様にして述べた。
「修業はするものじゃな」
「まあ鬼になるにはコツもあってな」

「修業だけではなれぬか」
「身体を鍛えてそこからなんだ」
鬼になる、そのことはというのだ。
「色々とあってな」
「ふむ。中々興味深い話じゃ」
そんな話をしているうちにだった。一行は。
遂にその生徒会室の前に来た。すると。
その前にだ。思わぬ者がいた。
「待っていたにゃ」
「何ですの、この猫は」
兼続はにゃんぱいあを見てだ。すぐに首を傾げさせて言った。見事な扉の前にだ。にゃんぱいあが二本足で立っていたのである。
その彼を見てだ。兼続は言うのだった。
「黒猫とは不吉ですわ」
「それは九州の方のことでは？」
半蔵がその兼続に突っ込みを入れる。
「別にこの江戸では」
「ですが実際に」
「米沢では違う筈じゃが？」
幸村はここでも兼続に突っ込みを入れた。
「それはあくまで化け猫のみじゃ。普通の黒猫は違うぞ」
「けれどこの黒猫は」
兼続はにゃんぱいあを見ながらさらに言う。

## 第六話　信の誓いその三

「牙がありますし」
「猫なら絶対にあるものだろうに」
「それに蝙蝠の翼まで」
「むっ、確かに」
ここでだ。幸村はようやくにゃんぱいあをまともに見た。すると確かにだ。
その背には蝙蝠の翼がある。それを見て幸村も言った。
「御主、何者じゃ」
「僕はにゃんぱいあにゃ」
「にゃんぱいあじゃと」
「そうにゃ。猫の吸血鬼にゃ」
「むう、猫の吸血鬼までおるのか」
「暇だったからこっちの世界に遊びに来たにゃ」
そうだとだ。幸村に話すのである。
「それでここには僕そっくりの気配を感じたので来たにゃ」
「にゃんぱいあちゃんにそっくりの気配？」
「そうにゃ。もう一人の僕みたいな気配にゃ」
それを聞いてだ。明日夢がだ。今度は彼が腕を組み首を捻りだ。そのうえで言うのだった。
「何なのかな、それって」
「この扉の向こうから感じるにゃ」
「まさか会長さんが猫なんて筈がないし」
「それは絶対にないから」
千姫がこのことは保証した。確かに。
「それなら私も猫になるじゃない」
「そうですよね。ですから」
「ああ。慶彦様は確かに人間ですから」

宗朗が明日夢達にこのことを確かだと話す。
「僕達は何度も御会いしていますし」
「そうですよね。それじゃあ」
「この猫。にゃんぱいあだったかな」
「そうじゃ」
その通りだとだ。にゃんぱいあは笑って応える。
「それが僕の名前だにゃ」
「吸血鬼の猫というのは驚いたけれど」
「そんなに珍しいかにゃ？僕の世界では普通にゃ」
「いや、話は聞いてたよ」
それはだとだ。宗朗もにゃんぱいあに対して話す。
「響鬼さん達からね」
「それでも見たら驚いたにゃ？」
「うん、いや、本当にいるんだなって」
「そういうことにゃ。それでにゃ」
「それで？」
「だからこの扉の向こうにいるにゃ」
その自分の後ろの扉を指し示してだ。にゃんぱいあは宗朗に話す。
「僕と同じ気配の人がいるにゃ」
「慶彦様が猫を飼っておられるのかな」
「お兄様にそうした趣味があるとは」
妹の千姫もだ。このことにはだ。
首を捻っている。どうやら本当に知らないらしい。
しかし何はともあれだった。彼等は。
扉をノックした。するとだ。女の声で返事が入って来た。
「誰だ」
「柳生宗朗です」
扉をノックした宗朗自身が返事を返す。
「慶彦様はおられるでしょうか」
「おられる。それで何の様だ」

「お客様をお連れしました」
「客だと」
「そしてお話したいことがありまして」
それでだというのだ。
「中に入りたいのですが」
「少し待て」
女の声がこう応えてからだ。暫し沈黙となった。その中でだ。
にゃんぱいあがだ。一同に言うのだった。
「あの声にゃ」
「あの声がか」
「そうにゃ。僕と同じ気配がするにゃ」
「あの声の主は」
叉兵衛がここで話す。
「シャルル＝ド＝ダルタニャンですが」
「だるたにゃん？」
「そうです。仏蘭西から騎士ですが」
「その人から感じるにゃ」
また言うにゃんぱいあだった。

## 第六話　信の誓いその四

「僕と同じ気配をにゃ」
「成程な。事情はわかった」
ここでにゃんぱいあの言葉に頷いたのは斬鬼だった。桐矢も何処かそうなっている。
それでだ。その斬鬼が話す。
「俺も同じだからな。一人狼男がいるがな」
「そういえばそうにゃ斬鬼さんとあの人はそっくりにゃ」
にゃんぱいあも斬鬼のその言葉に頷く。
「そういうことにゃ」
「うむ、わかった」
「そうね」
まずはだ。幸村と千姫が頷けた。
「わらわも心当たりが多そうな話じゃしな」
「私もかなり」
「はい、それは私も」
「私もです」
「私もですわ」
そしてだ。それはだ。
叉兵衛に半蔵、兼続まで同じだった。そして宗朗もだ。
だが宗朗はだ。こう言うのだった。
「僕はちょっと」
「うむ、宗朗はのう」
「そうなんだよ。よく死ねって言われるから」
彼だけは困った顔になって話す。
「アニメだけでなく漫画やゲームの方も観て言って欲しいなあって」
「切実な願いじゃな」
「幸村もそういうのない？」

「わらわはそういった世界とは縁がないからのう」
だからだ。知らないというのだ。
「この中では御主だけではないのか？」
「相手が男ってのもあったし」
「だから柳生宗朗は破廉恥なのですわ」
兼続はそれも根拠だと言うのだ。
「まことにはしたない」
「そういう御主も他の世界では何じゃ」
幸村の突込みがまたしても兼続に炸裂する。
「妄想がどうとか。他にも乳がどうとかじゃ」
「うっ、それは」
「わらわなんぞ胸がある話は滅多にないぞ」
「というよりあったの？」
千姫は幸村に言う。
「そういう話は」
「残念じゃが記憶にない」
「そうよね。幸村といえばツインテールよね」
「まことに。中身のことを話すと思わぬ墓穴になってしまうのう」
こんな話をしてだ。ようやくだった。
一行は扉を開ける。するとまずはだった。
長い金髪に吊り上がり気味の赤紫の目のだ。ヨーロッパ系の少女がいた。ドレスと鎧を組み合わせた様な服を着ている。武装している感じだ。
背は高く胸も目立つ。頭には羽帽子がある。
その彼女を見てだ。にゃんぱいあが言うのだった。
「この人にゃ、間違いないにゃ」
「この猫は」
そしてだ。そのヨーロッパ系の少女もだ。
にゃんぱいあを見てだ。興味深そうに言ってきた。
「私に似ている。むしろ」

「そうにゃ。そっくりにゃ」
「確かに。見たこともない猫だというのに」
「こういう相手がいてくれると嬉しいにゃ」
実際にだ。とても嬉しそうなにゃんぱいあである。そうしてすぐに少女の足下に来てだ。その足下で少女に対して尋ねたのである。
「それで名前は何ていうにゃ？」
「ダルタニャン」
少女は自分から名乗った。
「シャルル＝ド＝ダルタニャン」
「それが貴女ですね」
轟鬼がダルタニャンに対して述べる。
「そうなんですか。貴女が」
「私は慶彦さまにお仕えする騎士だ」
ダルタニャンはこう轟鬼に返す。
「そしてこちらにおられるのが」
「まさか君達が来るとはね」
ここでだ。青年の声がした。

## 第六話　信の誓いその五

そしてだ。見事な席に彼が座っていた。
座っていてもわかる程の長身に銀色の波打つ見事な髪、水色の傲慢さ、そして冷徹さをたたえた目は切れ長になっている。
顔は白くアジア系であるが何処かヨーロッパ系を思わせる。細長く鼻は高く彫もある。そうしたアジア系とは少し離れた顔である。
服は黒だ。だが宗朗のそれとは微妙に違う。その青年がだ。
宗朗達を見てだ。言ったのだ。
「意外と言うべきかな」
「お兄様、実は」
「戦いに来たのではない」
彼は千姫に対して述べた。座ったままで。
「そうだね」
「はい、むしろです」
「君達だけでもない」
青年は今度は響鬼達を見た。そうしてだ。
彼等も見てだ。そして言うことは。
「見たことがないが君達は」
「まずは一つ申し上げたいことがあります」
宗朗がだ。彼に言う。
「いいでしょうか」
「何かな、一体」
「柳生義仙が甦りました」
「何っ！？」
それを聞いてだ。彼、徳川慶彦もだ。
宗朗の話を聞いてだ。眉をぴくりと動かした。
そのうえでだ。あらためて宗朗に対して尋ねたのだ。
「まさか。そんなことが」

「はい、そのことですが」
「彼等が知っている」
慶彦は響鬼達をまた見て言った。
「そういうことだね」
「はい、そうです」
「君達も彼女と闘ったんだね」
「俺達が何人かかろうともな」
ここで言ったのは響鬼だった。
「かなりの相手だったさ」
「ふむ」
慶彦は響鬼の話を聞いて頷く。
「そうか。では眼帯をしていたのかい？」
「ああ、知ってるさ」
「何処までも知っている様だね」
それを聞いてだ。慶彦は。
納得した顔でだ。こう言ったのだった。
「ではやはり君達は」
「俺達の話を聞いてくれるか」
「是非聞かせてもらいたいね」
これが慶彦の返答だった。
「君達が何者かも」
「ああ、それじゃあな」
こうしてだった。響鬼達は自分達のことを慶彦に話した。話を聞き終えてだ。
慶彦はだ。まずはこう言った。
「荒唐無稽と言うべきかな」
「信じられないか？」
「それは否定しないね」
実際にそうだとだ。慶彦は響鬼に返す。
「仮面ライダー。他の世界から来た」

「それが俺達ということなんだけれどな」
「そしてスサノオ」
慶彦はこの神のことも聞いていた。それで言うのだった。
「君達の世界、そしてあらゆる世界に介入してくる謎の神」
「人間を見る為にな」
「そのスサノオが柳生義仙、そして天草四郎の後ろにいる」
「どうだい、この話は」
あらためてだ。響鬼は慶彦に尋ねた。
「荒唐無稽にしても」
「信じられない筈の話だよ」
慶彦の言葉がここでこうなった。
「けれどね」
「けれどなんだな」
「そう。君達の言葉は嘘だとは全く思えない」
慶彦から聞いてもそうだった。
そしてだ。宗朗も千姫も見て。あらためて言ったことは。
「宗朗も千姫も嘘を吐くことは絶対にしないからね」
「ではわかってくれたんだな」
「君達の話は嘘ではない」
そのことは間違いないというのだ。

## 第六話　信の誓いその六

「間違いなくね」
「それならです」
ここでだ。宗朗がだ。
思い切ってだ。慶彦に対して言った。
「我々はこの仮面ライダーの人たちと協力して」
「そのスサノオを討つ」
「そうするべきです」
宗朗と千姫がそれぞれ言う。
「この世界だけでのことではありません」
「全ての世界がです」
「大きいな」
慶彦は二人の話を聞いてだ。こう言った。
「僕達の世界だけではないなんてね」
「勿論日本だけのことでもないです」
「より大きな」
「だから大き過ぎるんだ」
これが慶彦の最初の言葉だった。
「わかるかい？大き過ぎるんだよ」
「といいますと」
「あの、お兄様はどう考えておられるのでしょうか」
「僕は大きいものや大きいことは好きだ」
「大きいものが」
「ではお兄様は」
「この世界の危機は即ちこの国の危機」
当然だ。そうなることだというのだ。
「それなら次期将軍として放置はできない」
「だからですか」

「お兄様もまた」
「そう、ダルタニャンを貸そう」
そのダルタニャンを見て。そのうえでの言葉だ。
「思う存分戦うといい」
「有り難うございます。それでは」
「私達は」
「あとあくまで気が向けばだが」
こう前置きしてだ。また言う慶彦だった。
「僕も行こう」
「慶彦様もですか」
「そうして頂けるのですか」
「気が向けばだ」
あくまで口ではこう言うがだ。その目も口元も笑っている。
その笑みで言ってだ。そうしてだった。
慶彦も協力することが決まった。かくしてダルタニャンが彼等と行動を共にすることになった。そうしてであった。彼等は。
まずは生徒会長室を後にした。それからまずは道場に戻ることにした。
その途中にだ。威吹鬼がそのダルタニャンに問うた。
「あの」
「何だ」
「フランスの方ですね」
「如何にも」
その通りだとだ。ダルタニャンも答える。
「慶彦様がフランス御留学の折に出会いだ」
「その時にですか」
「そうだ。今に至る」
ダルタニャンはこう話す。
「かつてはこの者達とも刃を交えた」
「そうだったのですか」

それを聞いてだ。威吹鬼は頷く。それからだ。
彼は今度は幸村に尋ねた。彼等は今は混ざって共に校内の廊下を進んでいる。和風な独特の趣のある校舎だ。その中を進んでいるのだ。
「その時のお話がですね」
「そうじゃ。話したな」
「十兵衛さんが消えられた」
「うむ、残念なことじゃった」
幸村は実際に目を閉じこう言う。
「わらわ達はかけがえのない者を失った」
「全くです」
又兵衛が幸村のその言葉に頷く。

## 第六話　信の誓いその七

「あの戦いは我々が勝利を収めましたが」
「犠牲も大きかった」
「そうですね。まことに」
「あの戦でのことは忘れぬ」
ひいてはだ。十兵衛のこともだというのだ。
「しかしあの女は甦って来た」
「忌々しい話ですわ」
兼続もだ。このことは同意だった、何だかんだと言ってだ。
「あの義仙がまた出て来るなんて」
「問題は何時何処に出て来るかですね」
半蔵も言う。
「果たして」
「それは案外早いだろうな」
響鬼は時から話した。
「場所もここからあまり離れはしない」
「それはどうしてなんですか？」
宗朗がその響鬼に尋ねる。
「すぐにこの近くで会えるということを言えるのは」
「スサノオは人間を見る」
響鬼はこのことを指摘した。
「それなら。今戦っている俺達に仕掛けて来るからだよ」
「じゃあ本当にすぐなんですね」
それを聞いてだ。宗朗も言う。
「何時合ってもおかしくはない」
「そういうことだろうな。俺達が仕掛けるにしろ向こうから仕掛けてくるにしろ」
どちらにしてもだというのだ。

「来るな」
「そうなりますか」
「俺の予想が正しければ」
どうかとだ。響鬼はさらに話す。
「あの女はすぐにこちらに攻めて来る」
「そしてですね」
「天草も来るだろうな」
「最初から決戦ね」
千姫はそれを聞いて言った。
「それなら」
「戦いは早く終わらせるに限るさ」
こんなことも言う響鬼だった。
「しないに越したことはないしな」
「さっきから思っていたけれど」
千姫はそんな響鬼の話を聞いて言う。
「響鬼殿は」
「ああ、殿づけはいいさ」
「では響鬼さんは」
「それならいいさ。殿づけはどうも気恥ずかしいからな」
だからだというのだ。
「それでどうかしたのかい？」
「いえ、戦いは好まないのね」
「好きじゃないのは確かだな」
響鬼もこのことを否定しなかった。
「稽古や修業は好きだけれどな」
「つまり。響鬼さんの強さは」
それが何なのか。宗朗は察して言う。
「人を活かす強さですね」
「活人剣かな」
「はい、人を殺すものではなく」

「鬼は人と戦うんじゃなく人を害する魔化魅を倒すものだからな」
それがだ。鬼、即ち音撃戦士だというのだ。
「人を殺したりはしないさ。それに」
「それに？」
「魔化魅にしろ命はあるんだ」
そのだ。彼等にしてもだというのだ。
「自然の化身のあの連中にもな」
「確か魔化魅は」
それは何かというとだ。それは。
「妖怪ですね」
「そうだな。簡単に言えばな」
まさにそれだった。魔化魅は妖怪なのだ。山にいるだ。
「それと戦っているからな」
「妖怪にも。そうですね」
「日本ではそう考えているよな。昔から」
「はい」
宗朗も日本人だ。それならよくわかることだった。

## 第六話　信の誓いその八

「だからな。やっぱりな」
「命を奪っているのは事実」
「自然にも害を与えているんだよ」
そうだともいうのだ。鬼は。
「もっともな。あの連中を倒さないとな」
「人間もですね」
「ああ、実際によく食い殺されてるしな」
それはだ。響鬼もよく知っていた。
「その辺りが難しいんだよ」
「ふむ。人の命を護る為に他の命を消す」
幸村は腕を組んで言う。
「そういうことじゃな」
「ああ、そうなるな」
「戦うとはそういうことじゃな」
「誰でもっていうんだな」
「侍とて同じ」
ひいてはだ。彼女達もだった。
「そういうことじゃな」
「じゃあ何時来てもいいように」
宗朗は義仙について言う。
「警戒は怠らない様にしよう」
「そんなの警戒する必要ありませんわ」
兼続の意見は過激だった。何故過激かというと。
「出て来たところを叩くだけですわ」
「やれやれですね」
「全くです」
そんな兼続の言葉を聞いてだ。半蔵と又兵衛は。

溜息をつきつつだ。こう言った。
「あの戦いで何も学んでいないのか」
「そもそも学んでわかる頭がないのか」
「どちらにしろこれは」
「お荷物にならなければいいのですが」
「お荷物！？わたくしがですの？」
「その通りじゃ」
幸村も言う。
「全く。そんな簡単な相手ではないぞ」
「やれやれです」
「本当に」
しかしだ。兼続はまだ言うのだった。
「何ですの！？結局はあの女を倒せばいいだけですわ」
「そんな簡単な話じゃないから」
宗朗もそれを言う。
「天草四郎だっているし」
「幕府に長きに渡って仇なすあの女」
千姫はその目を鋭くさせている。
「あの女もとなると」
「激しい戦いになるのは間違いないわ」
朱鬼は静かに言った。
「さて、まずは道場に戻りましょう」
「そうですね。それじゃあ」
明日夢も頷きだ。そうしてだった。
彼等はまずは道場に戻った。にゃんぱいあは陽気にダルタニャンの傍にいる。ダルタニャンもまんざらではない感じである。
そうして一行がまたこれからのことを話し合っていると。ここで。外からだ。凄まじい音が聞こえてきた。それを聞いてすぐにだ。
響鬼と宗朗がだ。同時に声をあげた。
「まさか」

「来た！？」
「それならだ」
「僕達も」
お互いに言い合いだ。そして。
全員道場から飛び出た。すると。
彼等の前にだ。宙に浮かぶあの女がいた。彼女を見てだ。
宗朗がだ。その義仙に対して言った。
「生きていた。いや」
「ええ、違うわ」
微笑みすら浮かべてだ。義仙は彼等を見下ろして言ってきた。
「甦ったのよ」
「そうか、やはり」
「問題は誰が御主を甦らせたかじゃ」
幸村は前に出て義仙に問い返した。
「天草ではなかろう」
「既にそれもわかっているようね」
「スサノオじゃな」
幸村はさらに問うた。
「その見る神か」
「そうよ。天草様も私も」
二人共だった。それは。

## 第六話　信の誓いその九

「あの方に甦らせてもらったのよ」
「御主達を手駒にしてか」
「手駒ではないわ」
義仙がこのことを否定した。
「私も天草様もね」
「では御主達はスサノオの考えにあえて乗ってか」
「その通りよ。私達にとって悪い話ではないから」
「そして天草と共にか」
「この国を思う存分染め上げてもらうわ」
こうだ。言ってだった。
「そうさせてもらうわ」
「そうはさせないわよ」
千姫は既にその手に薙刀を持っている。戦闘態勢だ。
その戦闘態勢でだ。彼女は義仙と対峙しようとする。そして。
響鬼もだ。仲間達に対して言う。
「じゃあ今から」
「はい、そうですね」
「鬼になって」
「戦うとしようか」
こう言ってだった。彼等もまた。
鬼になる。それと共に。
侍達もそれぞれの得物を握る。そうして空中に浮かぶ義仙を取り囲む。戦いがはじまろうとしていた。
それを見てだ。義仙は。
彼等に対してだ。悠然と笑って告げた。
「楽しみましょう」
「楽しむ、ね」

「戦いは楽しむものよ」
こうだ。響鬼に対しても言う。
しかしだ。響鬼もまた言うのだった。
「そこが違うな」
「違う？」
「俺は戦いを楽しむことはしないからな」
これが響鬼の言うことだった。既にその手には太鼓のバチがある。
他の鬼達も同じだ。そうしてだ。
彼等はだ。音楽を鳴らそうとする。その彼等に。
義仙は両手に剣を出しだ。動きはじめた。
「来た！？」
「空から！」
それを見てだ。鬼達も侍達も。
身構える。だがその彼等に。
義仙は嵐の如く攻める。空から。
その剣撃を繰り出し衝撃波も繰り出す。剣を振るい出して来ている。その義仙の圧倒的な攻撃を前にしてだ。宗朗が言った。
「皆、散開だ！」
「散ってどうしますの！？」
「敵の攻撃を各自かわすんだ！」
そうするというのだ。
「そして決して一人と当たらないことだ」
「そうですね。ここはですね」
「それが一番いいですね」
威吹鬼と轟鬼も宗朗のその言葉に応え。
最初に散開した。それを見て。
他の鬼達も侍達も続く。だが兼続は。
散開せずにだ。空中から来る義仙に対して。
その鎚を思いきり振り下ろす。それで叩き潰そうとする。
「もらいましたわ！」

「あら、自分から来るのね」
「これならどうでして！？」
自信があった。だからだ。
「わたくしのこの鎚、防げまして！」
「ええ」
悠然とした笑みでだ。義仙は応え。
そうしてだった。彼女のその左の刀で。
兼続の鎚を受け止めてみせた。それを見て。
兼続も唖然となった。言葉が自然に出た。
「そんな、鎚を刀で！」
「確かにいい一撃ね」
義仙は悠然とした笑みをそのままにして言う。

## 第六話　信の誓いその十

「しかし」
「しかし！？」
「それでは私は倒せないわ」
こう言うのだ。
「まだね」
「！？いかん！」
ここでだ。幸村が叫んだ。その瞬間にだ。
義仙は右の刃をだ。兼続に向けてきた。それを見てだ。
兼続は何とかだ。鎚を蹴ってそれでだ。後ろに跳んだ。それで義仙の刃をかわした。そうしてそれからだった。
地面に降り立ちながら空中でだ。落ちてくる鎚を取り。
そうしてだ。上にいる義仙を見上げて言う。
「何て奴ですの」
「今のをかわしたのは見事よ」
義仙は余裕のままその兼続に返した。
「真っ二つにできたのに」
「生憎ですけれどそう簡単にはやられませんわ」
「だからこそ侍ね」
「その通りですわ。今度こそは」
「止めた方がいいな」
しかしだ。ここでだ。
斬鬼が来てだ。そのうえで兼続に述べた。
「また仕掛けてもだ」
「同じといいますの？」
「そうだ。あの女は一人で倒せるものじゃない」
斬鬼は上にいる義仙を見ながら兼続に話す。
「それこそ全員でぶつからないとな」

「倒せないですね」
宗朗も言う。
「とても」
「そうだな。じゃあ俺も」
響鬼はここでカードを切る決意をした。そうしてだ。
そのうえでだ。彼はその切り札を出そうとした。
「じゃあここはな」
「あれですか」
「あの姿になってですね」
「それなら少しは違うだろう」
こう考えてのことだった。
「それじゃあなるか」
「そうですね。今はですね」
「それしかありませんね」
威吹鬼と轟鬼も応える。こうしてだ。
赤い鬼になろうとする。しかしここで。
不意打ちにだ。何かが出て来たのだった。
「!?あれは」
「何だ!?」
鬼達がだ。まずそれを見て言った。
それはいきなり空から来てだ。空中の義仙にだ。
一気にだ。斬りかかる。それを見てだ。
宗朗が言う。
「まさか。あれは」
「そんな筈がない!」
しかしだ。それはすぐにだ。
幸村がだ。こう言ったのである。
「あの娘は死んだ筈じゃ!」
「け、けれどあの剣撃は」
「それに姿は」

千姫は風の様に来たそれの姿を見て述べた。
「どう見ても」
「しかしじゃ。あの娘は」
「いや、待ってくれ」
宗朗は尚も否定しようとする幸村に言う。義仙と戦うその姿を見ながら。
「柳生義仙も甦ったんだ」
「そうですね。それではです」
「あの娘もまた」
半蔵と又兵衛も言う。
「甦ってもおかしくはないです」
「そうして再び」
「ううむ、これはまことなのか」
まだ釈然としないままでだ。幸村は述べた。
「十兵衛、まさか」
「十兵衛、あの人ですね」
明日夢はそれを聞いてすぐに言った。
「かつてあの眼帯の人と相打ちになって消えた」
「そうじゃ。しかしじゃ」
それでもだとだ。幸村はまだ言う。

## 第六話　信の誓いその十一

「相打ちになったのじゃ。それでは」
「普通に生きていられる筈がないんですね」
「では何故じゃ」
幸村はここでは自問自答する。そしてその自答の結果は。
「まさか。まことに誰かが甦らせたのか」
「久し振りに会ったな」
その女が言った。見れば。
紅の長い髪を白縄で無造作にまとめている。セーラー服を思わせる桃と赤の服を着ており太腿がほぼ剥き出しになっている。顔はまだ幼い感じだがその青い目からは非常に強いものが見える。その少女がだ。両手の剣を縦横に振るい義仙と闘っている。
その少女がだ。義仙に対して言っていた。
「しかしそれでも」
「それでもだというのね」
「強さは変わってはいないな」
こう言うのである。
「私と闘うだけの強さはあるな」
「そうね。そしてそれは」
「私もか」
「ええ、そうよ」
義仙もだ。その剣を繰り出しながらだ。
少女に対してだ。こう言うのだった。
「生憎だけれど力は落ちていないわ」
「その様だな。それでこそ」
どうかとだ。女はまた言う。
「この柳生十兵衛の相手に相応しい」
「そうね。どうやらこの戦い思った以上に楽しめそうね」

「私が戻ったからにはだ」
十兵衛は名乗ってからまた言ってみせた。
「御主等の好きにはさせん」
「言うわね。それじゃあ」
「どうするつもりだ」
「今はこれで帰らせてもらうわ」
楽しげに笑ってだ。義仙は十兵衛に答えた。そのうえで。
一旦間合いを離してだ。再び十兵衛に述べる。その述べる言葉は。
「悪いけれどね」
「後日再戦か」
「そうなるわ。折角貴女も帰ってきたのだから」
そのだ。十兵衛を見ての言葉だった。
「そうさせてもらうわ」
「ふん。ならば去るがいい」
十兵衛はそれをよしとした。そのうえでだ。
義仙が去るのを見届けようとする。その彼女にだ。義仙はまた言った。
「私は一度死んだけれど」
「何だ？」
「貴女はそうではないわね」
「私は生きていた」
「そうね。けれどこれまで受けた傷が深くて」
そのせいでだとだ。義仙は十兵衛を見ながら話す。
「大人しくしていたのよ」
「そしてその傷を回復させ」
下からだ。宗朗が言ってきた。
「天草の封印を解いたのも」
「そうよ。スサノオよ」
他ならぬだ。彼がしたというのだ。
「それはわかるわね」

「確かに。それなら」
「私達のこの騒乱を終わらせたいのなら」
それならばどうするべきか。義仙は十兵衛達に話す。
「あの方を倒すことね」
「言われずともそうする」
十兵衛が強い言葉で答える。
「御主は倒す。天草もな」
「ではそれを誓いにして」
「今は去るがいい」
「見逃してくれるのかしら」
「戦意を消した相手と刃を交える趣味はない」
それでだとだ。義仙に告げた。
「ではまたな」
「ええ、またね」
二人は微笑みさえ浮かべ合ってだ。そのうえでだった。
義仙が姿を消した。これが戦いの終わりだった。それが終わりだ。
一行は。
響鬼がだ。宗朗に言ってきた。
「とりあえずな」
「あっ、はい」
はたと気付いた顔でだ。宗朗は響鬼に応える。
「あの娘のことですよね」
「話してくれたあの娘だよな、あの娘が」
「そうです。柳生十兵衛です」
まさにだ。彼女こそがだというのだ。
「あの娘がそのです」
「そうだな。じゃああの娘を交えてな」
「あらためてこれからのこともですね」
「ああ、話そうか」
「わかりました。それでは」

こう話してだった。一行は。
まずは十兵衛が降り立つのを待った。その彼女は。
戦いが終わり暫くは不服そうだった。しかし何時までも宙にいても仕方ないと判断したのか。
地に降り立った。それから周りに話した。
「ええと。まさか生きているなんて」
「あれっ、口調が」
「はい、感じも何か」
そんな十兵衛の話と表情を見てだ。明日夢とあきらが言う。
「変わったけれど」
「穏やかというか幼い感じに」
「普段はこんな感じなんだ」
宗朗がその二人に話す。
「十兵衛はね」
「そのことは実際に御聞きしましたけれど」
「本当だったんですね」
「普段は特に攻撃的でもないから」
宗朗はこのことを保証した。
「だから。ここはね」
「そうだな。道場に戻ってな」
「そのうえで」
斬鬼と朱鬼が話してだった。そのうえで。
彼等はだ。道場に戻りだ。十兵衛にだ。ことの顛末を話すのだった。その戻って来た侍に。

第六話　完

２０１１・９・１４

# 第七話　義の戦その一

第七話　義の戦

またしてもだ。飯だった。
鬼達と侍達は向かい合って正座し膳の上のの飯を食べている。その中でだ。
十兵衛は丼飯を次々に掻き込みながらだ。こう響鬼達に言った。
「つまりあれ？」
「あれ？」
「うん、響鬼さんだよね」
「ああ、そうだ」
気さくな笑みでだ。響鬼は十兵衛に応えた。
そうしてだ。こう言ったのである。
「俺達は鬼だ」
「鬼って人を食べたりしないんだ」
「俺達はそういう鬼だ」
こうだ。響鬼はその笑みのままで十兵衛に答える。
「さっきも言ったが」
「魔化魅よね」
十兵衛はおかずの焼き肉を箸で取りながら答えた。
「それと戦ってるんだ」
「あちらの世界ではな」
「それで他にもだよね」
箸を動かし食べながら十兵衛は質問していく。
「響鬼さん達が戦ってる相手って」
「そう。スサノオが仕掛けてくる奴等とな」
「スサノオねえ。凄いんだ」
少しきょとんとした目になって言う十兵衛だった。
「響鬼さん達と何度も戦ってるのって」

「確かに凄いな」
響鬼もだ。そのことを否定しない。
それでだ。こうも言うのだった。
「何しろ神様だからな」
「神様なんだ」
「要するにな。スサノオは神様だからな」
「その神様っていったらね」
今度は十兵衛から話す。その話すこととは。
「十兵衛もなの」
「十兵衛も！？」
「というと！？」
今の彼女の言葉にだ。すぐにだ。
宗朗と幸村がだ。彼女の左右からそれぞれ問うた。
そしてだ。こう言ったのである。二人共。
「まさか十兵衛を甦らせたのは」
「神の一柱だというのか」
「何かね。黒い服の凄く奇麗な人」
十兵衛は豆腐の味噌汁を飲みながらその二人に話した。
「その人に。こっちの世界に連れて来てもらって」
「あの人か」
「そうだったのね」
ここで納得した様に言ったのは斬鬼と朱鬼だった。
「俺達と同じく」
「この娘も」
「黒衣の青年でしたね」
半蔵がその二人の言葉に応えて言った。
「貴方達の側にいる神は」
「ああ、そうだ」
「このことはもう話したわね」
「はい」

半蔵は二人の言葉にこくりと頷いてそれを返事にした。
そのうえでだ。彼女の口からその青年のことを話した。
「貴方達の世界の人間の造物主でありかつてアギトを消そうとした神ですね」
「あの神様は人間を見ている神様なんだ」
響鬼がこのことを話した。
「とにかく。自分達の子供である人間を愛してくれているんだ」
「そう考えるといい神ですね」
宗朗もだ。彼等の話から言った。
「そうなりますね」
「そうさ。まあアギトのこともわかってくれたしな」
響鬼はかつての戦いのことからも黒衣の青年について話した。
「俺達のことをずっと助けてくれてるんだ」
「何かあれば助けてくれる神様じゃな」
幸村もこう認識していた。
「有り難い神じゃがそれでも」
「ああ。その辺りは本当に複雑なんだ」
響鬼はこのことも話した。

## 第七話　義の戦その二

「スサノオは人間を試す神で」
「黒衣の青年は人間を助ける神ですね」
「で、そこにバトルファイトの話も入って」
あの戦いのことも話されていく。
「ヒューマンアンデットやスマートレディやら」
「ええ、その話は聞かせてもらったけれど」
今度は千姫が言う。
「凄い神様ね」
「しかもその神を一時は敵に回しておったとは」
幸村はかつてのアギトの戦いのことに言及した。
「御主等凄いというものではないぞ」
「貴方達はそうした戦いを経てこられたんですね」
宗朗もだ。感心する様にして述べる。
「だからこそそこまでの強さなんですか」
「神さえも凌駕する」
「そこまでの力じゃな」
「力の問題じゃないんだよ、これがな」
しかしだ。響鬼は笑ってそのことは否定した。
「あれだよ。要はな」
「大事なのは？」
「というと」
「心なんだよ」
それがだ。大事だというのだ。
「人間っていうのはな」
「そうそう、心なのよ」
十兵衛が響鬼のその言葉に応える。そうして。
ここでだ。こう言ったのだった。

「お代わり」
「まだ食べるんですか」
「うん、だってまだ五杯目だよ」
驚く又兵衛ににこりと笑って話す。
「十杯は食べないと」
「ううん、何か大食の方は」
戸惑いを見せながら。又兵衛は十兵衛の茶碗を受け取りお櫃から御飯を入れながら言う。
「前よりも凄くなっているかも」
「いや、五杯は普通じゃろ」
幸村もここでお代わりだった。
「わらわもそれ位食べるぞ」
「確かに。幸村様も」
「腹が減っては戦ができぬ」
非常によく言われる言葉がここでも言われた。
「そういうことじゃ」
「はい、では」
「うむ。それでじゃ」
ここまで話してだ。そうしてだ。
幸村は響鬼に顔を戻し。問うたのだった。
「心じゃが」
「確かに力も必要だよ」
鬼としてだ。それはどうしてもだとだ。響鬼は言う。
しかしだ。それと共にだった。
「けれどそれ以上にな」
「心があってこそか」
「何かが出来て果たせるんだ」
これが響鬼の言葉だった。
「そうなんだよ」
「ううむ。義じゃな」

「義？」
「うむ、義じゃ」
それだというのだ。
「わらわ達のそれは義になるな」
「その義があるからアギトは神に勝てたっていうんだな」
「そうなるな」
こう響鬼に話す幸村だった。
「ひいては」
「それがわらわ達にとっては義になるのじゃ」
「義、忠義か」
「忠義とは限らん」
義とはだ。それだけではないというのだ。
そしてだ。幸村はその義について具体的に話しはじめた。
「仁義に信義、孝義とじゃ」
「つまりあらゆることか」
「左様、義とは即ち心」
幸村の心が澄んできた。尚更。

## 第七話　義の戦その三

「それがあるからこそじゃ」
「人間だっていうんだな」
「そうした意味でも鬼、仮面ライダーと侍は同じ」
幸村はここで一つの結論を出した。そうしてだった。
宗朗に顔を向けてだ。そして言ったのだった。
「ではそのことを忘れずにじゃ」
「戦っていくんだね」
「最後の最後までな」
「それでね」
十兵衛がほうれん草のひたしを食しながら言ってきた。
「その黒い神様だけれどね」
「黒衣の青年が？」
「うん、何か色々やることがあるんだって」
こう一同に話すのである。
「それで今はね」
「今は？」
「ここに来ることはできないけれど」
それでもだというのだ。
「十兵衛に鬼さん達に伝えて欲しいって」
「何ですか、それは」
「一体」
威吹鬼だけでなく轟鬼も十兵衛に問うた。思わず身を少し乗り出している。
「黒衣の青年が僕達に伝えたいこと」
「それって何なんだ！？」
「この世界のスサノオは天草四郎との戦いの後で出て来るんだって」
これがだ。黒衣の青年からの伝言だというのだ。

「だから。天草に勝ってもね」
「油断してはいけない」
「そういうことか」
「そのことを伝えて欲しいって」
十兵衛はあくまで天真爛漫な調子で話す。戦いの時とは全く違う。
「そう言われたから」
「やっぱりそうなんだね」
宗朗は十兵衛の言葉を聞いて。納得した様に頷いた。
そうしてだ。また言う彼だった。
「スサノオは僕達を見て試し続けているんだ」
「本当に趣味の悪い奴ね」
千姫は宗朗の言葉を受けて憮然とした顔になる。
そのうえでこう言ってだ。スサノオへの嫌悪を見せたのである。
「最後の最後まで出て来ないなんて」
「まああれだ。大物は最後に出て来るものだからな」
響鬼がその千姫にこう話す。
「特に気にすることでもないさ」
「まずは戦いましょう」
半蔵が述べる。
「柳生義仙、そして天草四郎と」
「そうだな」
半蔵の今の言葉に頷いて応えたのはダルタニャンである。見れば器用に箸を使い続けている。
「それでは今からだ」
「また向こうから来るな」
桐矢は己の読みを述べた。
「さて、その時に」
「もう一度迎え撃ちましょう」
あきらが応えて。そうしてだった。
彼等はそのまま食事を摂る。そうして今は十兵衛の帰還を喜ぶこ

とにした。その食事の後で。
十兵衛はにゃんぱいあ達とだ。庭で遊んだ。そのにゃんぱいあ達にだ。
十兵衛はその彼等にこう尋ねた。
「君達ってさ」
「何にゃ？」
「何かあるのかよ、俺達に」
にゃんぱいあとまさむにゃがその十兵衛に問い返す。
「他の世界から来たんだよね」
「そうですよ」
にゃてんしがその問いに答えた。彼も来ているのだ。
「僕達は元々は天界にいまして」
「天界？」
「神様がおられる世界です」
そこから来たというのだ。
「ですからとても偉いんですよ」
「ふうん、君達って偉い猫なんだ」
「はい、そうなんです」
にゃてんしは平然と嘘を吐いた。
「だから崇め奉らないといけないんですよ」
「そうだよね。偉いんだからね」
そしてだ。十兵衛はにゃてんしの嘘をそのまま信じた。

## 第七話　義の戦その四

そのうえでだ。こう言うのだった。
「神様みたいなものだよね」
「いえいえ、僕は天使ですよ」
このことだけは正しかった。
「天界にいまして」
「天界って？」
「その神様がいる世界で」
「あっ、何か基督教の？伴天連の人達が言う」
「そうなんですよ。そこにいまして」
「じゃあ本当に天使なんだ」
「はいそうです、ですから」
ここからがだ。にゃんぱいあの本題だった。
その顔に黒いものを帯びさせてだ。彼は言った。
「僕にですね。お魚なり鶏肉なりを何時でもたっぷりと」
「っていい加減にしておけよ」
しかしだ。そのにゃてんしをまさむにゃが注意してきた。
「御前いつもそう言って誰かに悪さしてるだろ」
「はて、そうでしょうか」
「そうだよ。全く仕方のない奴だな」
「何しろ僕は天使ですから皆崇めなくてはいけないのですよ」
「けれどその行いのせいで」
茶々丸はにゃてんしに対しても鋭く容赦がない。
「天界にいられなくなったんですよね」
「全く。天界も心が狭いですね」
「御前は幾ら何でも日頃の行いが悪過ぎるんだよ」
まさむにゃはにゃてんしに対して一番容赦がない。見ればカツオはそのまさむにゃの後ろに隠れてがたがた震えている。そんな状況

だ。
　そんな中でだ。毛利君と小森君が十兵衛に尋ねた。
「それでいいかな」
「僕達周りを見てきたけれど」
「何かわかったの？」
「うん、周りは平和だったよ」
「特に怪しいところばなかったよ」
「そうなの」
　二匹から話を聞いてだ。十兵衛は。
　目を何度かしばたたかせてからだ。こう言った。
「じゃああの娘何処に隠れてるのかな」
「多分ですけれど」
　茶々丸がその十兵衛に話してきた。
「その人達こちらの世界にはいませんよ」
「じゃあ茶々丸ちゃん達の世界にいるの？」
「いえ、そこでもありません」
　彼等の世界でもないとだ。茶々丸は話す。
「そこにいれば大騒ぎになりますから」
「あんな人が出て来たら」
「そうです。それこそ大変なことになります」
　それだけの騒ぎになってしまうというのだ。
「とはいっても響鬼さん達の世界でもなく」
「それじゃあ何処なの？」
「あの人達の世界ですね」
　茶々丸は自分に顔を下ろしてきている十兵衛の顔を見上げて話す。
「スサノオさん達の」
「そこにいるの」
「はい、そこから僕達を見ているんです」
　そうだというのだ。
「そうして何を仕掛けようかと考えているんです」

「僕みたいににゃ」
にゃんぱいあは自分のことから述べた。
「人が何をするのかを見ているにゃ」
「そうですね。兄上の仰る通りです」
「やったにゃ、僕の予想が当たったにゃ」
「いえ、もうこれは仮面ライダーの皆さんに御聞きしてますから」
兄に対してもだ。茶々丸は容赦がない。
「十兵衛さん達も見ていますよ」
「十兵衛そんなにじろじろ見られるの好きじゃないけれど」
「そうした意味ではなくてですね」
「違うの？」
「そうです。スサノオは人間自体を見ていますから」
ひいてはだ。それは。

## 第七話　義の戦その五

「人の心を持っている相手を」
「じゃあそれだと」
茶々丸の言葉からだ。十兵衛は一つの答えを出した。その答えは。
「にゃんぱいあちゃんや茶々丸さんだってそうなるわよ」
「そうですね。僕達に人間の心があるかどうかはわかりませんが」
「猫だから？」
「蝙蝠だから？」
「それで？」
十兵衛に続いて毛利君と小森君もここで言う。
「それでなの？」
「まあ確かに僕達蝙蝠だけれど」
「それでもなんだ」
「いえ、もっと根本的な問題です」
かつより大きなことだとだ。茶々丸は話す。
「僕達の心が人間のものかというと」
「完全に猫だからな、俺達」
「その通りだにゃ」
まさむにゃとにゃんぱいあもこのことには頷く。
「猫として生きて好き勝手やって」
「それで人間というのもにゃ」
また違うのではないのか、二匹もこのことに気付いた。
そしてだ。彼等はこう言うのだった。
「それじゃあ猫としてか」
「考えてもいいにゃ？」
「兄上は吸血猫ですが猫は猫です」
自分の兄はそうだというのだ。
「そのことは変わりがありません」

「ただ血や苺が好きなだけにゃ」
にゃんぱいあも言う。
「それだけにゃ」
「はい、その通りです」
「まあ猫だから人間だからじゃなくてな」
まさむにゃは茶々丸に続く形で言った。
「俺達は俺達でいいか」
「そうだにゃ。少なくとも僕は不自由していないにゃ」
「そうです。ただあのスサノオに見られているという点で」
それならばだというのだ。
「僕達はもう人間とも考えられます」
「僕達が人間？」
「スサノオは人を見る神ですから」
そのだ。彼に見られているということから出る答えだった。
「ですからそれも」
「ううん、何か難しいにゃ」
「特に難しく考える必要はありません」
それはないとだ。茶々丸は兄に話した。
「そのまま考えればいいんですよ」
「そうにゃ？」
「そうです。十兵衛さんもです」
「十兵衛もなの」
「そうです。あくまでありのままです」
茶々丸はまた十兵衛に話す。
「考えられていいですから」
「ううん、それじゃあ？」
「それじゃあ？」
「今度は何なんだ？」
「十兵衛お腹空いた」
十兵衛が今思ったことはこのことだった。このことを言ってだ。

早速だ。にゃんぱいあ達に提案した。
「だから皆で何か食べる？」
「そうですね。ここはですね。
にゃてんしは宙に浮かび寝転がり煙草を吸いながら述べる。
「デザートにしますか」
「デザートかよ」
「はい。お菓子でも食べますか」
「お菓子よりもさくらんぼがいいにゃ」
にゃんぱいあはそれがいいと主張してきた。
「紅いものがいいにゃ」
「紅ですか。いいですね」
「それがいいにゃ」
「ではそうしましょう」
気紛れな感じでだ。にゃんぱいあの言葉に頷いてだ。

## 第七話　義の戦その六

にゃてんしもいいと答えた。ここでだ。
彼等のところにだ。宗朗と明日夢が来て声をかけてきた。
「ああ、君達ここだったんだ」
「十兵衛さんもおられますね」
「うん、何？」
十兵衛は二人に顔を向けて応える。
「何かあったの？」
「いや、丁度おやつの時間だから」
「それで探してたんですよ」
「おやつ？何でしょうか」
「さくらんぼだよ」
「どうですか？」
宗朗も明日夢もにゃてんしにも答えた。
「皆もう集まってるから」
「それで皆で一緒に」
「丁度食べたかったところにゃ」
にゃんぱいあは満面の笑みで応える。
「それじゃあそれを食べるにゃ」
「俺もにゃんぱいあが一緒ならな」
「僕も別に」
まさむにゃと茶々丸も言う。
「それでいいぜ」
「そうさせてもらいます」
「僕達も実はね」
「雑食だし」
毛利君と小森君も問題なしだった。
「それじゃあお言葉に甘えて」

「今から」
「はい、では君も」
にゃてんしはカツオの前に立ち彼を問い詰める様にして賛成を促す。カツオはその彼に見られてやはり震えている。震えずにはいられない。
「いいですね」
「えっ、僕は」
「さくらんぼ好きですね」
「ええと、その」
「ここで好きと言えば天国に行けるのですね」
いつもの滅茶苦茶な暴論だった。
「さあ、言うのです」
「そのさくらんぼ僕食べられるのかな」
「えっ、それは当然じゃないか」
「カツオ君の分もあるよ」
そのことはにゃんてんしではなく宗朗と明日夢が保証する。
「だから皆集まってね」
「それで食べようよ」
「はい、それじゃあ」
「そしてここで、です」
まだだった。にゃてんしはカツオの前に立ったままだ。こう言うのだった。
「僕にそのさくらんぼをくれれば」
「えっ、僕のさくらんぼを」
「そうです。そうすればです」
また言うのであった。
「貴方は天国に行けるのですよ」
「おい、いい加減にしろよ」
まさむにゃがここでにゃてんしに言う。
「全く。カツオはちゃんとカツオの分食べていいからな」

「いいの？」
「ああ、気にするな」
こうカツオに言うまさむにゃだった。
「本当にな」
「うん、それじゃあ」
こうしてだった。彼が食べることはまさむにゃも保証した。こうしてだった。
人間も猫も一緒にさくらんぼを楽しむ。そのさくらんぼを食べて千姫が言う。
「このさくらんぼは」
「山形のさくらんぼです」
「そうね。絶品ね」
微笑んで食べながらだ。千姫は満足して言う。
「やっぱりさくらんぼは山形よ」
「そうですよね。本当に」
「あと牛は」
それはどうかというと。
「兵庫ね。あの神戸の牛がいいわ」
「姫様は神戸を贔屓にされてるんですよ」
半蔵が自分達の向かい側に座る響鬼達ににこりと笑って話す。

## 第七話　義の戦その七

「御幼少の頃から神戸がお好きで」
「相性か？」
桐矢がそれを聞いて言う。
「それの関係か」
「相性というよりは」
どうかとだ。その千姫が話す。
「中から来るものなのよ」
「だから神戸が好きなのか」
「昔からね。それで野球は虎よ」
それはそちらだというのだ。
「縦縞でないと納得しないわ」
「鬼の球団はこっちの世界にはあるか？」
響鬼は少し笑って千姫達に尋ねた。
「あれは少し嬉しいだけれどな」
「あっ、そういう球団はないです」
宗朗がその問いに真面目に答える。
「十二球団ありますけれど」
「それでもか」
「鬼はないですね」
こう話すのである。
「あとこの世界ではです」
「この世界ではか」
「野球よりもやっぱり」
「武道だな」
「侍ですから」
それが理由でだというのだ。
「武道が一番盛んですね」

「じゃあ体育の時間も」
「それとは別に武道の時間があります」
そうだというのだ。
「僕はその師範なんです」
「じゃあ宗朗少年はあれか」
「学生ですが師範でもあります」
そうだとだ。響鬼に話すのである。
「それで結構忙しいんです」
「成程。そしてその忙しい中でだな」
「充実してます」
それはだと。微笑んで言うのである。
「毎日が」
「そうだな。忙しいと余計にな」
「充実しますね」
「そう、それがいいんだ」
響鬼は大人のそのよさを見せて応える。
「忙しい中で何をするか」
「それですね」
「何を果たすか」
ひいてはそういうことだった。
「それが大事なんだ」
「では僕は」
「果たすんだな」
「スサノオとのことを終わらせます」
具体的にはそういうことだった。
「ここで」
「それがいいな。ただしな」
「スサノオはですね」
「強いからな」
このことも言うのだった。

「何しろ神だからな」
「神の力は絶大ですね」
「そうさ。けれどな」
それでもだとだ。響鬼は微笑んで言うのだった。

## 第七話　義の戦その八

「勝てない相手じゃない」
「大切なのは心ですね」
「それがどうかで戦えるからな」
「神に勝つ戦いですか」
「それができるんだ。何度も言うが心なんだ」
それがあればだとだ。響鬼は話していく。
そのうえでだ。宗朗にまた言った。
「勝てないと思っていたら勝てる戦いも勝てないよな」
「はい、それは確かに」
「武道だってそうだよな」
「気持ちが負けていればどうしようもないですね」
彼もだ。これまでの多くの勝負でそれがわかっていた。彼も伊達に武道指南役ではない。尋常ではない武芸、それを培ってきた勝負も知っているのだ。
だからだ。響鬼の言葉に頷き答えたのだった。
「確かに」
「そう。じゃあ最初から勝つって思ってな」
「戦いに赴きますか」
「そうしよう。それとだけれどな」
「それと？」
「あの十兵衛ちゃんは面白いな」
彼女のことも話す響鬼だった。
「純粋でそれでいてな」
「そうです。あの娘は純粋で」
そうしてだとだ。宗朗も彼女について話した。
「そうしていざという時には」
「ああなるんだな」

「ああなった時の十兵衛は本当に強いです」
「あの娘がいるのも運命だな」
「十兵衛もですか」
「そうだろうな。運命だろうな」
こう言う響鬼だった。
「俺達全員が運命の中にいるんだ」
「じゃあ次の戦いでは」
「運命を切り開くか」
響鬼はここでも微笑んでみせた。
「俺達自身でな」
「運命は自分の手で切り開くものでしたね」
「それが人間だからな」
こんな話もしたのだった。その二人に十兵衛、それに明日夢がだ。
今度はだ。慶彦から直接呼ばれた。その慶彦はだ。
生徒会室でダルタニャンを横に置きだ。会長の机から問うたのだった。
「一つ決めた」
「決められたとは」
「僕も戦おう」
こうだ。宗朗に言ったのである。
「君達と共にな」
「おや、考えを変えたんだな」
「少し考えたのだが」
そのうえでだとだ。宗朗は自分の前に立つ響鬼に話した。
「スサノオだったね」
「はい、その荒らぶる神です」
「かなりの力を持っているのは間違いない」
そうだとだ。彼は宗朗達に対して話す。
「そして若し彼等が勝利を収めれば」
「この国大変なことになっちゃうよね」

十兵衛は彼女が考えていることをそのまま言葉に出した。
「もう滅茶苦茶にされて」
「そうだ」
まさにそうだとだ。慶彦は十兵衛にも答えた。
「徳川家、日の本の政を司る我が家としてもだ」
「捨ててはおけないんですね」
「最初はダルタニャンだけでいいと思った」
慶彦は明日夢に応えながら自分の右隣に立つダルタニャンを見た。
そのうえでだ。響鬼達に語ったのだ。
「しかし相手はそれどころではないな」
「何しろあらゆる世界に干渉してきている相手ですから」
「それだけの相手ならばだ。僕も戦わなくてはならない」
慶彦は確かな顔と声で言い切った。

## 第七話　義の戦その九

「君達と共に戦おう」
「有り難うございます、それでは」
「慶彦さんも十兵衛達の仲間なんだね」
「仲間か。仮面ライダーではそう言うのか」
「ああ、言う奴もいれば言わない奴もいるな」
そこは色々だとだ。響鬼は話した。
「けれどまあ。一緒に戦うんならな」
「仲間になるか」
「そう思ってくれていいさ。さて、そろそろかな」
慶彦の微笑んでの言葉に応えてだ。すぐにだ。
響鬼はだ。その表情を少し察するものにして目をやや上にさせてだ。
こう言ってみせたのだった。思わせぶりな雰囲気で。
「また出て来るかな」
「柳生義仙が」
「あと天草四郎か」
彼女もだというのだ。
「それとその後ろにいるな」
「スサノオもですね」
「出て来るだろうな」
「わかりました。じゃあ」
「戦いの準備だね」
宗朗と十兵衛が応えてだった。そうして。
慶彦を迎えた彼等はだ。一旦また道場に入った。そこでだ。
またしても飯を食う。今度は。
「この鍋は」
「何かしら」

慶彦と千姫の兄妹が皆で鍋を食う中でだ。眉を顰めさせていた。
鍋の中には豆腐に白菜、葱、エノキ、それに白身の魚がある。その魚を食べてだ。
「美味だが」
「食べたことはないわ」
「あっ、この魚はですね」
宗朗がだ。その二人に説明した。
「河豚です」
「河豚！？」
「河豚というと」
「はい、毒がありますがとても美味しいですよ」
「その毒はじゃ」
幸村もその河豚を食いながら二人に話す。
「ちゃんと宗朗が取り除いておいた」
「河豚の毒は皮や内臓にありまして」
「それを取り除いてか」
「そうして調理したものなの」
「はい、だから大丈夫です」
食べてもだ。いいというのだ。
「安心して召し上がって下さい」
「それならいいが」
「河豚を食べるのは正直」
二人はやや戸惑いながらだ。こう言うのだった。
「僕は河豚を食べるのははじめてだ」
「私も。この魚は」
「天皇家と将軍家の方々はです」
半蔵がだ。ここで事情を話した。
「河豚は食べられないんですよ」
「毒があるからだよな」
「はい、だからです」

それでだとだ。半蔵は響鬼にも話す。
「若しものことがあってはいけませんから」
「それなら出さない方がよかったですか？」
あきらも食べながら言う。その顔が曇っている。
「私が決めたんですが」
「いや、それはいいよ」
宗朗がそのあきらに言った。
「僕もいいって言ったし」
「だからですか」
「うん、いいよ」
こう言うのである。
「御叱りは僕が受けるから」
「言ったわね」
宗朗がこう言った瞬間にだ。千姫がだ。
その目をきらりと光らせてだ。こう言ったのである。
「ではいいわね」
「何がですか？」
「責任を取ってもらうわ」
その目での言葉だった。

## 第七話　義の戦その十

「このことのね」
「むっ、御主何を言っておる」
「だから責任を取ってもらうのよ」
千姫は宗朗にも臆面もなく言い返した。
「この河豚のことをね」
「待て、この場合の責任とは何じゃ」
「言うまでもないわ。柳生家は代々幕府の武芸指南役で家柄も充分ね」
「だからそれがどうしたというのじゃ」
「徳川家とも幕府開闢以来懇意だし」
千姫の話が続く。
「以前にもこうしたことはあったし」
「あの、姫様それでは」
「半蔵、高校を卒業したら」
このだ。学園をだとだ。千姫は半蔵にも言った。
「いいわね、結婚よ」
「ほ、本気ですか！？」
「嘘でこんなこと言わないわよ」
千姫の目はその輝きをさらに強くさせていた。
「いいわね。この責任は必ず」
「よいのか、これで」
千姫にはもう言っても無駄だと判断してだ。幸村は兄の慶彦に問うた。
「とんでもない話が勝手に進んでおるぞ」
「河豚のことは僕も知っていた」
慶彦は幸村のその言葉にここから話した。
「その毒は一匹で何十人も殺せる」

「それがどうかしたのじゃ」
「次期将軍である僕を毒殺しようとしたこと」
「だからそれは違うと言っておろうが」
「このことは万死に値する」
幸村の話を聞いていない様に思えた。しかしだった。
慶彦はだ。ここでこう言ったのだった。
「責任を取ってもらわないといけない」
「ではお兄様」
「可愛い妹を奪われることは残念だ」
完全な棒読みだった。見事なまでの。
「しかしこの罪を咎めないではいられない」
「それではですね」
「千、認める」
ここでだ。慶彦はにたりと笑ってみせた。
「これで僕は妹婿を手に入れ徳川家もまたよき侍を取り戻せた」
「あの、御言葉ですが」
しかしだ。慶彦がここまで言ったところでだ。
あきらがだ。こう言ってきた。
「この河豚ですけれど」
「河豚が？」
「どうかしたの？」
「サバフグですけれど」
その河豚だというのだ。
「毒のない」
「何っ、毒のない河豚もいるのか」
「そうだったの」
「はい、最初はトラフグだと思ったんですけれど」
それがだ。実はだというのだ。
「サバフグでした。毒のない」
「この河豚は安心して食べられますから」

明日夢もここで慶彦達に話す。
「美味しいですし」
「ううむ、では宗朗の責任のことは」
「これでは」
「ないのう」
幸村がすかさず打ち消してきた。
「全く。河豚位ちゃんとわかっておれ」
「いやいや、河豚はやっぱり毒があるものだからな」
響鬼はその幸村に笑って話す。
「ある脚本家の人なんかは河豚を食おうと思って皆に止められたこともあるからな」
「毒があると皆思うておるからか」
「そうだよ。だからそれは仕方ないさ」
「しかし責任のことはどうなる」
幸村は不安げに宗朗と千姫を交互にせわしく見ながら響鬼に問うた。

## 第七話　義の戦その十一

「全く恐ろしいことを言いおる」
「まあ毒はないからね」
「責任は起こらんな」
「そうなるかな、この場合は」
「ではじゃ。この話はなしじゃ」
幸村は強引にそういうことにしてしまった。
「よかったのう宗朗、御主は助かったぞ」
「助かったっていうか僕は何も言っていないけれど」
周りの騒ぎにきょとんとしていただけだった。
「何ていうか」
「全く。あと一歩だったのに」
むしろだ。千姫が忌々しげに歯噛みしている。
「余計なことを」
「危ういところだったわ。油断も隙もないわ」
「けれどまたの機会に」
これで諦める千姫ではなかった。それでだ。
まだ宗朗を見てだ。今度はこんなことを言うのだった。
「私はそれこそ宗朗をいつも」
「どうしていたのじゃ」
「馬にしていたのよ」
幼子の頃のことを言うのだった。
「私が人になって宗朗をいつも操っていたのよ」
「完全にかかあ天下ではないか」
「悪くて？私はそもそも」
「わかっておるわ。庭球でも部長だったな」
「知ってるのね、そのこと」
「ふん、知らぬと思うかこの幸村が」

話がここでもよくわからない方に飛んできていた。
「西洋の軽音楽もやっておるし魔乳がどうとかもじゃな」
「あっ、それわたくしもですわ」
兼続もここで言う。
「これでも最初は胸が大きくてたゆんたゆんでしたわ」
「何か話が凄くなってませんか？」
威吹鬼は鍋の中の野菜と豆腐を取りながら言った。
「まあ何はともあれ今はサバフグを食べてですね」
「はい、英気を養いましょう」
又兵衛が彼のその言葉に頷く。
「それでは」
「河豚も野菜もまだまだありますから」
轟鬼はこんなことを言いながら実際に鍋に野菜や豆腐を入れていく。無論河豚もだ。
「それで最後はですね」
「雑炊だな」
「最後の最後はそれね」
斬鬼と朱鬼が応える。
「鍋の最後はやはりあれだ」
「雑炊がなくては話にならないわ」
「卵も用意してますから」
轟鬼は実に用意がよかった。
「最後の最後まで食べましょう」
「そうして決戦に赴くとするか」
慶彦がまた言った、
「この世界での決戦に」
「はい、先は長いですし」
宗朗はこの世界でのことだけではないと。もう強く意識していた。
「食べてそうしてです」
「わかっているさ。そうして」

「戦いましょう」
こうした話をしながらだ。彼等はその河豚鍋を食べていく。その後でだ。
風呂だった。女組が風呂に入っている。その中において。
幸村がだ。いささか嫉妬する目でだ。あきらの胸を見てこう言った。
「大きいのう」
「そうですか？」
「全く。若いというのにその大きさか」
こう言うのである。羨望の目で。

## 第七話　義の戦その十二

「わらわはずっとこうだというのに」
「そればかりは仕方ないわよね」
「胸はね」
立花姉妹もいる。彼女達はこう言ってだ。
幸村にだ。こんなことも言った。
「けれどそれはね」
「気にすることはないから」
「慰めはいらんぞ」
「だから。慰めじゃなくて」
「胸が小さいのがいい人もいるのよ」
二人が話すのはこのことだった。
「世の中そういう人も多いから」
「特に気にすることはないわ」
「それでしたら私も」
兼続が二人の話に乗ってきた。
「夢がありますわね」
「夢というのかしら」
千姫は身体を洗いながら彼女に対して言う。大事な部分は泡で隠れている。
「それは」
「私これでもギターもやってまして」
「ギターも。ああ、そういえば」
「あの時もね」
姉妹はそのことにふと気付いた様になって述べた。
「妹さんの方がね」
「そうなってるわよね」
「うう、だから余計にですの」

兼続もムキになっている。無意識のうちにそうなっている。
「何時か討ち乳になれる位の胸が欲しいですわ」
「討ち乳ね」
また千姫が反応を見せる。
「あれじゃやられたらもう痛いわよ」
「千姫様はそちらの世界でも巨大じゃないですか」
兼続は千姫のその大事なところが隠されている胸を見て言った。
「正直羨ましいです」
「そうじゃ。胸が大きいのはそれだけで凄いことなのじゃ」
幸村もそれを主張する。
「わらわもじゃ。何時かはたゆんたゆんになってじゃ」
「幸せになりますわ」
「幸せなんですか？」
あきらは二人の話を聞いてもそれには首を傾げさせる。
「胸が大きいとそれだけで」
「持っている者にはわからんわ」
「持たざる者の苦しみは」
「ううん、そうなんですか」
「だから。何度も言うけれど」
「大きいのも小さいのもそれぞれよ」
姉妹は落ち着いてこう彼女達に話し続ける。
「何も大きいだけじゃないから」
「形だってあるし」
そうした話をしながらだった。風呂に入っていた。
既に男達は風呂から出ている。それから浴衣に着替えて縁側で西瓜を食べながらだ。響鬼はだ。慶彦にこう尋ねた。同じく西瓜を食べている彼に。
「あの時の話だけれどな」
「千姫の戯れのことかな」
「あれは戯れじゃないよな」

笑ってだ。慶彦に尋ねる響鬼だった。
「そして君もな」
「さて、それはどうかな」
このことはだ。何かを隠す笑みを浮かべてだ。
そのうえでだ。彼はこう響鬼に返した。
「僕は特にね」
「特にかい」
「千姫の幸せを願っているだけさ」
「妹さんのか」
「そう。兄としてあの娘には幸せになって欲しいだけさ」
その微笑みで西瓜を食べて言う慶彦だった。
「もっとも僕は宗朗も」
「彼もか」
「嫌いじゃない」
妹のことを話しながらだ。同時に彼のことも言うのだった。
「昔からね。ああいう人間は嫌いじゃない」
「むしろ好きというのかな」
「そうだね。好きだね」
隠さなかった。それも全く。

## 第七話　義の戦その十三

「だからできれば」
「妹さんの相手に」
「なって欲しいけれど。それは無理かな」
「彼の方が問題だろうな」
響鬼は今ここにいない宗朗を見てこう述べた。
「彼はどうもな」
「鈍感なんだ、宗朗は」
「そう。それもかなりの」
「それさえなければ完璧だというのにね」
「完璧な人間なんてこの世にはいないさ」
響鬼はここでは自分の人生経験から答えた。
「神様だって完璧な神様もいないさ」
「全てはなにかしらの欠点がある」
「そういうものさ。だから彼は鈍感なんだ」
その鈍感さをだ。響鬼は笑顔で受け入れていた。
「それでいいじゃないか」
「それはいいとしても」
だが、だった。今の慶彦はだ。
そのことを受け入れてもだ。まだあるというのだ。
「千姫は純情で一途だから」
「彼じゃなければ駄目だっていうのか」
「幼い頃からそう決めているんだよ」
兄だけあってだ。千姫のそうしたところはわかっていた。
「宗朗じゃないと駄目なんだ」
「難しいな、そこは」
「どうしたものか」
慶彦は自然にだ。苦笑いになって言った。

「その辺りは」
「彼が気付くことを待つべきだろうな」
これが響鬼の解決案だった。
「女の子達のそれぞれの気持ちに」
「では千姫が選ばれないかも知れない」
「その可能性は否定できないね。君には悪いことだが」
「ははは、その時はその時だよ」
慶彦は今の響鬼の言葉には笑ってこう返した。
「宗朗が選んだ相手ならそれでいいさ」
「そしてそれは君だけじゃないか」
「千姫も。いい娘だ」
妹のこともだ、胸朗は話した。
「その辺りはわかっているさ」
「わかっているんだったら」
「確かに嫉妬して暴れることがあってもそれでも」
千姫はだ。どうかというのだ。
「宗朗が選んだことなら」
「受け入れてくれるか」
「うん、そういう娘だから」
それでいいというのだ。
「だから。全ては宗朗を信じるさ」
「それが君の考えか」
「そうだよ。それじゃあ」
「西瓜はこんなにあるんだ」
見れば数個分の西瓜が切られている。その西瓜の山を見てだ。

## 第七話　義の戦その十四

響鬼はその気さくな笑みでだ。慶彦にこう言った。
「二人だけで食べるのは勿体ないよな」
「二人だけで食べられる量でもないし」
「そう、だからな」
「うん、じゃあ皆を呼ぼう」
「そうしよう。しかし」
「しかし？」
「河豚鍋の後で西瓜というのはな」
それはどうかとだ。響鬼が今度言うのはこのことだった。
彼は笑ってだ。こう言った。
「冬と夏だな」
「それが共にある」
「あちらの世界じゃ技術の進歩でそれが味わえるようになったんだ」
「この世界でもだ」
「それは同じか」
「基本的な技術の進歩は同じだ」
こちらの世界にもテレビもあればクーラーもあるのだ。当然発電所もだ。違うのはまだ徳川幕府があり日本の文化が色濃いということだ。
だからだ。冬も夏もこうして同時に味わえるというのだ。それでだ。
慶彦はだ。こんなことも言った。
「昔は氷は夏に将軍や限られた者だけが食べていた」
「そうだったな。氷は滅多に手に入るものじゃなかった」
「しかし今は違う」
どう違うかというと。
「誰もが氷に甘い蜜をかけて食べられる」

「夏も冬もな」
「いい時代になった」
慶彦はそのことを笑顔で受け入れていた。
「徳川幕府は贅沢を独り占めにする趣味はない」
「むしろその逆だな」
「誰もが美味いものを食べられいい服を着られる」
「そうした国にしたいんだな」
「ひいてはそうした世界にな」
これは響鬼の世界の徳川幕府も同じだった。この政権は決して強欲ではなかった。むしろ節約を重んじ民生に心血を注いだ政権だったのだ。
それはこの世界でも同じでだ。次期将軍たる慶彦も言うのだった。
「だからこの世界を守りたい」
「それで戦うんだな」
「そういうことだ。では皆も呼んでか」
「この西瓜を食おう」
「千も呼ぶか」
慶彦はここでも妹のことを思い出し言う。
「そして宗朗も呼んでな」
「おいおい、また騒ぎを起こすつもりか？」
「だがそれがいい」
あえてそうするというのである。
「それを見るのもまた楽しみだ」
「それはちょっと趣味が悪いな」
「自覚はしている」
「それでもなんだな」
「そう。だから呼ぼう」
こうした話をしてだった。彼は実際に全員呼んでそうしてだ。宗朗と千姫、そして幸村達のやり取りを見て笑うのだった。兄の目で。

第七話　完

2011・9・21

# 第八話　信の激突その一

第八話　信の激突

響鬼達は暫くの間平穏に過ごしていた。しかしそれが永遠のものでないことはよくわかっていた。

だからだ。道場では常に鍛錬を積んでいた。その外でもだ。

響鬼達が修業を積んでいる。そのセコンド役でだ。

明日夢達もいる。彼はランニングの後で休憩に入った響鬼にタオルとお茶を渡してから尋ねた。

「この世界でも鍛錬は欠かせないですね」

「ああ、何時あの女が来るかわからないからな」

響鬼は汗を拭き茶を飲みながら応える。水筒に入れられている茶はよく冷えた抹茶である。それを飲みながら明日夢に応えているのだ。

「だからな」

「本当に何時来るかわからないですね」

「戦いに備えてな」

それでだというのだ。

「鍛錬は怠ったらいけないんだ」

「だから皆さんも」

「俺もそれは同じだ」

桐矢もいる。彼も汗を拭いている。そうして抹茶を飲みながら言うのである。

「鍛錬は積み重ねてこそだからな」

「京介もそう思うようになったんだ」

「鬼になってから、いや鬼を本気で目指すようになってから」

それからだというのだ。

「そのことがわかってきたんだ」

「だからだね」

「あの女は何時来るかわからない」
義仙のことも話すのだった。
「だから余計にだ」
「そうだ。その為にも気を引き締めてだ」
斬鬼も話す。
「鍛錬を積んでいかなければならない」
「また向こうから来ますかね」
轟鬼は整体にストレッチをしながら師に問うた。
「あの女は」
「間違いないな」
来るとだ。斬鬼も屈伸をしながら話す。
「あの女のこれまでの動きを見ると」
「来ますね」
「その時はおそらくは」
「天草四郎でしたね」
威吹鬼は立ち上がり背筋を伸ばしている。
「僕達の世界の天草四郎とは明らかに違いますね」
「女らしいわね」
朱鬼が言う。
「聞いた話によると」
「じゃあ柳生義仙と同じですね」
「ええ、女の侍よ」
朱鬼はあきらに答える。あきらもセコンドに徹している。そのうえで鬼達にタオルを手渡し茶を出している。そうしながら話の相手もしているのだ。
「そうした意味では幸村ちゃん達と同じね」
「そうなりますか」
「さて、問題は何時来るかだけれど」
「攻撃する側の有利なことはというと」
ここで言ったのは響鬼だった。もう汗を拭き終えている。

「あれだ。攻撃する場所と時間を自由に選べる」
「そのことですね」
「そうだ。これまでもそうだったな」
「はい、あの人はいつも急に来てでした」
「乾君達と埼玉アリーナで戦った時も」
魔獣達も出て来たあの時のことをここで話すのだった。
「それに俺達と橋の下で戦った時もな」
「後道場に攻めて来た時ですね」
「俺達は基本的に守る側だ」
迎え撃つ側だというのだ。彼等は。
「そのことでは向こうにかなり有利だ」
「こちらは向こうが何時何処にいるかわからないですね」
「魔化魅なら山や町にいるから俺達が出向いて退治する」
実際にそうしてきた。鬼の戦いとは本来はそうした形だった。
「しかし今回はそれが違う」
「敵が来てそれを迎え撃つ」
「ですよね。ただそれでも」
「俺達がこの道場にいればだ」
「敵は間違いなく道場に来ますね」
攻めて来る時はだ。そうだというのだ。明日夢はこのことはよく把握していた。
「それならですね」
「そう、万全の態勢で迎え撃つ」
響鬼の言葉が強いものになる。

## 第八話　信の激突その二

「そうすればいいんだ」
「普段の鬼の戦いとはそこが違うにしろですね」
「勝たないといけないのは同じなんだ」
あえて単純化してだ。響鬼は言ってみせた。
「戦いなんだからな」
「だからこそ毎日鍛えてですね」
「この世界でもな」
「はい、わかりました」
明日夢も頷く。そうしてだ。
彼等も鍛錬を続けていた。そうして義仙を待っていた。その中には慶彦もいる。彼も道場に入り敵が来るのを今か今かと待ち受けていたのだ。
そうした日が数日続く。その中で。
修業の合間にだ。宗朗が言う。
「そろそろかな」
「来るんですね」
「そう、来る」
こうだ。宗朗にも応える。
「それも今度は」
「二人で、ですね」
「多分その二人を倒したら」
それからもあるというのだ。
「スサノオが出て来るだろうね」
「そうじゃろうな。そのスサノオとやらもじゃ」
幸村も話に加わってきた。
「わらわ達の力を見たいというのならじゃ」
「人間を見たいのなら」

宗朗も考える顔になり素振りを止めて言う。
「僕達と直接戦うことも」
「考えていますね」
半蔵もそのことに気付いた。
「だとすると今度の戦は」
「続けての戦になりますね」
又兵衛が半蔵のその言葉に応える。
「柳生義仙と天草四郎」
「その後にスサノオとの」
「激しい戦いになるのは間違いないわ」
千姫も顔を険しくさせて述べる。
「これまで以上のね」
「けれどあれですわね」
兼続は今もあまり考えていない。
「勝てばいいだけですわ」
「御主は本当に気楽じゃのう」
そんな兼続の言葉を聞いてだ。幸村は呆れる顔で応えた。
「全く。楽な相手ではないぞ」
「そうよ。相手はスサノオ達だけとは限らないわ」
千姫もその兼続に言う。
「周りに何が出て来るかわからないわ」
「そういえば」
言われてだ。兼続もはたと気付いた。ようやく。
「響鬼さん達が仰っていたけれど」
「他の世界のよからぬ者達もいる」
ダルタニャンが言う。
「そうした連中が来ても」
「おかしくはないですわね」
「そうなるから」
「何かそういうことを考えるとじゃ」

幸村があらためて言う。
「この度の戦尋常なものではない」
「多くの世界が複雑に絡み合ったものだね」
宗朗はそこまで読んでいた。
「それだけに長く激しいものになるから」
「ううん、けれどやるしかないよね」
十兵衛は彼女らしく答えた。
「戦って勝つしかね」
「わたくしと同じ様なこと言ってますわよ」
兼続はそう言う十兵衛をじと目で見ながら幸村達に問う。
「この娘はいいんですの？」
「十兵衛は結果を残す」
幸村が言うのはこのことだった。

## 第八話　信の激突その三

「そこが御主とは違う」
「ではわたくしは結果を残さない」
「御主は笑いを取る場面以外で役には立たん」
「失礼ですわね。わたくしの如き猛者を捕まえて」
「何処が猛者じゃ」
そんなやり取りをしながらだ。彼等も修業に勤しんでいた。しかしだ。
慶彦の予想通りだ。数日後にだ。彼女達は来た。
いきなりだ。嵐が来た。そうして。
外からだ。あの声が聞こえてきたのだ。
「さて、今度こそ」
「来たな」
「はい」
響鬼と宗朗が互いに顔を見合わせて頷き合う。
「あの女だな」
「柳生義仙です」
そしてだ。もう一人だった。
「この凄まじい気配は」
「間違いありません」
「その天草四郎」
まさにだ。彼女だというのだ。
「その噂のその女が来たんだな」
「そうですね。では」
「全員で出よう」
慶彦が立ち上がって告げた。
「戦える者は全てだ」
「ここで戦力を出し惜しみしても何にもならん」

幸村もそれを言う。
「だからじゃな」
「その通り。今はあれこれ言うよりも」
それよりもとだ。慶彦も言いだ。
全員で道場を出た。するとその前にだ。
台風が来ていた。暗い雲の下に雨と風が荒れ狂っている。
その中心にだ。二人がいた。
一人が義仙だ。そして。
長い黒髪を髷にして後ろに束ね前髪立ちにもしている。
白いカラーのある紫の派手な着物と袴に白の十字の紋章の入った陣羽織を着ている。
妖艶な顔をして切れ長の目を光らせているこの女こそが。
女はこう義仙に問うた。彼女と同じく宙に漂いながら。
「さて。それではね」
「はい、それでじゃ」
「決戦になるわね」
こうだ、女は妖しい笑みで義仙に問うた。
「今度こそ」
「その通りです。ですから」
「私も出陣することになったのね」
「それで四郎様」
義仙はここで彼女の名を呼んだ。
「この度の戦では」
「サムライ一人残らず倒してね」
「この世界を破壊と渾沌で覆いましょう」
「ええ。それじゃあ」
こうした話をしながらだ。彼女達は台風の目の中に。
そのうえでだ。出て来た宗朗達を見ていうのだった。
「来たわね」
「待っていたわよ」

「御主がか」
幸村は天草を見上げて問うた。
「御主がその天草四郎か」
「そうだと言えばどうするのかしら」
「倒す」
幸村の返答は一言だった。
「決して逃さん」
「では宗朗」
千姫は薙刀を手に宗朗に声をかけた。

## 第八話　信の激突その四

「ここで一気に」
「うん、そうしよう」
「さて、ここで」
響鬼が言うとだ。そこにだった。
嵐の中から四方八方からだ。魔化魅達が出て来た。その彼等を見てだ。
響鬼が彼等を見ながら周囲に話した。
「さて、出て来たな」
「あれが噂のですね」
「そう、魔化魅だよ」
それだとだ。半蔵にも話す。
「数は百というところか」
「えっ、多いですわね」
その数を聞いてだ。兼続がうんざりとした口調で言った。
「百ですの」
「多いと思うか？」
「百といえば多いに決まっていますわ」
むっとしてだ。幸村にも言い返す。
「それだけいれば」
「やっぱり御主はアホじゃな」
そんなことを言う兼続にだ。幸村は呆れた口調で返す。
「百で多いとは限らんわ」
「それはどうしてですの？」
「わらわ達の強さを考えてみよ」
ここで言うのはそれぞれの質のことだった。
「百おってもわらわ達のそれぞれの強さならばじゃ」
「はい、どうということはありません」

「百いようが千いようが」
半蔵と又兵衛は幸村の言うことを理解していた。そのうえでの言葉である。
「我等ならです」
「倒せます」
「そういうことじゃ」
ここでまただ。幸村は兼続に言った。
「万で多いと言え。しかし万来てもじゃ」
「勝てるというのでして？」
「勝つのじゃ」
幸村は今は一言だった。
「よいな。それだけじゃ」
「万が来てもですの」
「一人一人の力でわらわ達に対抗できるのは」
義仙と天草を見ての言葉だった。
「あの者達だけじゃ」
「では周りのこの連中は」
見れば魔化魅の他にもいた。落ち武者の如き連中は。
「何ですの？」
「ふん、見たところただの亡霊じゃ」
具足を着けてはいる。しかし身体が透け朧な感じだ。それを見ればわかることだった。
「あの程度の者達造作をもない」
「はい、それではです」
「あの者達が我々が」
半蔵と又兵衛が彼等に向かうというのだ。
「ではお任せ下さい」
「そして直江、貴女もです」
半蔵が兼続に声をかける。
「あの者達に向かいましょう」

「わたくしお化けは嫌いですの」
こう言ってだ。兼続は拒否しようとする。
「ですからそれはですわ」
「我儘を言うでない」
しかしその彼女にだ。幸村が何処からか出してきたハリセンで彼女の頭を後ろをはたく。
「そんなことを言っておる場合か」
「うう、はたきましたわね」
「何度でもはたくぞ」
ハリセンを持ちながら兼続に言う。
「それこそな」
「何という奴ですの、わたくしは」
「まあまあ。今はね」
「見れば亡霊の数は増えてきてるし」
まだ言おうとする兼続にだ。威吹鬼と轟鬼が言う。

## 第八話　信の激突その五

「一緒に戦おう」
「そうしようね」
「そうですわね」
二人に穏やかに言われるとだ。兼続も。
憮然としながらも納得してだ。そうして応えるのだった。
「御二人となら一緒に」
「うん、戦おう」
「今からね」
こうしてだった。兼続も二人と戦うことを決めた。
そして斬鬼と朱鬼も言うのだった。
「では俺達もだ」
「亡霊達の相手をするわ」
こう言うのである。そのうえでだ。
威吹鬼と轟鬼、そして桐矢にだった。
「行くぞ」
「一万。大したことはないわ」
「はい、やります」
桐矢が応えてだ。そのうえでだ。
彼等はそれぞれ変身に入る。そして。
響鬼もだ。後ろにいる明日夢に言った。
「それじゃあな」
「はい、行ってらっしゃい」
「すぐに帰ってくるからな」
言いながらだ。その右手にあの鬼を出してだ。
そうしてだ。顔の前に掲げる。すると。
そこから鈴の音が鳴りだ。響鬼の身体が光に包まれ。
鬼になった。そしてさらに。

そこから紅の姿になる。紅の鬼の姿から宗朗達に言う。
「じゃあ行こうか」
「それ響鬼さんの全力ですね」
「切り札ってところかな」
その姿になっても響鬼は響鬼だ。気さくな返事は変わらない。
「これを出したってことはな」
「はい、本当にこの世界での」
「決戦さ。行こうか」
「よし、僕はだ」
響鬼に合わせる様にしてだ。義彦も言う。
彼はダルタニャンに顔を向けてだ。彼女に告げた。
「亡霊達の相手をしよう」
「そちらに」
「あの二人の相手は宗朗達がする」
それでだというのだ。
「ここは彼等に任せて」
「私達は亡霊を倒す」
「そうしよう。それではだ」
慶彦は剣を抜いた。長刀だ。
その長刀を右手に持ちだ。言うのである。
「徳川家次期将軍の剣を見せてやろう」
「お兄様、どうか」
「安心するんだ。僕は死なない」
気遣う妹ににこやかに返す。
「では千、御前はだ」
「はい、天草達を」
「討つんだ。いいな」
「わかりました」
妹とも言葉を交えさせてだ。そうしてだった。
彼はダルタニャンと共に亡霊達に向かう。そうしてその剣を振る

う。
残ったのは宗朗と響鬼、それに幸村と千姫、十兵衛だった。幸村と千姫は既に。
マスターサムライの姿になっているその美麗且つ艶やかな姿で言うのである。
「行くぞ、天草四郎！」
「そして柳生義仙！」
それぞれの得物を構えながらの言葉だ。
「うぬ等はここでじゃ！」
「必ず倒すわ！」
「そうしてだ」
十兵衛もだ。あの人格になっている。その人格で二人の魔性の侍を見上げて言うのである。

## 第八話　信の激突その六

「その後ろにいる者達を倒す」
「我等が主スサノオを」
「倒すというのに」
「造作もないこと」
十兵衛は凄みのある目に余裕さえ見せていた。
「今の我等にとってはな」
「言うわね。流石は生き返ってきた者」
「さらに力をつけて」
「覚悟はよいな」
十兵衛は彼等を見上げ続けたまま言う。
「容赦はせんぞ」
「いいわ。それではね」
「我等もまた」
彼女等もだ。宙からだ。十兵衛達に応える。
そのうえで戦おうとする。まずは響鬼がだ。
両手に持つ剣を構えたままだ。宙に舞う。それを見てだ。
宗朗がだ。彼に問うた。
「飛べたんですか」
「いや、跳んでいるんだ」
「跳んでいる・・・・・・」
「そう、俺は飛べないけれど」
それでもだというのだ。
「跳ぶことはできるから」
「そうですか。だから」
「そう、今は跳んで戦うさ」
実際にだ。空中を何段も跳びながら言うのである。
「これも工夫って奴かな」

「凄いですね」
「じゃあ行こうか」
跳びながらだ。宗朗達に言う響鬼だった。
「戦いに」
「うむ、ではな」
「今から」
幸村と千姫もだ。跳んだ。そして宗朗もまた。
何段にも跳ぶ。その彼を見て十兵衛が問うた。
「ぬしもマスターサムライになったのか」
「修業をしてね」
そうだとだ。宗朗は言葉を返した。
「それによってね」
「どうやら相当な鍛錬を積んできたな」
「僕も。戦うサムライだから」
それでだというのだった。
「だからね」
「そうか。流石じゃな」
「流石なんだ」
「御主は見事な侍になる」
十兵衛が見たところである。
「だからじゃ。必ずじゃ」
「僕自身がマスターサムライになることも」
「予想しておった。それではじゃ」
十兵衛は天草に向かう。そのうえでだ。
「御主はもう一人を頼む」
「うん、じゃあ」
「この女は我等三人で相手をする」
「うむ、行くぞ」
「不本意なのは事実だけれど」
それでもだとだ。幸村と千姫が言いだ。

「わらわ達三人で向かえば」
「そう簡単にはいかないわ」
こう言ってだった。三人でだ。
その天草に向かう。天草の相手はこの三人だった。
そしてだ。義仙にはだ。
宗朗、そして響鬼が向かう。響鬼は両手に剣を持ちそれを上から振り下ろした。だが。
その剣をだ。右の刀で受けたのである。
「何っ」
「見事な攻撃だわ」
攻撃を受けてからだ。義仙は言う。
「しかしそれでも」
「それでもだというのかい？」
「私を倒すまえには至らないわ」
「随分と自信があるんだな」
「如何にも。二人がかりであろうとも」
それでもだとだ。義仙は言う。そこにだ。
宗朗も来た。しかしそれもだった。

## 第八話　信の激突その七

彼は突きだった。しかしその突きは。
義仙は右の刀でだ。払って防いだのだった。二人の攻撃をだ。
彼女は防いでみせた。そうしたのである。そのうえで言うのだった。
「二人共この腕では」
「見事と言うべきだけれど」
それでもだというのである。
「私を倒すにはやや不足ね」
「くっ、今の僕の攻撃を防ぐとは」
「いや。確かに力はある」
響鬼は歯噛みしかけた宗朗に言った。
「けれどそれでも」
「それでもですか」
「そう、隙のない相手はいないさ」
こう言ったのである。
「そう、身体的な強さはあってもね」
「別の強さはどうかですか」
「そこをどうするかさ」
響鬼が今言うのはこのことだった。
「攻めるのならね」
「それじゃあ一体どうすれば」
「何か面白い考えを抱いているみたいね」
義仙も二人のやり取りを聞いて楽しげに述べる。
「私を攻めるつもりなのはわかるけれどどう攻めるのかしら」
「心をさ」
「心を？」
「そう、君の心を攻める」

響鬼はこう義仙にも話した。
「そうさせてもらおうか」
「私の心を」
「身体は強くとも心が弱い場合がある」
義仙に対してさらに言う。
「俺はそこを攻めようか」
「けれど響鬼さん」
やり取りの間にも攻防は続いている。宗朗も響鬼もだ。
義仙に攻撃を繰り出し続けている。しかしそれは。
彼女の両手の刀に防がれている。攻防はそのままだった。
だがその中でだ。宗朗は言うのである。
「心を攻めるといっても」
「できるかっていうんだね」
「はい、そう簡単には」
「できるさ。心といっても」
「心といっても？」
「心理戦を挑んだり精神的なダメージを狙うばかりじゃない」
「そうした戦いじゃなくてですか」
そう言われてだ。宗朗は。
戦いの中でだ。また響鬼に問うた。
「他の戦い方ですか」
「そう、じゃあ仕掛けるか」
話すその傍からだ。響鬼は。
一旦間合いを離した。そのうえでだ。
剣を収めてだ。太鼓を出してだった。音楽をはじめたのだ。
「音楽！？ですが」
「見ているんだ。音楽は剣と同じだけ強いからさ」
「剣と同じだけ、ですか」
「そう、強いんだ」
言いながらだ。太鼓での演奏を続けていく。

「だからこうして」
「それが心を攻めるということですか」
「如何にも。さあ」
言いながらだ。太鼓からだ。
音楽は聴こえて来る。その音楽は。
義仙の耳にも届く。その音楽を聴いてだった。
義仙の動きが止まった。そうしてだ。こんなことを言いはじめた。
「この曲はまさか」
「わかったか？子守唄さ」
「子守唄、やはり」
「いつきの子守唄。この曲を聴かなかった日本人はいないよな」
「そうですね。この歌は」
同じ曲を聴くだ。宗朗も言う。
「僕も昔母からよく」
「さあ、この曲を聴いてどう思う」
響鬼はさらにだ。演奏を続けながら義仙に問う。

## 第八話　信の激突その八

「尋常な気持ちではいられない筈さ」
「馬鹿な、私は」
「君は？」
「天草様の忠実な侍」
こう言ってだ。あくまで拒もうとするのだった。その音楽を。
「決して。この様な歌で」
「心が動かないか」
「動かないというのかい？」
「その通り。この程度では」
「嘘だな」
響鬼にはわかっていた。この辺りは人生経験からくるものだった。
「嘘を吐いたらいけないな」
「馬鹿な、私は決して」
「それはもう顔に出ている」
実際にだ。義仙のその顔を見ての言葉である。
「君にもあった。幼い頃が」
「じゃあ柳生義仙もまた」
「そう、天草四郎にしても」
彼女も同じだというのだ。隣で十兵衛達と戦う彼女もだ。
「同じく人間なんだ」
「妖人ではなくですか」
「妖しくても人間は人間さ」
響鬼は宗朗にこう話す。
「そう、心は人間なんだよ」
「心がそうならですか」
「それならその心をどうするか」
響鬼の太鼓は続く。

「そういうことだよ」
「思いきったやり方ですね」
「その思いきりが時として」
「状況を解決させるんですね」
「それは生きていればわかるさ」
そうなるというのだ。
「だから。やるのさ」
「そういえば何か」
宗朗は見た。その義仙を。
彼女は動きを止めていた。攻撃できなくなっていた。それでだ。
次第にだ。表情を和らげさせていき。
構えを解いた。それでこんなことを言った。
「私は」
「！？明らかに変化が」
宗朗もそれを見た。
「これは」
「そうか、地が出て来たんだな」
「本当に音楽でそうなるんですね」
「音楽は全ての母だからな」
「全てのですか」
「そう、だからこそ」
それでだというのだ。
「効くんだよ」
「まさか。柳生義仙が」
「戦いは武器で行うだけじゃない」
これも音撃戦士ならではの言葉だった。
「そして身体を攻めるだけじゃないんだ」
「心に訴えることもまた」
「それも戦いということさ」
「頭ではわかっていましたが」

宗朗もだ。そういうことはわかっていたのだ。
人間には心がありそれが最も重要だと。しかしそれでもだ。頭でわかっているだけだった。
だが響鬼はそれをしてみせた。その音楽でだ。それを見てだ。
彼はだ。思わずこの言葉を出した。
「見事です」
「おいおい、まだ終わってないぜ」
「まだですか」
「そうだよ、まだだよ」
太鼓はまだ続いていた。
「むしろこれからだからな」
「あの、柳生義仙はもう」
「あの娘だけじゃないさ」
義仙だけではないというのだ。響鬼は。
義仙とだ。天草を見て言うのである。

## 第八話　信の激突その九

「あの娘もだよ」
「天草四郎もですか」
「如何にも」
まさにだ。その通りだと言ってだ。彼は十兵衛達と戦っている天草を見た。見ればその彼女もだ。少しずつだが確かにだ。
その動きがだ。遅く緩やかになっていた。それはだ。
十兵衛達も感じ取ってだ。そして言うのである。
「そういうことか」
「音楽か」
「その力なのね」
「音撃戦士はそれぞれの楽器の力で戦う」
見れば下ではだ。実際に威吹鬼達がそれぞれの楽器の力で魔化魅達と戦っていた。それと共に悪霊達も退けていたのである。
その戦いを見てだ。幸村は言った。
「ああして音楽の力を使うやり方もあるのじゃ」
「音楽の力は確かに大きいわ」
そのことをだ。千姫も言う。
「けれど。響鬼さんのあの使い方は」
「意表を衝いたな」
「兵とは何か」
千姫は孫子の言葉も出した。兵法の話だ。
「軌道よ」
「敵の意表を衝くということじゃ」
「あの人はそれをしたというのね」
「いや、違うな」
「違う？」
「あれが響鬼の戦い方じゃ」

それがわかったのだ。幸村もだ。
「そうしてそのうえでじゃ」
「この戦いを終わらせるのね」
「響鬼の戦い方は見事よのう」
十兵衛も言った。その響鬼のやり方を見て。
「どうやらここでは我等の出番は終わった」
「私も琴なら使えるけれど」
千姫は何気に負けん気を見せる。
「けれどそれでもなの」
「うむ、ここは黙って見ておることじゃ」
幸村がその千姫を止める。
「響鬼の戦いをな」
「そうね。それじゃあ」
千姫も頷きだ。そうしてだった。
構えを解き天草を見る。その天草は。
戦いを行う手を止めていた。そしてだった。
その表情を穏やかなものにさせていき。遂に言うのだった。
「私は」
「どうしたんだい？」
「かつては人々の平和を安息を願っていた」
「だから立ったんだな」
「そう、立った」
こう言うのである。
「島原の民達を救う為に。だから戦った」
「しかし君は負けた」
「あの戦いで敗れた」
そ所謂島原の乱だ。この時代でもそれがあったのだ。
そこでも天草は敗れた。そしてそれからだ。
彼女は悪霊の如き存在となり徳川幕府と戦い続けた。何度も甦りだ。その中で彼女は本来のものを失いだ。今に至ったのだ。

そのことを思い出しだ。天草は言うのだった。
「そして私は」
「今は君の目指していたものはある」
「目指していたものは」
「そう、この世にある」
天草が民達の為に立ち上がり目指したものはだ。既にあるというのだ。
そのことを言ってだった。響鬼は。
その天草にだ。また言った。
「徳川幕府の世は続いている。しかし」
「切支丹は。虐げられていた者達は」
「切支丹は許され民は泰平と幸福を満喫している」
それがこの世界の今の日本だ。そのことは間違いない。
そのことを言いだ。響鬼は。
太鼓を再び叩く。そしてまた天草に言った。
「もう憎むことも怨むこともない」
「そうしたこともまた」
「そう、もういいんだ」
優しい声になっていた。
「だからもう」
「私は」
「休むといい」
言葉にある優しさがさらに深いものになっていた。

## 第八話　信の激突その十

「ずっと。静かに」
「もう。私は」
「戦う必要もない」
鬼の仮面からこのうえなく優しい言葉が告げられる。
「さあ、それじゃあ」
「ええ、じゃあ・・・・・・」
遂にだ。天草のその身体が。
柔らかい黄金の光に包まれていく。そうしてその中で悪夢から覚めた様な晴れやかな顔になりそのうえでだ。彼女は光の中に消えたのである。
それを見届けてだ。義仙は。
どうしていいかわからない顔になっていた。そうして出る言葉は。
「私は」
「暫く考えてみることだ」
響鬼は彼女にも言うのだった。
「自分がどうするかな」
「私自身が」
「そう。そうすればいい」
これが響鬼への義仙の言葉だった。
「ゆっくりとな」
「少なくとも御主のしがらみは消えた」
幸村もその義仙に話す。
「後は御主でこれからどうするか考えることじゃ」
「私自身が」
「うむ。そうせよ」
こう義仙に告げてだった。するとだった。
義仙は何処かへと去っていった。そのまま今は姿を消した。その

時には周りの戦いも終わっていた。魔化魅も亡霊達もいない。しかしだ。
響鬼は仲間達にだ。こう言ったのである。
「じゃあ第二試合だな」
「スサノオですね」
「そろそろ出て来るかな」
響鬼は宗朗に答えた。
「向こうも」
「さて、何の姿で出て来るかだな」
斬鬼はそのことを問題にしていた。
「こちらの世界で来るかそれとも」
「それともですよね」
「若しくは」
「俺達の世界の姿で出て来るか」
響鬼は威吹鬼と轟鬼に応えながらこんなことも言った。
「どうしてくるかだな」
「そうだね。君達も僕達も日本だ」
慶彦はこんなことを言った。
「日本なら。取るだろう姿は」
「あれかな」
響鬼はふとした感じで頭の中にあるものを思い出した。その思い出すものは。
「八つ頭の」
「あれですのね」
兼続も流石にこのことはわかるといった感じだった。
しかしだ。ここでこんなことを言うのが彼女だった。
「ナナマタのですわね」
「御主そのネタは止めるのじゃ」
幸村がその兼続にここでも突っ込みを入れた。

## 第八話　信の激突その十一

「だからあれじゃろ。青狸であろう」
「むっ、あの漫画だというのでして？」
「あれはネタにするのはまずいから止めるのじゃ」
「この世界でもあの漫画はあるのか」
「うむ、あの漫画はこちらの世界でも人気じゃ」
幸村は桐矢にも答える。
「とにかくじゃ。あのナナマタというのはじゃ」
「違うというのですわね」
「そうじゃ。頭がなまってマタとなったのであろう」
これが幸村の見立てだった。
「だから股とかそういうものではないのじゃ」
「そうでしたの」
「そうじゃ。しかしあれとなるとじゃ」
「これまで以上に厄介な相手になるわね」
千姫も言う。彼女達は既に着地している。そのうえで話をしているのだ。
その彼等のところにだ。不意にだった。
これまで以上にだ。恐ろしい気配が来たのだった。それは。
暗雲、まるでこの世の終わりを知らせるかの如きそれと凄まじい嵐、そして豪雨が来てだ。遥か彼方からそれが来たのだった。
それを見てだ。明日夢は言った。
「響鬼さん、あれはやっぱり」
「ああ。ある程度予想していたけれどな」
「そうですね」
「オロチだな」
響鬼は言った。今。
「ヤマタノオロチだ。間違いない」

「あのオロチもまたスサノオの分身だった」
ここで言ったのは朱鬼だった。
「そういうことだな」
「じゃあ。この世界での戦いも」
「オロチとの決戦だな」
「頑張って下さい」
明日夢は響鬼に告げた。
「この世界での最後の戦いを」
「行って来るな」
響鬼は左手で敬礼をするあの動作で明日夢に告げた。
「この最後の戦いもまた」
「待ってます」
「楽しみにしておいてくれよ。帰って来る時を」
「そうさせてもらいます」
「では行きましょう」
宗朗も言ってきた。
「この世界での決着を着けに」
「さて。ここまでの相手ならかえって楽しみじゃ」
十兵衛はその手に剣を構えてだ。オロチを見て笑みを浮かべる。
「思う存分やらせてもらうぞ。ところでじゃ」
「ところで？」
「御主は先程宙に留まって太鼓を叩いておったが」
響鬼が言うのはこのことだった。
「あれはできたのか」
「あの時は周りに特別な空間ができていたみたいでな」
「音楽でか」
「そうだ。音楽でだ」
それでだというのだ。
「音撃戦士の力でな」
「成程、そういうことじゃったか」

「ああ。音撃戦士の中でも響鬼の力は特別みたいでな」
「それ故か。わかったぞ」
「そういうことだな。けれど今度の戦いはな」
「今度の戦いはか」
「太鼓だけじゃなくて。とにかくあらゆるものを使って戦うことになるだろうな」
そのオロチを見ての言葉だった。かくしてだ。
まさに八つの山を越えるばかりの巨大な怪物が来てだ。戦士達の最後の戦いの相手となるのだった。

第八話　完

２０１１・９・２６

# 第九話　蛇の力その一

第九話　蛇の力

八つの頭に八つの尾を持つとてつもなく巨大な蛇が来た。その八つの頭がそれぞれ響鬼達を見下ろしていた。その頭の大きさもかなりのものだ。

そのオロチのそれぞれの頭がだ。こう彼等に言ってきた。

「もう説明は不要だな」

「その声だけでわかるさ」

響鬼がオロチの声に返した。その声にだ。

「スサノオだな」

「如何にも」

「スサノオがオロチになるとはな」

「ふふふ、意外に思うか」

「何だ？神話じゃ自分が倒したことになってる相手に思い入れがあるのか」

「蛇は龍」

ここでだ。スサノオはこう言うのだった。

そしてだ。彼はこうも言うのである。

「私は以前その力で君達と戦っている」

「ああ、俺はその時のことはよく知らないが」

「しかし知ってはいるな」

「実際に戦ってはいないだけでな」

響鬼はスサノオにこう返す。

「聞いてるさ。日本全土で戦った時だな」

「如何にも。しかも私は蛇は嫌いではない」

「ゲルショッカー、そしてデルザー」

今言ったのは斬鬼である。

「その紋章に使っていたな」

「そうだ。蛇は私の象徴の一つでもあるのだ」
「だからか」
「こうして蛇の姿を取ることにも何も思うことはない」
それでだというのである。
「これでわかってくれただろうか」
「そのことはわかった。しかしだ」
「この世界に干渉していることについてだな」
「やはりあれなんだな。この世界でも人間っていうのが見たいんだな」
「これはクウガにも言ったことだが」
そのことをだ。響鬼達にも話すというのである。そして実際に話すのだった。
「私は退屈を嫌う」
「だからなんだな」
「あらゆる世界の人間を見させてもらっている」
「では聞こう」
十兵衛がそのスサノオに対して顔を見上げて問うた。
「御主はこの世界を滅ぼしたいのか」
「君達のいるこの世界をということか」
「そうよ。それはどうなのだ」
「では君達はどう考えている」
逆にだ。スサノオがだった。質問に質問で問い返す形で仕掛けてきた。
「この世界を滅ぼしたいだろうか」
「戯言を言う」
十兵衛はすぐにこう返した。
「自分達がいる世界を滅ぼしたい者なぞ余程気が違うた者だけよ」
「そういうことだ」
「では我等がそれをどう凌ぐかをか」
「既に知っている筈だ」

「確かにな。うぬの話は聞いておる」
まさにそうだとだ。十兵衛も返す。そのうえでだった。
両手に持つ刀を構え。そうして言った。
「では行くぞ」
「では諸君」
響鬼、そして十兵衛達への言葉である。
「戦うとしよう」
「では僕もまた」
慶彦もだ。その剣を手にして述べる。
「この世界の為に戦おう」
「この戦いで敗れればじゃ」
幸村はそれを話す。
「我等に明日はない」
「確かに。それなら」
「行くぞ」
こう千姫に話してだった。彼等はそれぞれ武器を構えてだ。散開しオロチの八つの首を囲む。そうしてから響鬼がこんなことを話した。

## 第九話　蛇の力その二

「さて、と。相手がオロチなら」
「問題は八つの頭と巨大さですね」
「神話だと酔わせたんだがな」
「残念ですがお酒は用意していません」
「わらわ達が飲んだ」
「美味しかったわ」
幸村と千姫がそうだと話す。
「昨日全部空けてしまった」
「駄目だったかしら」
「いや。どのみちこのオロチには通じないだろうな」
響鬼は首を少し捻ってから述べた。
「だからあってもなくてもな」
「よかったんですね」
「別にな」
またこう宗朗に話す。
「相手の手がわかって乗ってくる様なことはしないからな」
「それでは面白くも何ともない」
実際にオロチの方からそれはないと返す。
「ましてや私の身体にはそうしたものは効果がない」
「やっぱりそうなのですね」
話を聞いて納得した顔で頷く半蔵だった。
「それならです」
「来るのだな」
「これを」
言いながらだ。スカートから無数の苦無を出してだ。
それをオロチに向かって投げる。それでオロチの頭の一つを撃つ。
だがその無数の苦無を受けてもだ。オロチの頭はびくともしなか

った。
「見事な攻撃だ」
「くっ、しかしそれでもですか」
「それでは私は倒せはしない」
「ではどうすれば」
「半蔵。小さい武具では意味がないわ」
言いながらだ。千姫が歯噛みする半蔵を見て話した。
「だからね。ここは」
「あの大型の手裏剣ですね」
「あれを使いなさい」
こう半蔵に告げる。
「それと私もいるわ」
「姫様、それでは
「いい？二人で一つの頭を攻めるわ」
家臣であり親友でもあるだ。半蔵への言葉だ。
「いいわね、それで」
「わかりました」
半蔵もだ。二人の言葉に頷いてだ。そのうえでだ。
二人同時に宙に跳びだ。左右からオロチの頭のうちの一つを狙う。
それを見てだ。
斬鬼もだ。轟鬼に話す。
「いいか、俺達もだ」
「はい、オロチの頭のうちの一つをですね」
「それを潰す」
こう弟子に話すのである。
「いいな、そうするぞ」
「わかりました。それなら」
「久し振りだな」
弟子の言葉を受けてだ。斬鬼は楽しげに言った。
「こうして御前と二人で戦うのも」

「嘘みたいです」
轟鬼もだ。心から笑って応える。
「こうして共に戦うのも」
「しかし今俺は実際にここにいる」
「嘘じゃないんですね」
「そして夢でもない」
それでもないと言ってだ。彼等もだ。師弟で向かうのだった。
それに威吹鬼と朱鬼も応えてだった。
「僕達もですね」
「いいな、行くぞ」
朱鬼はこう威吹鬼に話す。
「一人で相手にならずとも二人ならだ」
「はい、二人ならですね」
「向かうことができる」
「そうですね。それじゃあ」
「また鬼になることができた」
朱鬼は少し神妙な声になっていた。

## 第九話　蛇の力その三

「それならだ」
「戦うんですね」
「そうする。それではだ」
「はい、そうしてオロチを」
こう話してだった。彼等もだ。
オロチに向かう。慶彦とダルタニャンもだ。
「では僕達もだ」
「はい」
「一人で攻められないのは不本意だが」
それでもだというのだ。今は。
「仕方がない。オロチは手強い」
「はい、ですから」
「二人で戦おう」
こう話してだった。彼等もまただった。
二人で一つの首に向かおうとする。しかしだ。
慶彦はここでだ。ダルタニャンにこんなことも話した。
「しかしだ」
「しかし？」
「このオロチ。確かにかなりの強さだ」
そのことはもう言うまでもなかった。気だけでわかる。
その圧倒的な力を感じながらだ。彼は言うのである。
「勝たなければならない。今は」
「その通りです。ですから」
彼等もだ。戦うのだった。二人で。
ここまでは無事であった。しかしだった。
又兵衛は困った顔でだ。隣にいる兼続を見ていた。そうして言うのだった。

「全く」
「何ですの？何かありまして？」
「貴女、大丈夫ですか？」
「大丈夫ですわ。わたくしがいれば」
自分ではわかっていない。そのうえでの言葉だ。
「この程度の敵なぞ造作もありませんわ」
「又兵衛、どうしてもならじゃ」
ここでまた幸村が言う。
「オロチより先にその五月蝿いのを始末せよ」
「そうしてもいいのですね」
「別に構わん」
幸村は平気な顔で言い切る。
「頭が悪くて足手まといになるよりましじゃ」
「ちょっと、どういう意味ですの」
「言った通りじゃ」
兼続自身にも言い切ってみせる。
「御主は邪魔をするな」
「うう、私の力を甘く見ていますわね」
「甘く見てもらいたくなければちゃんとせよ」
幸村はとにかく普通にしろというのだ。
「オロチの相手をせよ」
「うう、二軍だからといって」
そうは言いながらもだった。兼続は又兵衛と共に戦うのだった。
そしてだ。幸村もだ。首の一つを見て宗朗に言う。
「ではじゃ」
「うん、残る首はね」
「三つじゃ」
「じゃあ後の三つは」
「一つはわらわが引き受ける」
幸村が一人で首を一つ引き受けるというのだ。

「そしてじゃ」
「僕も一つだね」
「そうするべきか」
「待つがいい」
しかしだ。ここでだった。
十兵衛が出て来てだ。そうして二人に言ってきた。
「わしがもう一つを引き受けよう」
「御主が一つか」
「宗朗は鬼の御仁と共に真ん中のと戦うがいい」
見ればだ。八つの首の中にとりわけ大きな首がある。その首を見てだ。十兵衛は幸村と宗朗に対してこう話したのである。
「よいな。あれがとりわけ手強いからな」
「ふふふ、それがわかるか」
「見ただけでわかる」
それで充分だとだ。十兵衛もオロチ、即ちスサノオに返す。

## 第九話　蛇の力その四

「だからこそじゃ」
「流石と言っておくべきか。それならばだ」
「行くぞ」
「わし等が二つ受け持つ」
一人ずつだ。そうするというのだ。
「わらわ達ならば何とかなるだろう」
「マスターサムライのこの力で、いや」
「勝ってみせる」
「御主のその力にだ」
「その考えだ」
オロチもだ。二人のその考えを聞いて述べた。肯定の言葉だった。
「さもなければ面白くとも何ともない」
「ふん、やはり御主は戦いから楽しみを見出すか」
「人を見ているのだな」
「何度も言おう。その通りだ」
スサノオ自身もこのことを隠しはしない。
「では来るのだ」
「行くぞ！」
「その人というものを見せてやろう」
二人は飛んだ。そのうえでそれぞれの相手となる首に向かい戦いに入る。そしてだった。
響鬼と宗朗は二人並んでだ。その一際大きな首に対して言うのだった。
「それならな」
「貴方の相手は僕達だ」
「見せてもらう」
オロチの、その一際大きな首が二人を見下ろして言ってきた。

「人というものをな」
「まあ幾らでも見せてやるさ」
「戦いを通じて」
「鬼、いや人のその力」
「そして心を」
「いいことだ。そうでなければ面白くとも何ともない」
戦いあってこそだというのである。オロチも。
こう話してだ。早速だった。その巨大な首が急降下してきて二人を襲う。
それをかわしてからだ。二人は言うのだった。
「成程な、この強さは」
「噂通り、いや以上でしょうか」
「前に戦った時より強くなっている」
かつてのオロチとの戦いを思い出しつつ。響鬼は宗朗に話す。
「それもかなりな」
「そうなんですか。じゃあこの戦いは」
「辛いものになるだろうな」
「そうでなくては何も面白くはない」
オロチは楽しむ声で述べてくる。
「違うだろうか。しかしだ」
「ああ。例えあんたがどれだけの力で来ようともな」
響鬼は再び頭をもたげてきたオロチのその首に対して返す。
「俺達は勝つからな」
「では勝ってみせるのだ」
楽しむ言葉だった。
「私も全力でやらせてもろおう」
「!?これは」
二人の周囲にだ。今度は。
赤紫の霧が出て来てだ。二人の視界を遮ってきたのだ。
周りが全く見えなくなる。その中でだ。宗朗は。

目を閉じた。そうして言うのである。
「霧なら。こうして」
「目には頼らないか」
「はい、見えないのなら意味はないですから」
それでだ。目を閉じたというのである。そしてそれを見てだ。響鬼は。
剣を構えてだ。動きを止めた。その彼等にだ。
霧の中からだ。オロチが言ってきたのだった。
「面白いな。狼狽はしないか」
「今更狼狽しても仕方がないからな」
響鬼が話す。
「むしろ狼狽しない方があんたにとってもいい筈だ」
「そうだな。私にしてもだ」
オロチも話してだった。彼は。
気配をそのままにしてだ。二人に言うのだった。
「君達の全力を見たい」
「狼狽していたら全力は出せないからな」
これまでの数多くの戦いからだ。響鬼も冷静さがどれだけ重要なのかわかっていた。熟知していた、そう言っても過言ではない程だ。
そのうえでだ。響鬼も宗朗も。
周囲のオロチの気配を探りながら。そのうえでだった。

## 第九話　蛇の力その五

「そこだな」
「そこか！」
それぞれ剣から炎、そして気を放つ。その炎と気でだ。
オロチの気配がした方を撃つ。すると。
忽ちのうちに霧が消えた。それを見てだ。響鬼は宗朗に告げた。
「霧が消えたぞ」
「そうみたいですね」
目を開けてだ。宗朗は自分でもそれを確めてから述べた。
「どうやら今の僕達の攻撃は」
「オロチのその首に当たったな」
「はい、そうですね」
見れば仲間達がそれぞれの首と戦っている。そしてだ。
彼等が戦っている首もだ。やはりいた。見れば額が割れている。
その額から一条の赤い血を流しながらだ。オロチは二人に言ってきた。
「霧は破ったか」１２２
「ああ、そうさせてもらった」
響鬼がオロチのその言葉に返す。
「この通りな」
「いい攻撃だ。しかしだ」
「まだだな」
「言うならこの霧は余興」
それに過ぎないと言うのだ。二人の視界を完全に遮ったそれですら。
「楽しみの中の一つでしかない」
「だからあっさりと諦めたか」
「それに過ぎないからこそ」

「そういうことだ。さて」
ここまで話してだった。オロチは今度は。
幾つにも別れてきた。そうしてだ。
一斉にだ。二人に襲い掛かって来た。だがそれを見てだ。
宗朗がだ。こう響鬼に言った。
「この首達はあれですね」
「そうだろうな。一つだけだ」
「はい、本物はですね」
このことをだ。二人はすぐに察したのである。
「ですがそれでも」
「攻撃力はあるな」
幻影の首にもだ。全てだというのだ。
「実体はなくても」
「そうですね。間違いなく」
「その通りだ。確かに私の実体は一つだ」
それはオロチも言うことだった。
「だがそれでもだ」
「幻にも攻撃力はあるんだな」
「その実体以外にも」
「私の力だ」
その自身のことをだ。オロチはさらに述べていく。
「実体に捉われないのだ」
「つまり。実体を倒さない限り」
「僕達は幻からも攻撃を受け続けるということか」
「さて、今度はどうする」
オロチは楽しげに二人に問う。
「それを見せてもらおう」
「まあこちらにしてもな」
響鬼が応える。
「手のうちは隠さないさ」

「駆け引きはしないというのか」
「いや、駆け引きになる前に」
それよりもだ。さらにだというのだ。
「あんたを倒させてもらうさ」
「だからか」
「ああ、だからな」
こう言ってだった。響鬼は宗朗に言った。
「悪いが今度もな」
「音楽ですね」
「俺はこれで戦うからな」
それでだとだ。実際に太鼓のバチを両手に出してだった。
そのうえでだ。宗朗に対して言った。

## 第九話　蛇の力その六

「これで叩けば幻なら消えるさ」
「消してそうしてですね」
「ああ、最後に残るのは実体だけだ」
「そしてその実体を」
「二人で倒すからな」
「わかりました。それじゃあ」
響鬼の言葉に応えそうしてだった。
響鬼は跳びだ。早速だ。
オロチの頭のうちの一つをそのバチで叩く。するとだ。
それだけでオロチの頭が消える。やはり幻だった。
そしてだ。宗朗もまた。
響鬼に続いて彼も跳びオロチの頭を斬る。するとだ。
それでまた頭が消えた。二人がオロチの首達の執拗な攻撃をかわしつつ。
そのうえで頭を一つ、また一つと打っていく。それをしてだ。
遂には全て消してしまった。残るは一つだった。そしてその最後の首は。
二人を見据えてだ。こう言うのだった。
「面白い。うって出るとはな」
「攻撃は最大の防御じゃないのか？」
「確かにな」
その通りだとだ。オロチ自身も認める。
「流石だ。私が見ようと思っただけはある」
「それでか」
「そうだ。それでだ」
こう話してだった。オロチは。
今度はだ。ただその首で襲い掛かる。そうしてだ。

二人を噛み潰さんとする。だがここでだった。
二人はそれぞれだ。渾身の力を込める。そのうえで。
「ではな」
「はい、最後の最後で」
「勝負を決めよう」
「これで」
こう言い合いだ。そのうえでだった。
二人は自分に向かって来る巨大な首に向かい跳んだ。そのうえで
まず宗朗が上から下に大上段で斬った。そこに。
響鬼もだ。オロチの頭にバチでこれでもかと打ち立てる。幾度も
幾度も。
そうしてだった。遂にだった。
オロチは動きを止めて。ゆっくりと崩れ落ちた。その頃には。
他の首も倒れていた。八つの首全てがだ。戦士達は勝ったのだ。
しかしここでだ。オロチ、敗れたそのスサノオが言ってきたのだ。
「見事だ」
「勝負ありじゃな」
「そうだ。この世界での戦いは君達の勝ちだ」
スサノオもだ。そのことを認めてきた。彼自身がだ。
「そのことは認めよう」
「では御主は去るか」
「そうさせてもらう。とりあえずは」
「とりあえずか」
「また君達の前にその姿を現す」
スサノオは述べていく。
「そうして永遠にだ」
「全く。諦めの悪い奴じゃのう」
「しつこいと嫌われるわよ」
幸村だけでなく千姫も言う。
「何はともあれ戦は終わったが」

「完全に終わりとはいかないのね」
「さて、次の世界ではどのライダー、そして戦士が私とどうして戦う」
そのことをだ。スサノオは楽しげに話していく。
「見せてもらおう」
「そうだな。次の戦ではだ」
十兵衛もだ。そのことについて話す。
「どういったものになるのか見せてもらおう」
「ではその時に再び」
それを言ってだ。スサノオは。
完全にその気配を消した。それと共にオロチの巨体もだ。何処かへと消えてしまっていた。そのうえでだ。残った戦士達は。
まずはだ。響鬼が話した。

## 第九話　蛇の力その七

「とりあえず戦いは終わったがな」
「はい、それでもスサノオとの戦いは続きますから」
「俺達は元の世界に戻るけれどな」
「僕達がどうするかですね」
「仮面ライダーの世界には行けるな」
ここで問うたのはだ。慶彦だった。
「それならだ」
「あちらの世界でも戦ってくれるんですね」
「そうして」
「約束は守らなくてはならない」
慶彦はこう威吹鬼と轟鬼に話す。
「それは権現様からの幕府の決まりだ」
「そうだったな。江戸幕府はな」
「そう、約束は守る」
そうだとだ。慶彦は斬鬼にも述べた。
「徳川幕府の名にかけて」
「よいのか？」
幸村が慶彦のその言葉に問い返す。
「わらわ達も共にいるのだが」
「別に構わない」
それもいいとだ。慶彦は幸村に応えた。
「相手は強大だ。そのことを言っていられる場合ではない」
「だからじゃな」
「うむ。それではだ」
「わかったわ」
ダルタニャンも応えてだった。
「それなら他の世界にも行って」

「戦いましょう」
半蔵が言った。こうした話をしてだった。
宗朗達はだ。響鬼にこう誘われたのだった。
「じゃあ俺達もお邪魔させてもらったしな」
「といいますと？」
「どうだい。これから俺達の世界に来ないか？」
笑顔でだ。彼等を自分達の世界に誘うのだった。
「そうしないか？」
「響鬼さん達の世界にですか」
「仮面ライダーの世界にな」
具体的にはその世界だった。
「来るか？どうする？」
「そうですね。それでは」
「あちらも世界も面白いようだしね」
宗朗と慶彦が応える。そして他の面々もだった。
それぞれ頷きだ。話は決まったのだった。そのうえでだ。
あの門を潜ってだ。その世界に来た。響鬼達にしてみれば戻ってきた。その戻って来た世界はというのと。
何の変わりもない。サルに行くと天道がいてだ。宗朗達を見て言った。
「あちらの世界の戦士達か」
「あれっ、この人って確か」
十兵衛がその天道を見て言った。彼は丁度サルのカウンターにいてそこでだ。昼食を食べていた。その天道を見てだ。彼女が言ったのである。
「確か執事さんだったんじゃ？」
「待て、違うぞ」
それは幸村が否定した。
「あちらの世界とこちらの世界はまた違う」
「ふうん、そうなんだ」

「それを言うと御主もそのうちうじゃうじゃと出て来るぞ」
「中身が同じ人が？」
「そうじゃ。言っている傍からな」
こう言うと早速だった。ダルタニャンが話してきた。
「心当たりがある」
「最高にあるにゃ」
そして彼女ににゃんぱいあが応えた。
「こういうことだな」
「けれどこれって凄く嬉しいことにゃ」
「ふむ。中身が同じ人ですか」
そんな彼等を見てだ。にゃてんしが話す。
「僕は果たしてそういう人に出会えるでしょうか」
「出会えるんじゃないのか？」
まさむにゃはいささか不機嫌ににゃてんしも応えた。

## 第九話　蛇の力その八

「ただな。御前とは全然違うからな」
「中身は同じでも人格は違いますからね」
「御前みたいな奴はそうそういないからな」
「それは少しやれやれですね」
宙に漂い座って煙草をふかしながらだ。にゃてんしは余裕の顔で述べた。
「しかし何はともあれまた一つの世界が救われました」
「さて、次の世界は何処かじゃな」
幸村がこのことを言った。
「どうも御主が行きそうじゃな」
「俺がか」
「そうじゃ。御主がじゃ」
こうだ。幸村は天道に話すのだった。
「出陣かのう」
「そうか。ではどういった世界に行ってもいいようにだ」
言いながらだ。天道はだ。
自分の食べているその鯖の煮付けに加えてだ。店の奥に注文した。
「豆腐を貰おうか」
「どういった料理がいいんだい？」
「麻婆豆腐だ」
それだというのだ。
「大蒜を利かせただ。俺のレシピで頼む」
「わかったよ。それじゃあね」
「さて、それではだ」
麻婆豆腐を注文しそれからだ。鯖の煮付けを再び食べながらだ。
彼は十兵衛を見てだ。こんなことを言った。
「君は同じか」

「同じって？」
「一人の為に戦えるな」
こうだ。彼女を見て言うのだった。
「そうした人間だな」
「十兵衛宗朗のこと大好きだよ」
実際にだ。にこりと笑ってだ。十兵衛はこう天道に応えた。
「だから宗朗の為にだったら何でもするよ」
「そうだな。そして君もそのことがわかっている」
「わかっているのでしょうか、果たして」
「甚だ疑問じゃな」
幸村は又兵衛にこう答えた。
「しかし天道という者、この者は」
「只者ではありませんね」
「平均よりかなり上の知力を持っておる」
まさにだ。そこまでだというのだ。
「だからじゃ。この者の言うことならじゃ」
「真実ですか」
「それを言っておくな」
それがわかるというのだ。こうした話をしてだった。
彼等は天道の話を聞いていた。その天道からだ。
響鬼達にも宗朗達にもだった。誘いがあった。
「それでは皆もだ」
「僕達もですか」
「豆腐を食おう」
こう誘いがあったのである。
「麻婆豆腐だ。いいだろうか」
「そうですね。それでは」
ここで宗朗は懐から何かを出してきた。それは。
小判だった。それを見てだ。天道が言った。
「それが君達の世界での通貨か」

「はい、そうです」
その通りだとだ。宗朗も答える。
「こっちの世界では使えませんか」
「高価だがそれでもだ」
使えないというのだ。そしてだ。
天道は無言でだ。札を出して言うのだった。
「今回は俺が支払う」
「すいません」
「金の心配はしなくていい」
金についてはだ。天道は実際に実に素っ気無い。

## 第九話　蛇の力その九

その素っ気無い口調でだ。彼は話す。
「充分にある」
「そうなんですか」
「これでも一応ゼクトの司令官の一人だ」
「えっ、まだ司令官だったんですか」
その話を聞いてだ。明日夢は目を丸くさせた。
「天道さんってゼクトの」
「というかゼクトってまだあったんですね」
あきらがこのことを驚いた顔で尋ねた。
「消滅していたと思っていました」
「存在していてスサノオと戦っている」
実際にそうだとだ。天道は明日夢とあきらに話した。
「ただだ」
「ただ、なんですか」
「そうだ。その体質は変わった」
そうなったというのだ。
「ネイティブもいなくなったしな」
「ネイティブ。根岸達だったな」
その彼等のことをだ。天道はここで思い出して述べた。
「思えば奴等も愚かだった」
「まんまとスサノオに乗せられていたな」
響鬼も彼等のことは聞いていた。それで言うのだった。
「奴等も気付かないうちにな」
「姿形は問題ではない」
天道は今度はだ。彼が身に滲みて知ったことについて言及した。
「大事なのは人間であるかどうかだ」
「今度はどういった戦いになってもだな」

「肝心なのはそれだ。例えどうした姿形でも」
天道その話は続く。
「心が人間ならば人間なのだからな」
「そういうことだな」
響鬼も天道の言葉に頷く。そのうえでだ。
彼はあらためてその天道にだ。こう尋ねたのだった。
「俺達が出ている間何かあったか？」
「スサノオか」
「ああ。あいつはこっちの世界で何をしたんだ？」
「門が出て来た」
「ああ、また出て来たんだな」
「学校の校門みたいな門がな」
それが出て来たというのである。
「そしてそこからワーム達が出て来た」
「今度はあの連中か」
「俺達が行く」
天道は自分からこう名乗り出た。
「次の戦いにはだ」
「ああ。それじゃあな」
微笑みだ。響鬼も応えてだ。
そのうえでだ。天道の隣の席に座って言うのだった。
「頼むな」
「ではな」
「俺達は侍の世界とこちらの世界を暫く行き来する」
そうして戦うというのである。
「そっちはその世界に専念してくれ」
「ではそうさせてもらう」
「ふむ。ではわらわ達もじゃ」
幸村もだ。思慮する顔になって述べる。
「二つの世界を行き来して戦をしていくか。いや」

「それ以上だね」
「他の世界も行き来することになるな」
そうするというのだ。考えをさらに巡らせてだ。
「そうしようぞ」
「そうだね。ではさし当たっては」
「にゃんぱいあの世界に行きましょう」
ダルタニャンが言う。
「そちらの世界のね」
「そうにゃ。ダルタニャンさんなら大歓迎だにゃ」
その彼女の横でにゃんぱいあが手放しで言う。
「一緒に世界を守るにゃ」
「にゃんぱいあって戦えまして？」
兼続はにゃんぱいあのその言葉に首を捻る。だがそれは彼女だけが思うことではなかった。

## 第九話　蛇の力その十

半蔵もだ。このことには流石に首を傾げさせて疑問を呈する。
「戦闘力はなさそうですが」
「いや、そういう問題ではない」
だが、だ。ここで慶彦が話す。
「大切なのは心だ」
「心がですの？」
「それの如何によってですか」
「そう。にゃんぱいあ君達にはそれがあるから」
だからだというのだ。
「戦える。確かに戦闘には加わらないが」
「では明日夢達と同じですね」
千姫がこのことを悟って述べる。
「戦闘には加わらず他のことで」
「戦いは戦闘に加わるだけじゃない」
慶彦にはわかっていた。次期将軍として。
「剣や槍の後ろでも行われる」
「まあそうですね。僕は喧嘩は嫌いですし」
にゃてんしはその慶彦の横で宙を飛び煙草をふかしながら言った。
やはりその姿勢は座っている様な、そうした姿勢である。いつもの。
「応援させてもらいます」
「そうですね。僕達には癒しの力があるそうですし」
茶々丸も話に加わってきた。
「ではそれによってです」
「まあ俺達が役に立つんならいいけれどな」
まさむにゃも異存はない。
「それじゃあな」
「あの、僕もですよね」

「当然です」
おどおどとして尋ねるカツオにはにゃてんしが彼の顔のまん前に来て黒いものを帯びた顔で言い切ってみせる。
「貴方も猫なのですから。むしろ」
「むしろですか」
「貴方は先陣になるべきです」
こう言うのだった。
「何故なら貴方は平凡な寝込んだからです」
「平凡だからですか？」
「そうです。平凡だからです」
ずい、とだ。カツオの前に出たまま話していく。
「凡人は僕達の礎にならないといけないのですよ」
「うう、何か怖いです」
「怖くなくなる方法はあります」
強引に言っていくにゃてんしだった。
「そうです。僕にです」
「にゃてんしさんに？」
「今日のおやつを御馳走しなさい。そうしれば怖くなくなります」
「こいつ何とかした方がいいじゃろ」
カツオを脅かしてカツアゲまがいのことをしているにゃんてんしを見ながらだ。幸村が周囲に尋ねる。
「というか本当に天使なのか？元とはいえ」
「あまりにも人格が問題になり天界にいられなくなったのでしょう」
又兵衛は事情を的確に見抜いていた。
「素行に問題があったかと」
「そうであろうな。こ奴はそういう奴じゃ」
「困ったことです」
「とにかくじゃ。おやつなら好きなだけある」
幸村はにゃてんしのカツアゲは止めさせた。
「だからじゃ。弱い猫をいじめるのはよせ」

「やれやれ。仕方がないですね」
全く反省していない態度でだ。にゃてんしは返す。
「それではです」
「そうじゃ。今度やったら承知せぬぞ」
幸村は釘を刺すことも忘れない。
「わかったな。これで」
「はい、わかったことにしておきます」
こうしたやり取りをしてだった。にゃてんしはとりあえずは大人しくなった。サルではそうしたやり取りが行われていた。その中でだ。

## 第九話　蛇の力その十一

天道がだ。デザートの豆乳アイスを食べてからだ。
そのうえでだ。周囲に言うのだった。
「ではだ」
「行かれるんですね」
「そうさせてもらう」
こう明日夢にも応える。
「それではな」
「はい。では頑張って下さい」
「何故ワームが出て来たのか」
天道は考える顔で述べる。
「その謎を突き止め。そしてだ」
「あちらの世界にもいるスサノオとですね」
「戦う。そして勝つ」
天道は一言で述べた。
「今度の戦いもな」
「校門っていうと」
ここで言ったのはだ。桐矢だった。
「学園が戦場になるか」
「一体どうした戦いになるんでしょうか」
「学園での戦い方も知っている」
天道はかつての戦いのことを思い出していた。
「何ということはない」
「そうですか。じゃあ」
「期待している」
「お祖母ちゃんが言っていた」
天道はここであの言葉を出したのだった。
「人の期待に応えるのは人として最高のことだとな」

「いいことを言われたお祖母さんですね」
宗朗はその天道に対して述べた。
「僕もそう思います」
「そうだな。だからこそだ」
「はい、だからこそですね」
「俺は人として最高のことをしに行く」
即ちだ。期待に応えるというのだ。
「そうしていく」
「では」
「また会おう」
宗朗達にも別れを告げる。そうしてだった。
天道はサルを出た。その背を見てだ。十兵衛が言った。
「天道さんって凄い人だよね」
「器はあるな」
幸村はここで響鬼を見て述べた。
「響鬼とはまた違った意味で」
「彼も多くのことを経てきたんだ」
そうだとだ。彼は話すのである。
「それでなんだよ」
「経験が人を大きくする」
今度は慶彦が言う。
「僕もそうした意味では経験を積まなければならないか」
「お兄様も変わりましたね」
千姫はその兄の言葉について問い返す。
「何か人として丸くなりました」
「ははは、僕も色々あったのかな」
「そう思います。それではです」
「食べましょう」
明日鬼がここで彼等に話す。
「この世界の食べ物を」

「後で和菓子も食べましょう」
あきらも笑顔で話す。
「立花のお菓子は絶品なんですよ」
「私達もお店なんです」
「父も一緒にいますから」
その立花姉妹の言葉である。
「サルの次は立花にいらして下さい」
「是非共」
「はい。じゃあそうさせてもらいます」
宗朗が笑顔で応えてだった。そのうえでだ。
彼等は一つの戦いが終わったことを祝ったのだった。そうして今は美味い食事を楽しんだのである。

第九話　完

２０１１・１０・２

# 第十話　バカとテストと仮面ライダーその一

第十話　　バカとテストと仮面ライダー

天道はまずはだ。加賀美新、交番にいる彼に話していた。彼は立ちだ。交番の椅子に座って丁度書類整理をしていた加賀見に話したのである。

彼は警官の制服を着ている。しかしその話を聞いてすぐにだ。書類に書くその手を止めてそのうえで顔を強張らせて天道に応えた。

「じゃあその校門を潜ってなんだな」

「あちらの世界に行く」

「そのワームがうじゃうじゃ出て来る世界にか」

「今から行く」

天道は加賀美にこう言い切った。

「俺はだ」

「それで俺も誘いに来たんだな」

「嫌なら別にいい」

ここでは素っ気無く返す天道だった。

「しかしだ。来たいのならだ」

「わかってるさ。俺も仮面ライダーだからな」

「来てくれるか」

「ああ。あと探偵事務所の矢車さんと影山さんに連絡して」

加賀美はまずこの二人の名を挙げた。

「あとはゼクトの」

「田所司令達には俺が話しておく」

「ああ、頼めるかそっちは」

「御前は神代を頼む」

神代剣については加賀見だった。

「そして風間だが」

「何だ？探しているみたいだな」
名前が出るとすぐにだった。交番に風間大介が入って来た。相変わらずその手にはバイオリンがある。そしてゴンも一緒だ。
その彼がだ。天道に対して言ってきたのだ。
「噂がしたんでこの交番に来たんだがな」
「相変わらず勘がいいな」
「仮面ライダーだからな」
だからだとだ。風間は天道に返す。
「勘がよくないと死ぬからな」
「その通りだな。戦いでな」
「門に行くんだな」
風間からだ。門について言及してきた。
「あの学校の校門みたいな門にか」
「それも知っているのか」
「さっき戦ってきた」
丁度その門のところでだ。そうしてきたというのだ。
「それで知った」
「出て来たのはワーム達だな」
「それとネイティブだな」
やはり彼等だった。しかしだ。
風間はここでだ。天道達にこんなことを話した。
「連中には実体がなかったな」
「実体がない」
「というと」
「何か数字が出てそれを零にすると倒せた」
そうなったというのである。
「俺は何千点かあったけれどな」
「何か違うな」
「テストか。学校の問題を解かさせられた」
風間は今度はこんなことをだ。天道と加賀美に話す。

「それで勝った」
「あの、それ何なんだ？」
話を聞いた加賀美はだ。眉を顰めさせて風間に言い返した。
「学校のテストで敵を倒す」
「雑魚ばかりだったので何ということはなかった」
風間はここでこんなことも言う。
「これでも学校の成績はよかった」
「当然だな。仮面ライダーには知力の必要だ」
天道はこのことには冷静に返した。
「学校の勉強位は何でもない筈だ」
「まあ俺も高校までの勉強なら」
どうかとだ。加賀美も話す。
「いけるしこれでも警官の試験はパスしてるし」
「今は警視正だったか」
「そこまで昇進したさ」
そうなったとだ。彼は天道に話す。
「仮面ライダーとしてだけでなくペーパーテストでも成績出してな」
「では学校の勉強も問題はないな」
「ああ、特にな」
そうだとだ。加賀美は天道に答える。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその二

「けれど何で勉強なんだ？」
「あちらの世界の戦いのルールだな」
天道はこのことについても冷静に述べる。
「それでそうなっている」
「何か変わった世界だな」
「その世界それぞれのルールがある」
天道の冷静なコメントは変わらない。
「中にはそうした戦いのやり方もあるだろう」
「意味がわからないな」
「行けばわかる。それではだ」
「ああ。まずは仮面ライダーを集めてか」
「その世界に行く」
天道はまた加賀美に話した。
「いいな」
「さて、それじゃあな」
風間は二人の話がまとまったのを見てだ。それからだった。
ゴンに顔を向けてだ。こう尋ねたのである。
「ゴンはどうするんだ？」
「その世界に一緒に行くかどうか？」
「ああ、俺とな」
こう彼女に尋ねたのである。
「それはどうするんだ？」
「一緒に行っていい？」
ゴンは顔を見上げてだ。風間に逆に尋ね返した。
「そうしていい。私も大介と一緒に」
「勿論だ」
風間は微笑んでゴンにこう答えた。

「だから尋ねてるんだからな」
「そう。じゃあ」
「行くか。その世界に」
「あの世界でも一緒にね」
こう話してだった。二人も決めたのだった。そうしてだった。
風間の他にもだ。ライダー達が集められる。
矢車想に影山瞬もだ。天道達のところに来た。彼等は既に門のところにいる。
その校門そのものの門を見つつだ。矢車は言うのだった。
「この門の向こうにワームがいるんだな」
「そうだ」
その通りだとだ。天道は矢車の問いに答えた。
「スサノオもだ」
「成程な。事情はわかった」
「じゃあ兄貴、行こうか」
影山は早速矢車に言った。
「この校門の向こうに」
「そうするか。向こうにスサノオがいるんならな」
「では俺も行こう」
神代も来た。爺やも一緒だ。
「あちらの世界にだ」
「では坊ちゃま」
爺やもだ。その神代に対して言う。
「爺も共に」
「頼む。それではな」
こう話してだった。彼等もそこに来たのだ。そうしてだ。
田所修一が率いる黒崎一騎、織田秀成、大和鉄騎も来た。彼等もだった。
「ゼクトとしてもだ」
「参加してくれるんですね」

「そうさせてもらう」
こう加賀美に話したのは田所だった。
「スサノオは放ってはおけないからな」
「有り難うございます。それじゃあ」
「ではだ」
田所は後ろに控える三人にも声をかけた。
「今から行くぞ」
「わかりました」
まずは黒崎が答える。
「では我々も」
「さて、それではですね」
「いよいよ別の世界ですね」
織田と大和も言ってだ。彼等も前に出るのだった。
ここでだ。神代がこんなことを爺に尋ねた。
「爺、ミサキーヌだが」
「岬様もすぐに来られます」
「そうか」
そのことを聞いてだった。神代は安心した微笑みを浮かべ。そのうえでこう言うのであった。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその三

「これで何の心配も無用だな」
「坊ちゃま、ではあちらの世界でも」
「安心して戦わせてもらう」
そうするというのである。
「これで何の憂いもない」
「安心していいな」
「どうした戦いになるかわからないが」
それでもだとだ。天道も前に出る。その横には日下部ひよりがいる。
ひよりはその兄を見ながらだ。気遣う様にして問うた。
「あちらの世界でも戦うのだな」
「そのつもりだ」
こう話すのだった。
「面白い戦いになりそうだ」
「僕も行こう」
ひよりもだ。行くというのだった。
「何か心配になった」
「心配か」
「戦いの度に心配になる」
本音を話していく。少しずつ。
「僕の為に戦ってくれている人が。これは」
「自然なことだ」
天道は妹のその感情をだ。そうだというのだった。
「人は誰かを。何かをいつも想うものだからな」
「だからか」
「来てくれるのなら来てくれ」
天道からもだ。ひよりに告げた。

「それではな」
「わかった。ではそうさせてもらう」
こうした話をしてだった。遂にだ。
仮面ライダー達はその門を潜り戦場に赴く。別の世界の戦場に。
文月学園。今日もこの学園では騒動が起こっていた。
二年F組、このクラスはただひたすら粗末だ。教室にあるのは蜜柑のダンボール箱、ちゃぶ台はもうなくなっている。そしてクラスの窓はあちこちが割れて隙間風が入ってきている。
しかも床はぼろぼろで壁も古い。ここだけ木造建築になっているのが不思議だ。
その二年F組の中でだ。長身で赤髪を立たせた精悍な顔立ちの赤い眼の若者がクラスの面々に問うていた。無論制服は文月学園の洒落たブレザーだ。この学園のブレザーは青いズボンにダークブラウンとゴールドの配色になったものだ。何処か軍服を思わせる。
その軍服の彼がだ。腕を組んでクラスメイト達の前に立って言うのだった。
「この辺り異常と言うしかないな」
「全くじゃな」
緑の目にブラウンのショートヘアの中性的な面持ち、少女にしか見えない顔立ちだ。ただしはいているのはスカートではなくズボンだ。
その性別がわからない学生がだ。赤髪の男、坂本雄二の言葉に頷く。その名を木下秀吉、一応男になってはいる。
「何じゃあの緑の得体の知れぬ者達は」
「少なくとも人間ではない」
雄二はこのことは断言できた。
「しかも試験召喚システムも使ってくる」
「あれがわからぬ」
秀吉も腕を組んで言う。
「先生がおらぬのにな」

「しかも校長も知らないときている」
「おまけに負ければそれだけで補習だ」
「ただ緑の奴等は何でもない」
その連中はだというのだ。
「時々出て来る様々な色の化け物共が問題だ」
「あれ、おかしい・・・・・・」
青がかった灰色の髪と目の抜け目なさそうな小柄な少年である。土屋康太、仇名をムッツリーニという。その手にはカメラがある。
「本当に急に出て来る・・・・・・」
「手掛かりは掴めたか？」
「全く・・・・・・」
ムッツリーニはこう雄二に答える。
「何時何処から出て来るのかさえ」
「奴等が出て来てから一週間になる」
雄二は腕を組んだまま言う。
「その間俺達は学園にいる間はひっきりなしに奴等の奇襲を受けている」
「どのクラスも手当たり次第に」
「わからん。何者で目的が何かもな」
雄二はこう言って首を捻る。
「うちの学園の生徒でもないしな」
「生徒の姿をしておってもいきなり変わって襲い掛かって来る」
秀吉も雄二と同じく首を捻る。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその四

「校長まで襲われているからな」
「鉄人も・・・・・・」
ムッツリーニはぽつりと呟いた。
「流石にこの二人はやられなかった・・・・・・」
「伊達に教師やってる訳じゃないな」
雄二も二人を認めることは認めていた。
「だが。それではっきりしている」
「あの連中は校長の差し金ではない」
「最初から校長のやり方じゃなかったしな」
「全くじゃ。何なのじゃ」
秀吉も誰が仕掛けてきているのかわかりかねている。
「姉上もこの前危うくだったしのう」
「ああ。Ａクラスの奴等も結構やられてるしな」
「滅茶苦茶強いのよ、色が違う奴等が」
赤がかった長い茶色の髪を黄色のリボンでポニーテールにしている。目は緑で何処か猫を思わせる顔立ちをしている。胸が薄い。島田美波、このクラスで数少ない女子である。尚ドイツからの帰国子女だ。
「うちも一回負けかけたしね、数学で」
「島田が数学でやられるんだからな」
雄二もこのことには驚きを隠せない。
「これはかなりだな」
「とにかくじゃ。緑の虫と人を合わせたものはまだよい」
秀吉がまた言う。
「問題はあれじゃ。あの色も形も違う奴等じゃ」
「しかも速い・・・・・・」
ムッツリーニはこのことも言う。

「だから余計に手強い」
「こっちが何かしようにもいきなり出て来るからね」
美波もたまりかねた口調で話す。
「奇襲とかも受けるし」
「全く何者なんだ」
流石の雄二もだ。たまりかねた口調になっている。
「お蔭で学園自体が滅茶苦茶になっているぞ」
「怪人でしょうか」
ピンクのふわふわとした長い髪に青いおっとりとした目の娘だ。胸がやけに大きい。このクラスのもう一人の女子生徒である姫路瑞希である。
その瑞希がだ。こんなことを言いだしたのである。
「そういう感じですよね」
「否定したいがな」
雄二の言葉がここで苦々しいものになった。
そのうえでだ。彼はこうクラスメイト達に述べた。
「残念ながら俺もだ」
「否定できぬか」
「できる奴がいたら言ってみてくれ」
雄二はこうまで言う。
「いたらな」
「残念じゃがな」
秀吉もだった。難しい顔になって述べる。
「どうしてもな」
「否定できない・・・・・・」
「あの外見もあるからね」
ムッツリーニも美波も同じだった。どうしてもだ。
彼等は否定できなかった。その謎の緑の者達が怪人だとだ。
その証拠にだ。雄二はこのことに言及した。
「何故瞬間移動ができる」

「それが一番謎ですよね」
「奴等には超能力がある」
雄二は瑞希に答える形で言い切った。
「通常の人間にはない力がだ」
「それに何でうちの学園にこだわるのかしら」
美波も今は首を傾げさせている。
「うちの学園に連中が何か興味を惹くところがあるのかしら」
「ええと。うちの学園は」
瑞希は美波の言葉を受けて考える顔になりだ。
そのうえでだ。こう述べたのだった。
「試験召喚システムですよね」
「あのシステムが最大の特徴よね」
「それを狙ってでしょうか」
「そうなのかしら」
瑞希も美波も話していく。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその五

「それで私達に攻撃を仕掛けている」
「それで？こんなにしつこく攻めてくるって」
「待て、それならシステムそのものを盗めばいいぞ」
秀吉は二人の女子にこう突っ込みを入れた。
「あのシステムをどうして悪用するかはわからぬがな」
「そう、俺達を相手にする必要はない・・・・・・」
ムッツリーニも言う。
「ハッキングなり何なりして」
「しかもだ」
ここでまた言う雄二だった。
「俺達をかなり執拗に攻めてきているが」
「あの能力ならうち等すぐに皆殺しにできるわよね」
「しかし同じ土俵に上がってきて戦ってきている」
その試験召喚システムを使ってである。
「あの化け物そのもの能力をシステムに反映させてだ」
「考えれば考えるだけわからぬな」
秀吉も腕を組んで言う。
「だからあの連中は何なのじゃ？何者で何が目的なのじゃ」
「怪人ならそうした組織がバックにあって」
瑞希は彼女が子供の頃から観ているアニメや特撮の番組から話す。
「首領みたいなのがいますけれど」
「首領か。普通ならあの校長だがな」
雄二はここでも校長のことを話した。
「どう考えてもあの校長のやり方じゃないし襲われるにしてもな」
「自作自演じゃないわね」
美波はそのことはすぐに否定した。
「それにしては妙にね」

「そう、全く違う」
ムッツリーニがまた言う。
「何かが決定的に・・・・・・」
「俺も何度も考えてシュミレーションをした」
雄二は幾度もそうして答えを出したというのだ。
「校長か学園内の誰が黒幕か」
「あそこまでやれる奴はおらんな」
秀吉は腕を組んだままで述べる。
「校長にしてもわし等をけしかけるにしてもじゃ」
「あまりにも過激だ」
雄二がまた言う。
「しかも校長は一人で校長室にいる時にも何度も襲われているな」
「あっ、自作自演なら」
瑞希は雄二の話からあることに気付いた。
「誰かがいる時に仕掛けますよね」
「そうだ。だが校長も他の先生達も隙を見せれば襲われる」
「何なのじゃろうな」
難しい顔でだ。また言う秀吉だった。
「誰も殺さぬしのう」
「裏にいる奴は何を考えている」
雄二のその目が鋭くなった。
「いるかどうかもわからないがな」
「絶対にいる・・・・・・」
ムッツリーニは断言した。
「あの連中の黒幕は」
「いるにしてもどうして引き摺り出すかだな」
雄二は黒幕をどうするかについて考えだした。
「しかしそれもだ」
「手がないわよね」
「ああ。そもそもどうした組織なのかもわからないかもな」

「種族とかでもですよね」
瑞希はまたアニメや特撮から考えて言及した。種族だと。
「結局何なのかわからないと」
「どうにもならない。対処不能だ」
雄二も今は流石にお手上げだった。しかしだ。
ここでだ。ふとだ。秀吉が言ったのである。
「そういえば明久は何処じゃ」
「ああ、あいつか」
「うむ。午前中はいたが早退したのか？」
「早退はしていない」
雄二はそのことは否定した。
「ただ。連中に襲われてだ」
「補習か」
「今回はとりわけ念入りにやられたからな」
それでだ。今はというのである。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその六

「鉄人にみっちりとやられている」
「その鉄人にしてもよね」
美波はすぐにこう察した。
「連中に襲われたんでしょ」
「緑の連中だけだったから鉄人は平気だった」
流石にだ。鉄人は雑魚にはやられなかった。
「ただな。明久はな」
「やっつけられたのね」
「ああ。完璧にな」
倒されたというのである。彼等にだ。
「それで鉄人の補習行きになった」
「あ奴にとっても災難じゃな」
秀吉は今は明久に同情していた。
「昨日も補習じゃったしな」
「明久だけじゃない・・・・・・」
ムッツリーニはぽつりと言った。見ればだ。
F組の生徒の数が普段より少ない。それについてだ。
彼はだ。こう言ったのである。
「皆もかなり」
「やられてるからね」
「とにかくどのクラスも滅茶苦茶だ」
「この状況をどうするか」
「俺が思うにだ」
どうかとだ。雄二はここで言った。
「今はどのクラスもばらばらでいる状況じゃない」
「一つになるのじゃな」
「少なくともクラスごとの試験召喚戦争はしている状況じゃない」

「それは流石に今は起こっておらんな」
そのことは秀吉も言う。
「どのクラスもそれどころではない」
「そういうことだ。だからだ」
どうかというのだ。今は。
「A組からF組まで全部のクラスを併せてあの連中と戦うべきだ」
「それでどうにかする」
ムッツリーニはぽつりと呟く感じで述べる。
「それが大事・・・・・・」
「戦力は集結させてこそ戦力だ」
雄二は今は戦略家になっていた。彼の真骨頂だ。
「鮫も相手が自分より多いと襲い掛かっては来ないからな」
「少なくとも連中の奇襲は避けられるわね」
常に多く集っていればそうなるとだ。美波も気付いた。
「一人か二人の時に皆襲われてるから」
「そうですよね。ただ気になるのは」
瑞希はおっとりとした口調だが鋭く指摘した。
「あの人達？ですけれど私達がおトイレの時や着替えている時は来ませんよね」
「んっ！？」
「そういえば確かに」
「その時は」
「一度も」
他の面子も気付いた。瑞希のその言葉で。
「来るのはこちらが勝負できる時だけ」
「あくまで」
「そうよね」
「普通そういう時にこそ狙う筈だな」
雄二は戦術、戦略的観点から述べた。
「丁度いい狙い目だからな」

「しかしそうした時には来ぬ」
秀吉はここでも腕を組んで述べる。
「何かルールでもあるのか。連中に」
「少なくとも知性はあるわよね」
美波はこのことを察しながら述べた。
「外見は人間の姿で来るしね」
「そう、多分明久よりずっと頭がいい・・・・・・」
ムッツリーニは何気に酷いことを言う。
「あの連中は人並の頭はある」
「だからああして勉強もするんですね」
瑞希は試験召喚システムから考えていた。
「外見以外は人間に近いですよね」
「こうして考えれば考える程訳がわからないな」
雄二もいい加減考えが煮詰まってきた。
「何者なんだ、本当に」
「ただいまぁ・・・・・・」
彼等がそんな話をしているとだ。やや小柄で薄い茶色の髪を裾のところだけ刈り上げた少年が部屋に来た。人懐っこく実に気さくな感じがする。目は鳶色だ。彼の名を吉井明久という。その渦中の人物だ。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその七

その明久がふらふらになってクラスに入って言うのだった。
「鉄人の補習やっと終わったよ」
「ああ、生きていたのか」
「生きていたのかって何だよその言い方」
明久は何とかといった感じでクラスに入ってから雄二に言い返した。
「今日二回目の補習だってのに」
「一日二回も補習なぞ普通はないぞ」
秀吉がその明久に突っ込みを入れる。
「御主はどれだけあの化け者達に襲われておるのじゃ」
「もういつもだよ」
学校にいる間常にだというのだ。
「登下校の時も来るしさ。家の中にいる以外はいつも」
「そうだ。制服を着ている間はいつもだ」
雄二がここでまた気付いた。
「あと体育の授業中もだがな」
「いや、僕何か特に狙われてる気がするんだけれど」
「その理由はわかる」
「それはどうしてなんだよ」
「馬鹿だからだ」
雄二は明久に対してきっぱりと言い切ってみせた。
「それ以外に何か理由があるか」
「馬鹿って。馬鹿って言う奴が馬鹿なんだぞ」
「それじゃあ補習はせめて一日一回にするようにしろ」
「今日はこれでも少ない方なんだよ」
明久は言い訳にならない言い訳に入った。
「昨日なんて五回もだったし」

「五回って何なのよ」
美波はその回数に思わず呆れ果てた。
「二回でも凄いっていうのに」
「だってさ。あの緑色のがいつも集中的に来るから」
明久はとにかく狙われているというのだ。
「もうこっちもへとへとだよ」
「本当に訳のわからぬ奴等じゃ」
秀吉はまたこんなことを言った。
「少なくともこんなことが続くとたまったものではない」
「全くだよ。そういえばさ」
ここで明久は話題を変えてきた。その話題は。
「何か校長室に何人かお客さんが向かっていたよ」
「お客さん？」
「そう、お客さんがね」
また言う明久だった。
「何か来てだよ」
「それ誰ですか」
「何かかなり背の高い人達ばかりだったよ」
明久は自分の席に座りながら瑞希に述べた。
「殆どの人が雄二位だったかな」
「それはかなり高い・・・・・・」
「うん。如何にも格闘技してるっていうかそんな感じの人達だったよ。中には鉄人より怖そうなのもいたし」
「誰、それ・・・・・・」
ムッツリーニも話を聞いて首を少し捻る。
「鉄人より怖そう」
「とにかくそういう人達が来てたよ」
こう話す明久だった。
「一体何なのかな」
「さてな。少なくとも今は何とも言えないな」

雄二も判断材料が少なくはっきりとしたことは言えなかった。
しかしだ。このことは言えたのだった。
「だが今はクラス一つ一つでは駄目だ」
「全部のクラスを合わせてじゃな」
「連中に対抗するしかないわね」
「ああ、結局はな」
秀吉と美波に話してだった。雄二はまずは戦略を練っていた。そうしたのである。
皺のある顔に薄茶色の長い髪のややきつめの顔のスーツとズボンの女にだ。天道達は会っていた。そうして彼女に話すのだった。
「少しこの世界について調べさせてもらったが」
「何だってんだい？それで」
「この世界にワームが来ているな」
天道はこうだ。自分の前にいる文月学園の校長に話したのである。彼等は今は校長室にいる。その広く独特な機能性を見せている部屋にだ。
そのうえでだ。校長室に立っている校長に話したのである。
「そしてネイティブが」
「ワームやネイティブってのは知らないがね」
校長はまずはそうした者達は知らないと述べた。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその八

それからだ。こう言ったのである。
「今この学園全体にちょっかいをかけてる緑の化け物達がいるがね」
「それだ」
矢車がまさにそれだと言った。
「その連中だ」
「あの連中の名前がワームだってのかい」
「そしてネイティブだ」
矢車はまた校長に言った。
「まさにその連中だ」
「成程ね。あの連中には違いがあったんだね」
「そうなった経緯が違うだけで大体同じ存在だ」
天道は校長にわかりやすく話した。
「そこから脱皮だな。それをしてだ」
「別の姿になるんだね。色々な生き物と人間を合わせた形の」
「それも知っていたか」
「あたしも何度も戦ってるからね」
校長は不敵な笑みを見せて天道に話す。
「よく知ってるさ」
「そうか。では今この学園はかなりか」
「ああ、戦争だよ」
最早そうした状況だというのだ。校長はこう話す間も不敵な笑みを崩さない。
「まさにね」
「なら話は早いな」
「そうだね。それであんた達はあれだね」
「そうだ。奴等と戦ってきた」
その通りだとだ。天道は話した。

「もっとも俺達の世界ではそちらの戦い方ではなく実際に拳を交えてきたがな」
「けれどこっちの世界ではそうなんだよ」
校長は自分のいる世界の理屈から天道達に話す。
「試験召喚システムにおいて戦ってるんだよ」
「あれっ、ワームやネイティブがルールを守ってるのか？こちらの世界の」
加賀美はこのことに怪訝な顔を見せた。
「何かおかしいな」
「いや、おかしくはない」
田所はそれはそうではないと述べる。
「スサノオがそうした考えならな」
「そうですね。言われてみれば」
田所に言われてだ。加賀美もわかった。納得した顔で頷く。
そしてだ。こうも言う加賀美だった。
「じゃあこっちの世界でのスサノオの目的は」
「また見たいのか」
風間が首を傾げさせながら話す。
「こちらの世界でも」
「何を見たいってんだい？」
校長はすぐに風間の言葉に問い返した。
「それにそのスサノオだね」
「ワームやネイティブを操っている存在だ」
天道が校長に説明する。ここでもだ。
「それがスサノオだ」
「へえ、あの連中の王様か何かなんだね」
「もっと上だな」
「じゃあ神様かい？」
「そうだな。そう考えて問題ない」
「神様ねえ」

スサノオがそうした存在と聞いてである。そうしてだ。
校長はあらためてだ。こう述べたのである。
「それを倒せばワームとかネイティブは消えるんだね」
「少なくともここでの戦いはなくなると思うんだけれどな」
影山が校長に話す。
「あいつをどうにかしたらな」
「じゃあこっちの願いを言うね」
「あれか？やっぱりワームとかネイティブをどうにかして欲しいんだよな」
「是非ね。正直迷惑なんだよ」
笑って話す校長だった。
「毎度毎度いきなり出て来て喧嘩売ってきたらね」
「わかった。それならだ」
ここまで聞いてだ。天道は納得した声で応えた。そうしてだ。
そのうえでだ。校長に対して述べた。
「意見は一致したな」
「そうだね。お互いにあの連中をどうにかしたいのならね」
「この学園でワーム、ネイティブと戦っていいな」
「ああ。ただしね」
校長はさらに言う。
「あんた達にも試験召喚システムの中で戦ってもらうよ」
「その試験召喚システムとは何だ？」
神代がいぶかしむ目でそのシステムのことを尋ねる。
「どうして戦うのだ」
「つまりだよ。テストの点数がそのまま戦闘力になってだね」
校長はその神代達に対してシステムのことを説明する。

## 第十話　バカとテストと仮面ライダーその九

「それを元にして自分の代理というか分身の召喚獣を使って戦うんだよ」
「ワームは自分達の姿をそのまま召喚システムにしているんだな」
田所はすぐにそのことを察して言った。
「そしてネイティブも」
「そうみたいですね。この校長先生の話を聞いていると」
「では俺達もか」
「そうなりますかね」
「ちょっと見せてくれるかい？」
校長はここでライダー達に言った。
「あんた達の召喚獣を」
「構わない」
天道が応える。そうしてだった。
校長の言葉に頷く。他のライダー達もだ。
それをよしとした。それを見てだ。
校長は右手の親指と人差し指を合わせて鳴らした。己の顔の横でそれをするとだ。
ライダー達にだ。こう告げたのである。
「あんた達の召喚のやり方でいいよ」
「わかった。それではだ」
「変身！」
それぞれのシステムが来てだ。それがベルトに収まり。
彼等は変身する。するとだ。
それで召喚獣が来た。小さいがそれぞれの等身のライダー達がだ。
その彼等を見てだ。校長は満足した面持ちになり述べた。
「いいねえ。これは頼りになりそうだね」
「では戦わせてもらう」

「全面的に協力させてもらうよ」
校長は笑みを浮かべてライダー達の言葉に頷く。これで決まりだった。
ライダー達は校長、即ち文月学園の面々と共にこちらの世界に来ているスサノオと戦うことになった。そのことを決めてから校長室を出る。
その彼等のところにだ。あの影が出て来てこう言ってきた。
「よく来たな」
「貴様か」
「如何にも。私だ」
その通りだとだ。答える影だった。見れば。
その影はライダーのそれに似ている。その影を見て言う天道だった。
「本来の姿か」
「だがこの世界で再び君達と出会う時はだ」
「別の姿になるというのだな」
「とはいっても君達の知っている姿だがな」
「おおよそ話はわかった」
「ではだ。また会うことを楽しみにしていよう」
「待て」
しかしだ、去ろうとするスサノオにだ。

# 第十話　バカとテストと仮面ライダーその十

田所が声をかけてだ。呼び止めこう問うたのである。
「貴様はこの世界もやはりか」
「如何にも。退屈はだ」
「嫌いだからか」
「それはもう知っている筈だ」
馴染みの相手、まさにそれに対する言葉だった。
「私のそうした趣味はな」
「知ってはいる」
天道がそのスサノオに対して返す。
「だがそれでもだ」
「納得はしないか」
「戦う」
これがライダーの言葉だった。
「貴様が仕掛ける限りはな」
「ふふふ、そうでなくては面白くはない」
スサノオは影から話していく。
「私にしてもな」
「何故この学園にした」
「面白いからだ」
それが理由だった。スサノオの。
「試験召喚システムというものがだ」
「確かにな。話を聞く限りはだ」
「だからこそこの世界に来ているのだ」
スサノオは言った。
「楽しめるからだ」
「しかしだ」
矢車がそのスサノオに問う。

「そのシステムでは人は死なない」
「その通りだ」
「貴様はそれはいいのか」
「構いはしない」
人が死ななくてもだ。いいというのだ。
「私は今は人の生死は主に見てはいない」
「人がどうするかを見るからか」
「そうだ。私が見るのは生死ではない」
では何かというとだった。それこそが問題だった。
「人間そのものなのだからな」
「ではよく見ることだ」
天道がスサノオに言うことはこのことだった。
「俺達も。そしてこの世界の人間達もだ」
「見せてくれるのか」
「貴様が飽きるまでな」
「そうさせてもらう」
こうした話をしてだった。スサノオは天道達の前から消えた。そしてその後に残った彼等はだ。
一旦だ。こんな話をするのだった。
「ではまずはな」
「何処に寝泊りするんだよ、まずはそれだよな」
「ああ、そのことだけれどね」
ここでだ。校長が彼等のところに来た。彼女はまずこうライダー達に尋ねた。
「さっきの影があれなんだね」
「そうだ。スサノオだ」
まさにそうだとだ。天道が答える。
「俺達の永遠の敵だ」
「如何にもって感じの怪しい神様だね」
「何かと仕掛けてくる。用心することだ」

「そうさせてもらうよ。それでね」
校長からだ。話を変えてきた。
「あんた達の住む場所ならあるよ」
「それは何処なんだ？」
影山がすぐにそのことを尋ね返した。
「俺は何処でも寝泊りできるけれどやっぱりいい場所にいたい」
「うちの学生寮でどうだい？」
「あれっ、寮もある学校なのか」
「職員用も合わせてね。あるよ」
校長はその独特の余裕のある笑みで影山に話す。
「それぞれ個室で。丁度数は十空いてるよ」
「職員用と生徒用を合わせてだな」
「ああ。そこに入るといいさ」
「有り難い。俺達は両方の世界を行き来できるが」
それでもだとだ。今度は田所が話す。
「やはりこちらの世界に専念したいからな」
「そうだね。じゃあ部屋の鍵も渡すからね」
「わかった。それではだ」
最後に天道が応えそうしてだった。
彼等は校長にそれぞれの鍵を渡されそのうえでだ。その日は寮に入って休んだ。そしてそれからだ。新しい戦いに向かうのだった。
この文月学園の世界での戦いに。

第十話　完

２０１１・１０・７

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその一

第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップ

明久がだ。自分のクラスでぼやいていた。
畳の上に寝転がってだ。そして言うのである。
「もうさ。登校したらさ」
「早速襲われたのか」
「うん、あの緑の連中にね」
早速そうなったというのだ。
「本当にいきなりだったよ」
「それはもう毎度のことじゃろう」
秀吉が寝転がっている彼の横に座ってこう返した。
「特に言うことでもあるまい」
「今回は十匹もいたんだよ」
それだけいるから言うというのである。
「それが一度に襲い掛かって来てさ」
「で、どうなったのじゃ」
「今残り一桁しかないんだ」
点数がだというのだ。
「あと一回あったらそれこそ」
「ふむ。補習じゃな」
「もう嫌だよ」
明久はたまりかねた口調になっている。
「こんな状況が何時までも続くのかな」
「とりあえずさ。奴等何者なのよ」
美波が腕を組み気難しい顔で述べる。
「それで本拠地は何処なのよ」
「ああ、それだよね」

「そうよ。それがわかれば違うのに」
「とにかく何もかもがわかってないからね」
「しかもだ」
今度は雄二が言う。皆明久の周りに集まって座っている。
「向こうはこちらのことを全てわかっているな」
「校内のことも細かい場所まで知っておるな」
秀吉はこのことに気付いていた。
「とにかく何処にいても襲い掛かって来るからのう」
「敵は俺達のことを全部知っている」
雄二はまた言う。
「しかし俺達は向こうのことを全く知らない」
「非常にまずい・・・・・・」
ムッツリーニは現状を知りこう呟いた。
「ここままじゃもっと好き放題される」
「あの、ですが」
瑞希は困った顔でだ。顔をやや俯けさせて言った。
「どうして調べるんですか？相手のことを」
「ううん、とにかく何もわからないなんてさ」
明久はいぶかしむ顔のままだった。
「防戦ばかりでどうしようもないよ」
「情報はどうして集める？」
秀吉が言う。
「ムッツリーニ、調べられるか」
「調べたいけど無理・・・・・・」
これがムッツリーニの返答だった。
「神出鬼没過ぎて」
「そうだ。俺達は攻められる、狩られる側だ」
雄二もこのことを指摘する。
「このままでは狩られ続けるだけだ」
「こっちに狩る人がいれば違うのにね」

「全くだな。このままではやられっぱなしだ」
雄二は美波にも返す。彼等がこう話しているとだ。
クラスにだ。いきなり二人入って来た。彼等はというと。
何故かだ。一人は老人だ。しかももう一人は白い服で文月学園の制服ではない。
その二人を見てだ。雄二が尋ねた。
「どちら様ですか？」
「あの、ここ文月学園二年F組ですけれど」
瑞希はいささかピントを外して言った。
「何処かのお屋敷と間違えていませんか？」
「ふむ。汚いクラスだな」
しかしだ。白い服の男はだ。クラスの中を見回してこう言うのだった。彼等の言葉に応えず。
「これもまたショ、ミーンの学び舎なのか」
「はい、その通りです」
彼に対して老人が恭しく答える。
「それでもかなり酷い状況の部屋ですが」
「そうだな。まるで倉庫だ」
こうまで言う彼だった。
「ショ、ミーンの場所にしてもだ」
「全くでございます」
「何か凄い変わった人ね」
美波がその二人をいささか引きながら見ている。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその二

「御金持ちみたいだけれど」
「というか何なのじゃ、この人達は」
秀吉もいぶかしむ顔である。
「いきなり来たが」
「あの、どちら様ですか？」
明久が彼に問うた。
「転校生の方ですか？」
「俺のことか」
「はい、見たところ僕達より年上みたいですけれど」
「年齢のことは気にすることはない」
彼はぞんざいな態度のまま述べる。
「俺は気にしてはいない。そんな些細なことはだ」
「あの、些細じゃなくてですね」
「そういう問題じゃないと思います」
瑞希も恐る恐る述べる。
「あの、そもそも貴方は誰なんですか？」
「俺の名前か」
「はい。どなたですか？」
「俺は神代剣」
ここでようやくだ。神代は誇らしげに己の名を名乗った。
「全てにおいて頂点を極める男だ」
「それで幾つなんですか？」
「そんなことは些細なことだ」
あくまで年齢についてはこれで済ませるのだった。
しかしだ。ついこんなことを言ってしまったのだった。
「名門ディスカビル家の主として既に大学を出ている」
「今大学と言ったな」

「確かに言った・・・・・・」
秀吉もムッツリーニも聞き逃さなかった。
「では二十二歳より上か」
「そうなる」
「大学はオックスフォードだ」
さらに言うのだった。
「どうだ、名乗りはこれでいいか」
「あの、大学を出ているんですよね」
流石に雄二も引きながら神代に尋ねる。
「それでどうして俺達の高校に来ているんですか？」
「それも転校生って何なんですか？」
美波もかなり唖然となっている。
「あの、校長は納得してるんですよね」
「無論だ。あの老婆だな」
知っている口調だった。明らかに。
「中々以上の切れ者だな。爺やには及ばないが」
「有り難きお言葉」
「ではこれでいいな」
強引に話を勧める神代だった。
「俺はこれからこのショ、ミーンのクラスの一員なのだ」
「何処をどう突っ込んでいいのかな」
「訳がわからないです」
美波も瑞希もだ。神代の編入には唖然となっていた。
そして彼だけでなくだ。Ａクラスには。
天道がいた。彼は席で優雅に座りだ。コーヒーを飲み菓子を食べている。
その菓子を食べながらだ。彼は言うのだった。
「ふむ。豆乳を上手に使っている。美味だ」
「あのですね」
その彼にだ。秀吉と同じ顔だがそれでもスカートを履いている少

女が怪訝な顔で天道に声をかける。秀吉の双子の姉である木下優子である。彼女が問うたのだ。
「貴方一体」
「俺か」
「はい。急にクラスに入って来られましたけれど」
「俺は天道総司だ」
彼はこう名乗る。堂々とコーヒーを飲みながら。
そしてだ。足を組み座った姿勢で右手の人差し指で天を指し示して言った。

## 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその三

「天の道を往き総てを司る者だ」
「天道さんですか」
「そうだ。しかしさん付けなのだな」
「絶対に私より年上ですから」
見ればすぐにわかることだった。
「それに大学出てません？」
「それもわかるのだな」
「年を見れば」
「それもですね」
ここでだ。黄緑の蒲公英を思わせるショートヘアに栗色の目の利発そうな少女が天道に言ってきた。Ａクラスの一員で水泳部にも所属している工藤愛子である。
「何か風格がありますね」
「風格か」
「経験豊富ですよね」
何気に危ないことを言う愛子だった。
「戦いの」
「とはいってもこちらの試験召喚システムでは初心者だ」
「あっ、そうなんですか」
「訳あってこの学園に転校してきた」
「大学を卒業していてもですか」
「そうだ。だが俺の経歴は気にすることはない」
天道もまた堂々とそんなことはどうでもいいとする。
「そしてこのクラスの一員にもなった」
「ううんと。何かかなり釈然としないですけれど」
「私は全然納得できないわよ」
愛子はまだそれで済んだが優子は全くだった。

「いきなりこんな強烈な人が出て来るなんて」
「確かに強烈な人よね」
「それも校長先生が転校認めたって」
「訳がわからないなんてものじゃないわよね」
「うちの学校かなり強引なことしてきたけれど」
優子は尚も言う。全く納得していない顔のままで。だが彼女達が傍で立って話しているのに対してだ。天道は全く平然として言っていくのであった。
「少なくともだ」
「少なくともなんですね」
「俺は君達の敵じゃない」
「？っていうと」
愛子は天道の今の言葉から察した。あのことを。
「あの緑の連中のこと御存知なんですね」
「戦ってきた」
そうだったとだ。天道は言う。
「そしてよく知っている」
「それは本当ですか？」
眼鏡をかけた真面目そうな整った顔の少年である。髪は青緑でこれも奇麗に整えている。Ａクラス、そして学年の次席でもある久保利光である。彼が天道の言葉にすぐに問い返した。
「あの緑の者達のことを御存知なんですか」
「また言うがよく知っている」
天道は利光にも答えた。
「だからこそ君達の力にもなれる」
「そうらしいね」
「それはわかったけれど」
それでもだとだ。また言う優子だった。
天道に対してだ。首を捻りながら尋ねる。
「天道さん、お名前はわかりましたけれど」

「俺は何者か、か」
「天の道を往き総てを司る方なんですか」
「その通りだ」
「本来のお仕事は脚本家さんですか？」
優子は何故かこんなことを言った。
「若しかして」
「よく似ていると言われる」
「けれど違うんですね」
「職業は。今は学生だ」
この学園にいるからだった。まさにだ。
「そう思っていてくれ」
「納得できると思います？その言葉で」
「納得しないか」
「あの、だから強引過ぎるんですよ」
優子は天道に真面目に突っ込み返した。
「天道さんが悪い人でも私達の敵でもないことはわかりましたけれど」
「僕はそれだけわかればいいけれどね」
「僕もだ」
愛子と利光は納得していた。
「天道さん面白いし」
「こうした人がいてくれてもいいじゃないか」
「まああんた達が納得するのならね」
どうかとだ。また優子は二人の話を聞きながら述べた。

## 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその四

「私がどうこう言っても何か仕方がないし」
「そう」
濃いパープルのロングヘアに髪と同じ色の神秘的な瞳を持つ物静かな雰囲気の少女だｔｙた。そこには一見すると楚々とした美貌がある。脚は黒いストッキングで覆っている。
Ａクラス代表にして学年主席、霧島翔子だ。
翔子は天道のところに来てだ。こう言ったのである。
「天道さんは多分」
「俺がか」
「そう。これまで色々な戦いの中を生きてきた」
その天道を見ての言葉である。
「沢山の悲しみや苦しみも見てきた」
「それは」
「言いたくないのならいい」
天道を気遣ってだ。翔子はそれはいいとした。
「けれどその中で多くのものを身に着けてきた」
「色々あったのは否定しない」
それは天道自身もだった。その多くの戦いの中でだ。
「俺は仮面ライダーだ。戦いの中で生きる存在だ」
「仮面ライダー」
「後々わかる。仮面ライダーとは何かが」
こう言うのだった。Ａクラスの面々に。
「そして君達が今直面している現実についてもだ」
「というとあれですね」
利光がすぐに応える。
「あの緑色の一団」
「あの連中のことを御存知みたいですけれど」

「本当にちょっと教えてくれないですか？」
優子と愛子が天道にそのことを頼む。
「あの連中が一体何者かを」
「とにかく今あちこちでゲリラ戦ふっかけられて困ってるんですよ」
「人間だ」
彼女達の問いにだ。まずはこう答える天道だった。
「奴等もまた人間は」
「えっ、まさかそんな」
あの者達は人間だと言われてだ。優子は目をしばたかせて天道に問い返した。
「あの連中が人間なんて」
「本体の姿形も化け物のままなのですが」
利光もだ。流石に天道の今の言葉は容易には信じられなかった。
それでだ。こう言ったのである。いささか驚いた様な顔になって。
「それでもなのですか」
「確かに姿形は違う」
天道もそのことは言う。
「だがそれでもだ」
「人間なんですか。連中も」
「姿形の問題ではない」
天道は今度は愛子に応える形で述べる。
「心が人間のものならだ」
「それで人間だっていうんですね」
「その通りだ。人は心で人となる」
「ううん、深いですね」
愛子は天道のその言葉を聞いてだ。腕を組みだ。
唸る様にしてだ。こう言ったのである。
「じゃあ僕達は人間と戦っているんですね」
「その通りだ。そして見られている」
「何にですか」

翔子の言葉は敬語になっている。天道の方が年上でしかも敬意を払うべき相手と考えたからだ。それでだ。天道に対して敬語を使って尋ねたのである。
「私達は何に見られているんですか」
「神だ」
「神、ですか」
「まずは全クラスの生徒達を集めることだ」
天道は次には戦略戦術を述べた。
「そのうえで人間に当たるとしよう」
「あの緑の一団にですね」
「ワーム、そしてネイティブにだ」
利光が眼鏡に手をやって述べた言葉に返してだ。天道はその緑の一団の名前をだ。彼等にはじめて話したのだった。
その天道の提案はだ。彼がしただけではなかった。
明久は学校の屋上に出ていた。そしてそこでだ。
雄二にだ。こう話すのだった。
「神代さんは確かに突拍子もない人だけれどね」
「だが。それでもだ」
「何かさ。今の文月学園のことよくわかってない？」
「奇天烈な人だが戦い方は知ってるな」
「そうだよね。だからかな」
「ああ。AクラスからFクラスの全てのクラスを糾合する」
これこそだ。雄二が考えていることだった。

## 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその五

そのことを述べてだった。彼は明久にさらに言う。
「そのうえで奴等に決戦を挑む」
「ワーム、そしてネイティブにね」
「そのことだけれど」
不意にだ。二人のところにだ。
翔子はいきなり来た。そしてこう二人に話したのである。
「私達のところでも同じ」
「ああ、Aクラスにも仮面ライダーの人来たんだったね」
「確か天道さんだったか？」
「そう。その天道さんが言っていた」
こう二人に話す翔子だった。
「全てのクラスの戦力を一つにして」
「そのうえでだよね」
「ワーム、そしてネイティブと決戦か」
「あの人はただ偉そうなだけじゃない」
翔子は天道のそうしたところを既に見抜いていた。
「とても深くて。人がわかっている人」
「神代さんもだな」
雄二は神代について話した。
「あの人から聞いた話だがな」
「あの人は昔そのワームだったらしいんだよ」
明久が話す。
「それでもね。あの人はね」
「人間として一度死んで向こうの世界の神様に甦らせてもらって今は人間に戻っているんだ」
「それで仮面ライダーとして戦っているっていうんだ」
「あの人も凄く深い人だ」

「あの人達は信じられる」
翔子はこうも言った。
「一緒に戦える」
「そうだな。仮面ライダーか」
雄二は屋上のフェンスに背中をもたらせかけてだ。腕を組んで述べた。
「人間として戦う人達か」
「何故人間なのかだよね」
明久も今は真剣な顔で少し俯いて述べる。屋上のフェンスの傍で。
「心が人間ならって言ってたけれど」
「神代さんの話は嘘じゃないな」
雄二は本来ならとても信じられない話を事実だと確信して述べる。
「間違いなく本当のことだ」
「そうだよね。ワームにお姉さんを殺されて自分もワームに殺されて」
「長い間そのワームが擬態していたっていうからな」
「そんな話嘘じゃ言えないよね」
「大体あの人はどう見ても嘘を言える人じゃない」
雄二は確信していた。このこともまた。
「誠実な人だしな。それにだ」
「それにだって？」
「御前と同じところがあるからな」
ちらりとだ。明久を見ての言葉だった。
「御前とな」
「僕とって？」
「ああ。御前と同じであの人にもな」
どうかというのだ。それは。
「馬鹿なところがある」
「何だよ、それって僕が馬鹿みたいじゃないか」
「馬鹿は馬鹿でもあの人の馬鹿はな」

「いい馬鹿なんだね」
「色々な辛さを知ってきた馬鹿か？」
雄二は神代の馬鹿をこう表現した。
「背負っているものがあるな」
「そのワームだったこと。姉さんを失ったこと」
「そうしたことを経験してきた馬鹿だ」
こう言うのである。
「沢山傷ついてもきたんだろうね」
「二回も死んだ位だからな」
「普通二回も死なない」
翔子も言う。
「そして他のクラスのライダーの人達も」
「各クラスにだからな」
雄二は翔子の今の言葉にすぐに応えた。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその六

「ライダーの人が来ていてそれで」
「皆それぞれ戦いを経てきている」
「その人達がこの世界に来た」
「絶対に何かある」
「そのワームとかネイティブの黒幕だな」
雄二はその存在について言及した。
「何者かわからないけれどな」
「スサノオっていうんだよね」
明久がこの名前を出す。
「連中の親玉って」
「最初はあれじゃったな」
秀吉達が急に出て来て話す。
「世界征服を考えておったらしいが」
「それが急に変わって人間を見る様になった」
優子は双子の弟に続いて考える顔で述べる。
「また急な路線変更ね」
「それはわかる」
翔子は優子のいぶかしむものに答える。
「自分の計画を潰していく人間、つまり仮面ライダーに興味を持ったから」
「あれだね。スサノオは牢獄に囚われたままで思考や分身だけを外に出せるらしいから」
利光も今はまともである。明久がいるにしても。
「世界征服も退屈凌ぎだったんだろうね」
「退屈凌ぎで世界征服ねえ」
愛子は腕を組んで少し苦笑いになって述べる。
「また極端なことするわね」

「肉体はずっと牢獄に囚われてるから退屈で仕方がないからなのよね」
美波も神代から聞いたことを頭の中で反芻させながら話す。
「それで世界征服よりも人間自体に興味を持った」
「世界征服は征服したら終わり・・・・・・」
ムッツリーニはぽつりと話す。
「けれど人間との相手は」
「人間がいる限り永遠に続きますね」
瑞希が一つの核心を衝いた。
「それこそ。人間は滅びない限り」
「考えれみればだ」
雄二は腕を組みだ。仁王立ちして述べた。
「ワームにしてもネイティブにしても俺達を何時でも皆殺しにできる」
「うん、召喚システムに入らないで直接攻撃すればね」
明久もそのことに突っ込みを入れた。
「学園内皆殺しだよね」
「俺も翔子もだ」
雄二は自分だけでなく彼女の名前も出す。
「流石に化け物が相手だと誰にも勝てはしない」
「それこそ仮面ライダーでないと」
翔子そのものずばり仮面ライダーのことを指摘した。
「体力勝負だと勝てない」
「それであえて召喚システムで相手してくれるって律儀だと思ってたけれど」
愛子はワーム達の中でもある存在について言及した。
「特にあの色々な色の。ワームなりネイティブが脱皮した連中ね」
「瞬間的に移動できるから余計に怖いからのう」
秀吉はその移動についても既に聞いていた。その神代から。
「クロックアップといったな」

「あっという間に出て消えるからタチ悪いって思ってたわよ」
「そう。あれが一番最悪だった」
優子とムッツリーニが話す。
「あれでいきなり襲われてばかりだったからね」
「ずっと受け手に回ってた・・・・・」
「けれど天道さん達からそのことを聞いたら納得できたわね」
「何とか」
「あらゆることがわかってきたのはいいことだよ」
利光は情報を肯定的に捉えていた。
「相手の意図もわかった。なら僕達が採る行動は一つ」
「敵を迎え撃つことですね」
瑞希は利光のその話に続いた。
「仮面ライダーの人達と一緒に」
「俺達は今回仮面ライダーの人達と共闘することになるな」
雄二がまた言う。
「さて、具体的にどういった決戦になるかだが」
「そう。天道さん達ならいける」
翔子はこう言ってからだ。雄二に対してとんでもないことを何気なく述べた。
「戦いに負けたら」
「どうだっていうんだ？」
「結婚」
言いながらだ。制服のポケットから婚姻届を出してきた。もう翔子のサインと押印がある。しかも何時の間にか雄二のサインや押印までしっかりと為されている。
その婚姻届を見てだ。雄二は青い顔で翔子に問い返した。
「おい、負けたらまさか」
「そう。雄二と私が結婚する」
まさにそうなるというのである。
「宜しく」

「おい、何でそうなるんだ」
「負けても気落ちしないようね」
雄二から顔を少し逸らして頬を赤らめさせての言葉だった。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその七

「だから」
「そんな論理が何処にあるんだ」
「ここにある」
とにかく強引な翔子だった。
「そういうことだから。私は負けても構わない」
「糞っ、ここは何としても勝つぞ」
雄二の後ろに督戦隊がついた。
「いいな。ワームだろうがネイティブであろうがだ」
「まあ負けたらまた補習じゃ」
秀吉は現実味のあることを言った。
「正直勝たねばならん戦じゃな」
「そのスサノオの思うままっていうのは癪に触るけれどね」
明久はこう言ってもだった。
「けれど。僕達だって意地を見せないとね」
「それに神代さんの必死さを見てたらよ」
「そうです。何か頑張らないといけないと思います」
美波と瑞希は神代のその心根を見て既に決意していた。
「確かに凄くずれてる人だけれど」
「御心は確かな方ですから」
「そうそう。天道さんだってそうだしね」
愛子も天道の心はもう見ていた。それ故の言葉だった。
「凄く唯我独尊な人だけれど妹さんのことを全てを賭けて守ろうとした人だし」
「若し僕が吉井君に出会わなかったら」
利光はやはり変態だった。恋愛に関しては。
「天道さんを好きになっていたよ」
「友人としてだよね」

ただし当の明久は気付いていない。全く。
「確かに天道さんも立派な人みたいだしね」
「うん。確かに素晴らしい人だね」
利光はその彼を見ながら話していく。
「吉井君、君と同じで」
「とにかくよ。まずは六つのクラスが集ってよね」
美波がまた話す。
「それでライダーの人達と作戦会議よね」
「そうそう。仮面ライダーは全部で十人いるのよね」
優子はこの世界に来ているライダー達の話をする。
「全員がクロックアップ使えるtって聞いてるけれど」
「そのうちの二人はハイパークロックアップを使える」
ムッツリーニはこう指摘する。
「何でも時間さえ行き来できるらしい」
「それって無敵ですよね」
瑞希もそのハイパークロックアップには驚きを隠せない。
「時間まで動かせるって」
「それだけ手強い相手なんでしょうね。スサノオって」
愛子はこう考えた。
「そんな能力まで必要になるなんて」
「果たして僕達で勝てるのかな」
明久は弱気なことも言った。
「神様になんて」
「誰もがそう思うじゃろ」
それは自然だとだ。秀吉は述べる。
「しかしそれはじゃ」
「それでもなんだ」
「うむ。あの人達も言いはせぬが」
「思ってるんだね」
「人が神と戦うのは容易なことではない」

神、その存在について意識すれば意識する程だというのだ。
「しかしあの人達は戦っておる」
「じゃあ僕達も」
「そうだな。奴等は俺達と同じ土俵にわざわざ上がってきているんだ」
ここで言ったのは雄二だった。これまで以上にしっかりとした言葉だった。
「それで怖気付いていたら何にもならない」
「そう。むしろ試験召喚システムに慣れていない天道さんの方が辛い筈」
翔子は雄二に続いた。
「けれどあの人達は何も言わずに戦うと決めてるから」
「それなら俺達もだ」
雄二が言うとだった。ここにいる誰もが無言で頷いた。そこにだった。
不意にだ。彼等の周りにだ。昆虫と人間を合わせた様な緑の姿の者達が出た。そうしてだ。
彼等に一斉に襲い掛かる。その彼等を見て優子が叫んだ。
「ワーム！出て来たわね！」
「いけない。召喚システムは！」
「そこか！」
その彼等のところにだ。いかつい顔に逞しい身体をしたスーツの男が来た。黒い髪は短く刈られそれが彼を嫌が応にも男らしく厳格に見せていた。
この学園の象徴とも言っていい生活指導の教師西村宗一、通称鉄人である。彼が生徒達のところにいきなり出て来た。そして彼だけではなかった。
オレンジの左右をカールにした小柄な少女も来た。制服は文月学園の制服だ。トパーズ、いやオパールを思わせる輝きの目をしている。清水美晴、二年Ｄ組の生徒だ。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその八

美晴はだ。美波のところに来て言った。
「お姉様、助太刀に来ました！」
「えっ、あんたもなの」
「こんな化け物共私一人で！」
「よし、試験召喚システムの使用を許可する！」
鉄人がそれを許そうとする。しかしその前にだ。
ワーム達の方からだ。それをしてきた。
「くそっ、またか！」
「やっぱりこうなるのね」
愛子は無理矢理召喚システムに入れられ苦笑いを浮かべる。だがそれは他の面々も同じだった。
誰もが召喚され戦いの中に入る。誰もが一斉にだった。
「サモン！」
こう叫んでだ。召喚獣を呼ぶ。明久も黒い長ランのそれを呼んでだ。
戦いに入ろうとする。だが助っ人は美晴だけではなかった。
ここでだ。風間が来たのである。彼は美晴に対して言う。
「遅れてすまない」
「風間さん、来てくれたんですか」
「ああ、約束だからな」
微笑んでだ。美晴に対して言ったのである。
彼は悠然として明久の前に来てだ。こう言った。
「俺も戦う。仮面ライダーとして君達と共に」
「頼めるか」
「はい」
鉄人にもだ。普段の飄々としたものではなく真面目な面持ちで返す。

「任せて下さい」
「わかった。では頼む」
こうしてだった。彼も試験召喚システムでの戦いに加わる。その彼を見てだ。
ムッツリーニはだ。ぽつりとこう言った。
「そういえば仮面ライダーの人の召喚システムは」
「それが問題だね」
利光もどういったものになるか。興味があった。
「僕達は普通は二頭身の小さいもので妖怪のみ等身大だが」
「それがどうなるかじゃな」
秀吉もかなり興味があった。
「風間さんだけでなくライダーの方の召喚システムはどういったものか」
「戦闘力？まあ学力も気になるところね」
「そうです。正直かなり見たいです」
美波と美晴も注目する。その彼等の視線を背中に浴びながら。
風間は変身に入る。その右手に銃を出し掲げてだ。そこに水色の蜻蛉の形のシステムが留まりだ。
風間は一言だ。こう言った。
「変身」
「変身！？」
「サモンじゃなくて」
「変身」
「そう言ったけれど」
明久達が言うのと共にだ。彼の身体を少しずつ、新しい皮膚が覆う様にしてだ。鎧の如き重厚な姿になった。その姿は明久達の召喚獣と違い風間と同じ位だ。等身も違う。
そして彼の前に立つワームもその仮面ライダードレイクと対峙する時は同じ大きさになっている。それを見てだ。
明久達はこう話すのだった。

「何か大きさが違う」
「ワームとかネイティブって大きさも合わせてくれるんだ」
「何か意外と紳士的？」
「そんな感じ？」
何気にそうしたことにも気付いた。そのドレイクがワーム達と対峙する。その学力は。
「これは」
「かなりね」
「ああ、俺達が束になっても適わないな」
桁が一つ違っていた。それは優に鉄人、いや校長並はあった。それを見てだ。明久達は唖然として言うのだった。
「仮面ライダーって頭も必要なんだね」
「生き残るには頭脳も必要か」
「確か風間さんも大学出てますよ」
美晴がこのことを話す。
「城北大学、あちらの大学の芸術学部卒業だそうです」
「じゃあ特に強いのは美術なんだ」
明久はすぐにそのことがわかった。
「ええと、じゃあ美波とそこは似てるかな」
「ええ、うち絵は得意だから」
何気にそうしたことが得意な美波である。
「けれど。仮面ライダーってこんなに強いの」
「あれなら私達が束にならないと勝てない進化したワームやネイティブにも勝てますね」
「そうね」
とにかくだ。普通のワーム達には楽勝であることはわかった。実際にだ。
銃撃の形でノーマルのワーム達を無傷で蹴散らしていく。それを見てだ。
雄二はだ。仲間達に言った。

「よし、俺達もだ」
「ああ、やろう」
「戦いだ！」
こうしてだった。彼等もだ。ワーム達との戦いに入る。ドレイクと共にだ。

## 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその九

ドレイクは普通のワーム達を銃撃の形でだ。テストで次々と倒していく。まさに圧倒的だった。
だが、だった。彼の前に立つ最後のワームがだ。
脱皮してだ。そして赤い百足を思わせる姿になった。そのワームを見て明久が言う。
「あれっ、レッドムカデ？」
「馬鹿、それは世界が違うぞ」
雄二がすぐにその明久に突っ込みを入れる。
「あれは人造人間の人達の世界だぞ」
「あっ、そうだったんだ」
「そうだ。また違う世界の存在だ」
こう注釈を入れるのだった。
「もっとも造物主は同じ方だがな」
「何でそこ敬語なの？」
「あの人達仮面ライダーさえ生み出した偉大な方だからだ」
流石にその偉大な賢者だけは敬語にならざるを得なかった。さしもの雄二といってもだ。
そうしたやり取りも入れてだ。その百足を思わせるワームはドレイクに向かう。それを受けてドレイクはだ。静かにこう言ったのである。
「キャストオフ」
『キャストオフ』
機械声もしてだ。ドレイクのその鎧が四方八方に吹き飛ぶ。そうしてその中から先程とはうって変わったスタイリッシュなライダーが現れたのである。
そのライダーを見てだ。瑞希が呆然として言った。
「何か。凄く」

「強いぞ、あれは」
鉄人もすぐにわかった。そのことが。
「あの仮面ライダーは」
「ああ。それも相当な」
雄二もそう見た。実際にだ。
ワームが消えた。それを受けてだ。ドレイクはまた言った。
「クロックアップ」
「消えた！」
「風間さんも！」
確かに二人は消えた。だがその中でだ。
彼等はだ。闘っていたのだ。互いに超高速で動きながら攻防を繰り返す。
だが、だ。ドレイクの前への蹴りがワームを吹き飛ばす。それを受けてだ。
ワームは動きを止めた。派手に吹き飛ばされコンクリートに叩きつけられてだ。
姿も現す。それは明久達も見た。
「出て来たぞ！」
「それに風間さんも！」
ドレイクも動きを止めた。クロックアップを解除したのだ。そうしてだ。
銃を両手に構えて起き上がってきたワームに狙いを定めて。
「ライダーシューティング」
『ライダーシューティング』
また機械声がしてだ。それと共に。
銃からこれまで以上の光が放たれ。それがワームを撃ち。
大きく吹き飛ばして消し去った。それで終わりだった。
戦いが終わってからだ。風間は言うのだった。
「死にはしないんだな」
「そうだ。この学園の生徒は零点になれば補習だが」

戦いを終えた鉄人がその風間に話す。
「だがワーム達はだ」
「何処かに消えるんだな」
「そうだ。何処かで補習を受けているのだろう」
これは鉄人の推測である。
「そのスサノオとやらにな」
「成程。そうなのか」
「それでだが」
鉄人はここで風間をよく見た。そのうえでの言葉は。
「君は何もないか」
「特に深い傷は受けていない」
「そうだな。あれだけの戦闘を経てもか」
「これでも大学を卒業してるんでね」
風間は笑って鉄人にもこのことを話す。
「城北大学だ。こっちの世界にはないか」
「存在しないが中々レベルの高い大学の様だな」
「仮面ライダーでそこの卒業生は多いんだよ」
風間はさらに話す。
「まあそういうことでな」
「そうか。事情はわかった」
「で、他の子達は」
「はい、無事です」
「何ともありません」
明久と美波が応える。見れば全員補習は免れている。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその十

「僕達に来たのは普通のワームばかりでしたし」
「それも大半が風間さんにいっちゃいましたから」
「そうか。それは何よりだ」
風間は彼等の言葉を聞いて爽やかな笑みになった。その彼にだ。
美晴がだ。ふとした感じで言ってきたのだった。
「あの」
「どうしたんだ、今度は」
「実は聞きそびれていたんですけれど」
こうだ。風間にそっと近寄りながら尋ねたのである。
「風間さんがいつも背負っているそのバイオリンケースは」
「ああ、これか」
「それって何なんですか？」
その黒いバイオリンケースを見ながら尋ねていく。
「風間さんは芸術学部ですけれど音楽は」
「ああ、歌うけれどバイオリンは弾かない」
それは風間自身が言う。
「楽器はギターだな」
「それで何でバイオリンなんですか？」
「俺の商売道具が入ってるんだよ」
風間は微笑んでこう美晴に話す。
「ここにな」
「バイオリンケースにですか」
「俺の職業はメイクアップアーチスト」
このことはこの世界では実ははじめて話すことだった。
「この中には化粧道具が全部入っている」
「そうだったんですか」
「試しに見てみるか？俺のメイクアップ。名付けて」

不敵な笑みにもなってみせてだ。風間は話す。
「風間流メイクアップを」
「けれどお金かかりますよね」
美晴はこう言って断ろうとした。少なくともプロのメイクアップなぞしては高校生の小遣いでは払いきれないと思ってだ。それで断ろうとしたのである。
だがここでだ。風間はこう言ったのだった。
「いや、ここでは金はいい」
「いいんですか？」
「君達は仲間だからな。金は貰わないさ」
「仲間だからですか」
「それに君達はまだ高校生だ」
子供だということも踏まえての言葉だった。
「いいさ。メイクアップして欲しい娘は一歩前に出てくれ」
「一歩ですか」
「そう、一歩でいい」
こう美晴に話す。
「誰でもいい」
「ええと。それじゃあ」
まずだ。美晴が応えてだ。
「お姉様に少しでも奇麗な顔を見せたいですし」
「何か面白そうじゃない」
愛子は興味から一歩前に出た。
「僕もお願いします」
「ううんと。うちもやっぱり」
「女の子ですから」
美波と瑞希は少しだけ理由をつけてだった。
「どんなのか見せて下さい」
「風間さんのそのメイクアップ」
「私も。何か最近秀吉の方が女の子らしいって言われるし」

優子は双子の妹ではなく弟を意識してだった。
「御願いします」
「私は勿論」
そして翔子もだった。前に出て言う。
「雄二とのウェディングの時のお化粧をお願いします」
「おい、何でその時なんだ」
「結婚式は女の晴れ舞台」
翔子は雄二の抗議に頬を赤らめさせその頬に両手を添えて恥ずかしそうに話す。
「だから」
「くっ、もう決まっているっていうのか」
「許婚だから」
翔子はあくまでそれを言う。
「御願いします」
「そこの君はいいのかい？」
風間は女の子の他に秀吉も見ていた。
「ああ、君は男か」
「わかってくれるのか」
「わかるさ。その外見を見ればな」
「ううむ、風間さんは違いがわかる御仁か」
「仕事柄な。見慣れてるからな」
それでわかるというのだ。

# 第十一話　転校生とキャストオフとメイクアップその十一

「それじゃあ君はいいな」
「申し訳ない」
「よし、じゃあはじまるか」
バイオリンケースを無造作に地面に置くとそれだけでケースが開きだ。そうして。
風間は女の子達の間を駆け抜けた。その一瞬の間で。尚ここでもう一人前につまづいたが彼も巻き込んだ。
女の子達の顔が変わった。顔立ちのよさはそのままだが遥かに華やかになって。
そして彼女達それぞれにだ。手鏡を投げ渡して言うのだった。
「さあ、見てくれ」
「えっ、これが私ですか」
「あの、凄過ぎるんですけれど」
「ここまで奇麗になるなんて」
美晴も美波も瑞希もだ。鏡に映る自分の顔を見て唖然となる。そこには普段よりも三倍以上奇麗な自分自身がいた。
その自分達を見てだ。驚いているのだ。
愛子もだ。鏡で自分の顔を見てからだ。ムッツリーニに対して尋ねる。
「どう？今の僕」
「赤ザク・・・・・・」
ムッツリーニは自分の鼻を手で押さえながら答える。
「いつもの三倍」
「いけてるのに」
「風間さんもう犯罪」
最高の褒め言葉だった。
「凄過ぎる」

「おいおい、それは褒め過ぎじゃないか？」
「けれど本当に凄い」
ムッツリーニはまだ言う。
「これは風間流メイクアップ」
「そうさ。美を極限に引き出すものだ」
まさにそうだと話す風間だった。
「今回も成功みたいだな」
「はい、こんなメイクはじめてです」
優子もだ。自分の顔を手鏡で見ながら応える。
「風間さんって天才ですか」
「ああ、天才だ」
このことに関してはだと。風間は誇らしげに笑って言い切る。
「カリスマメイクアップアーチストだからな」
「それはいいんですけれど」
だが、だ。ここでだ。明久がこう言ってきた。
「あの、風間さん」
「ええと。吉井君だったかな」
「はい、そうです」
「どうしたんだい、一体」
「何で僕もなんですか？」
見れば彼もメイクアップされていた。それも実に見事に。
「女の子だけじゃないんですか？」
「いや、前に出たからね」
「あの、それは」
彼はたまたまつまづいただけだ。しかしそのせいで、だったのだ。
自分の顔を風間から手渡された手鏡で見ながらだ。こう言うのだった。
「これじゃあ完全に女の子じゃないですか」
「いや、しかしこれは」
「かなりの腕前だな」

秀吉と雄二はメイクの方に注目していた。
「これがカリスマの技術なのじゃな」
「男の俺が見ても凄いな」
彼等は素直に感嘆していた。しかしだった。
利光だけは違っていた。今の明久を見てムッツリーニにそっと近付きだ。
小声でだ。こう囁いたのである。
「今の吉井君の写真は」
「もう撮った」
ムッツリーニはカメラを見せながら利光に答える。
「安心するといい」
「有り難う。じゃあ後で買わせてもらうよ」
「うん」
そしてだ。利光だけでなくだ。
美晴もだ。ムッツリーニに近付いてそっと尋ねるのだった。
「お姉様の今のお写真は」
「撮ってある」
美波も既にチェック済みだった。
「後で」
「はい、わかりました」
「メイクが必要なら言ってくれ」
風間は彼等のそうした状況は見ないまま言う。
「何時でも引き受けるからな」
「はい、お願いします」
瑞希が目をきらきらさせながら風間の言葉に応える。
「このメイクなら絶対に」
「狙えるわ」
美波はもう相手を見ていた。
「風間さんっていう強い味方が来てくれたから」
「幾ら吉井君でも」

「あれっ、何でかな」
明久はこれには気付いた。ふと身震いをして言う。
「寒気がするけれど」
「気のせいじゃないのかい？」
風間がこう彼に返す。しかし彼は今見られていた。危険な六つの、三色の目に。気付かない方が幸せなこともあるのである。

第十一話　完

２０１１・１０・１４

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7982w/

---

仮面ライダー　エターナル＝インフィニティ

2011年12月7日02時53分発行